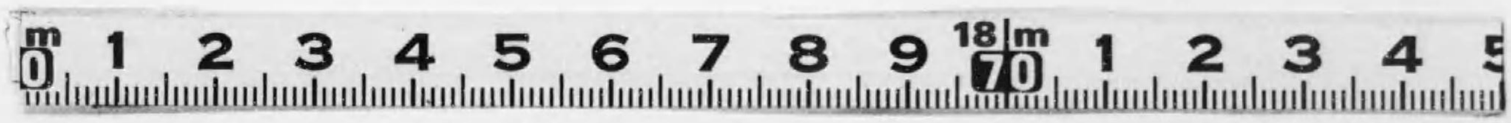
設



球野

505
27

醫學博士
木下東作監修

日本體育叢書

第五篇

野球

橋戸信著

大正14年2月5日
東京目黒書店發兌

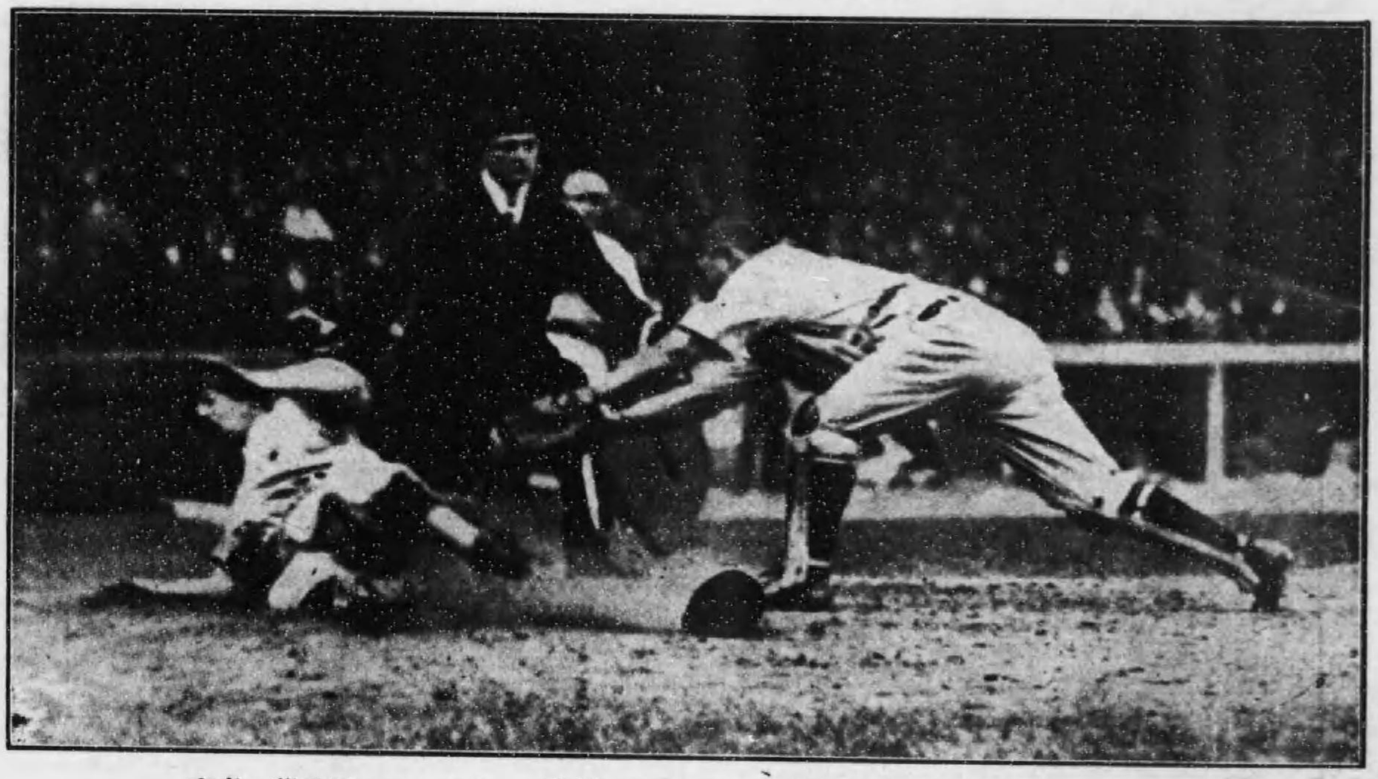
内交

運動家へ

春……フットボール
夏……水泳
秋……テニス
冬……スキーイング

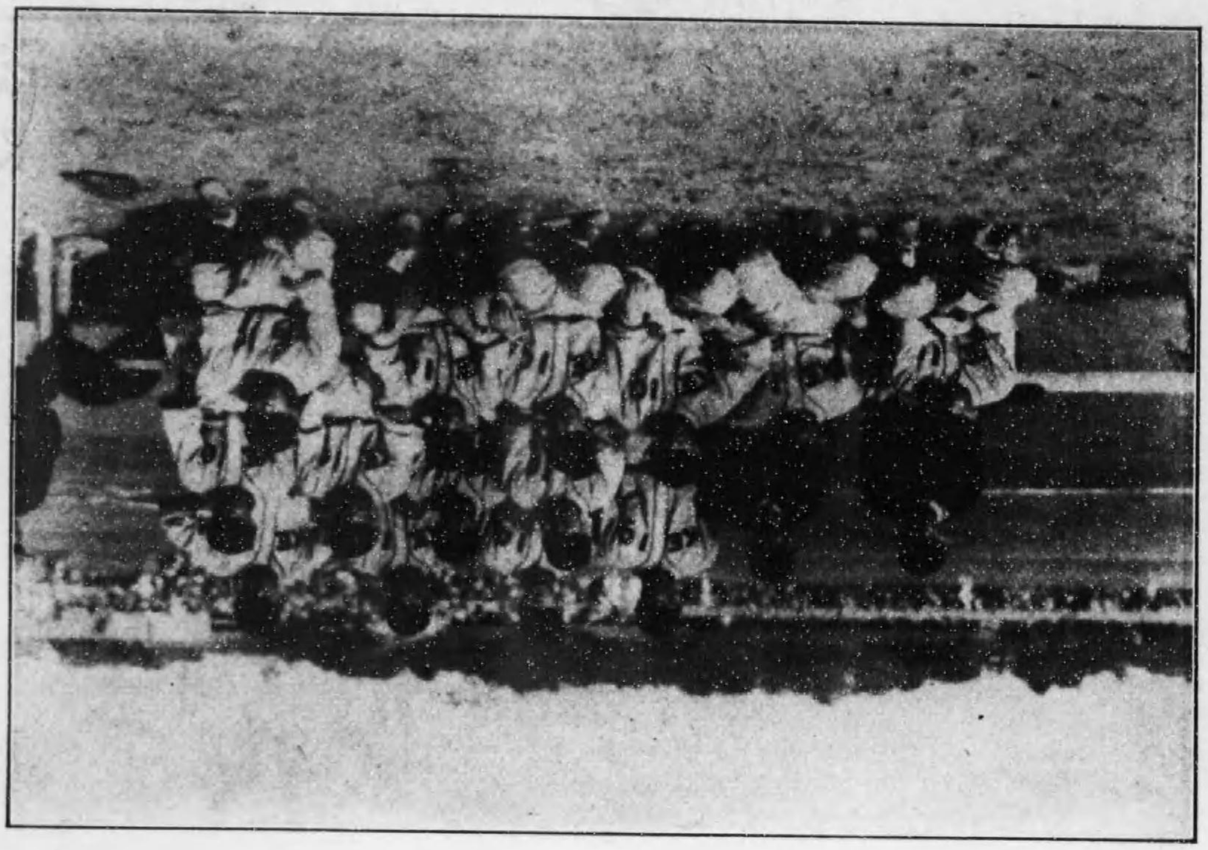
日本體育叢書

模範的のデセプチーヴ・スライド

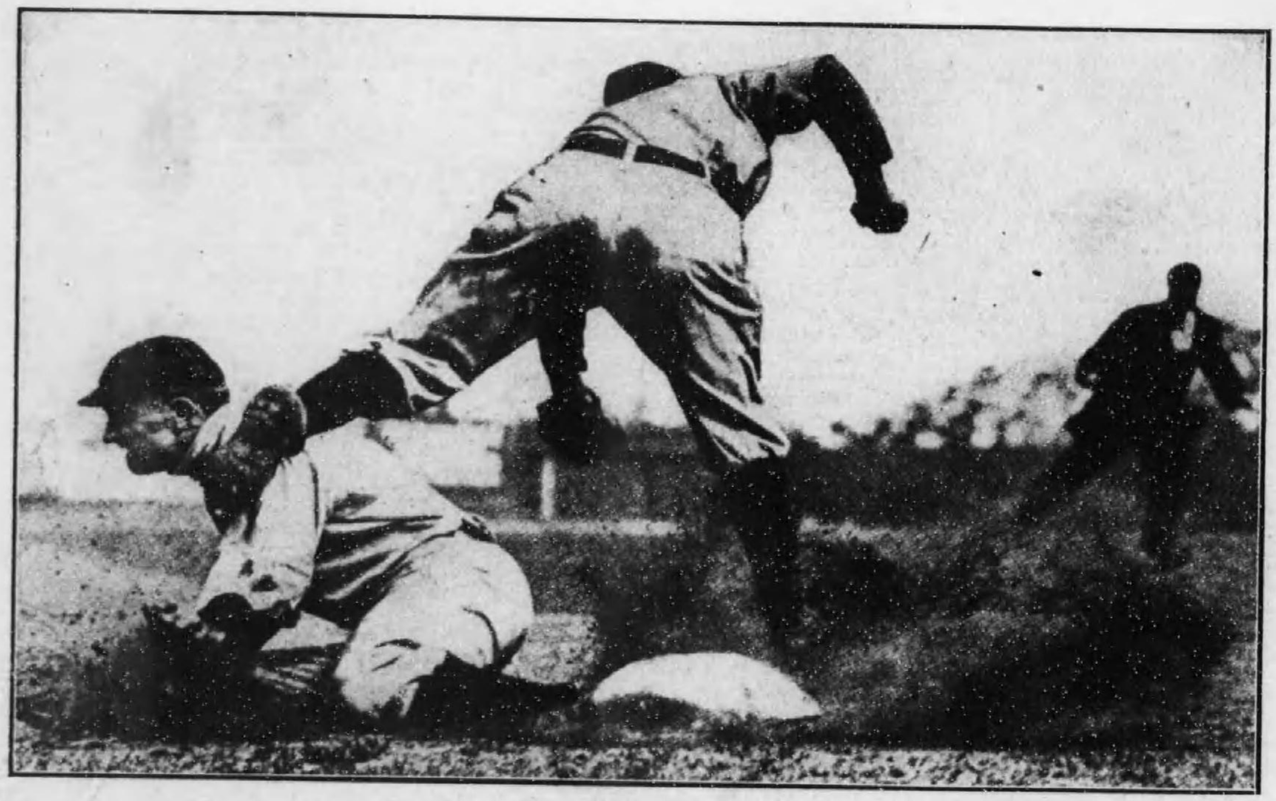


この時球は早くも捕手の掌中にあつたので、打者は觸球を避けんとして所謂デセプチーヴ・スライドを試みた刹那の光景

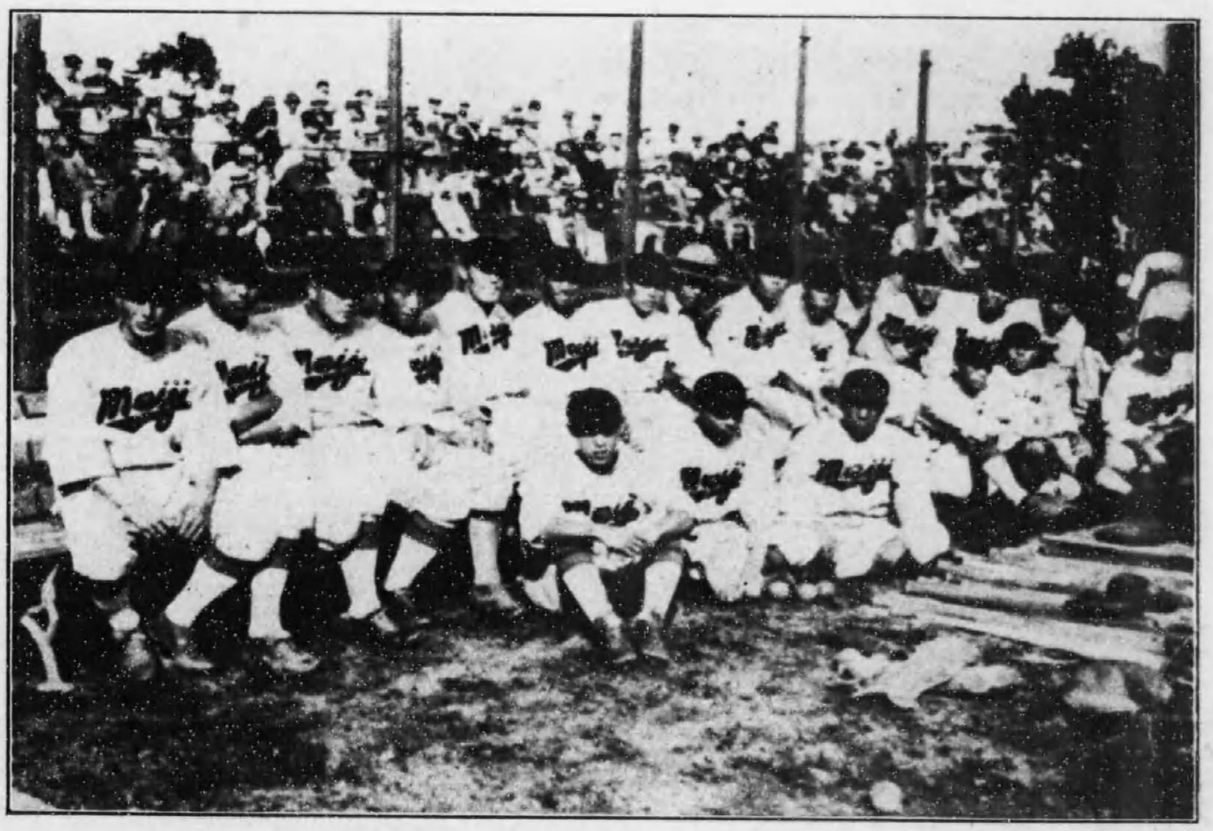
走者　華盛頓のコンロイ　　審判　エバンス　　捕手　クリーヴランドのランド



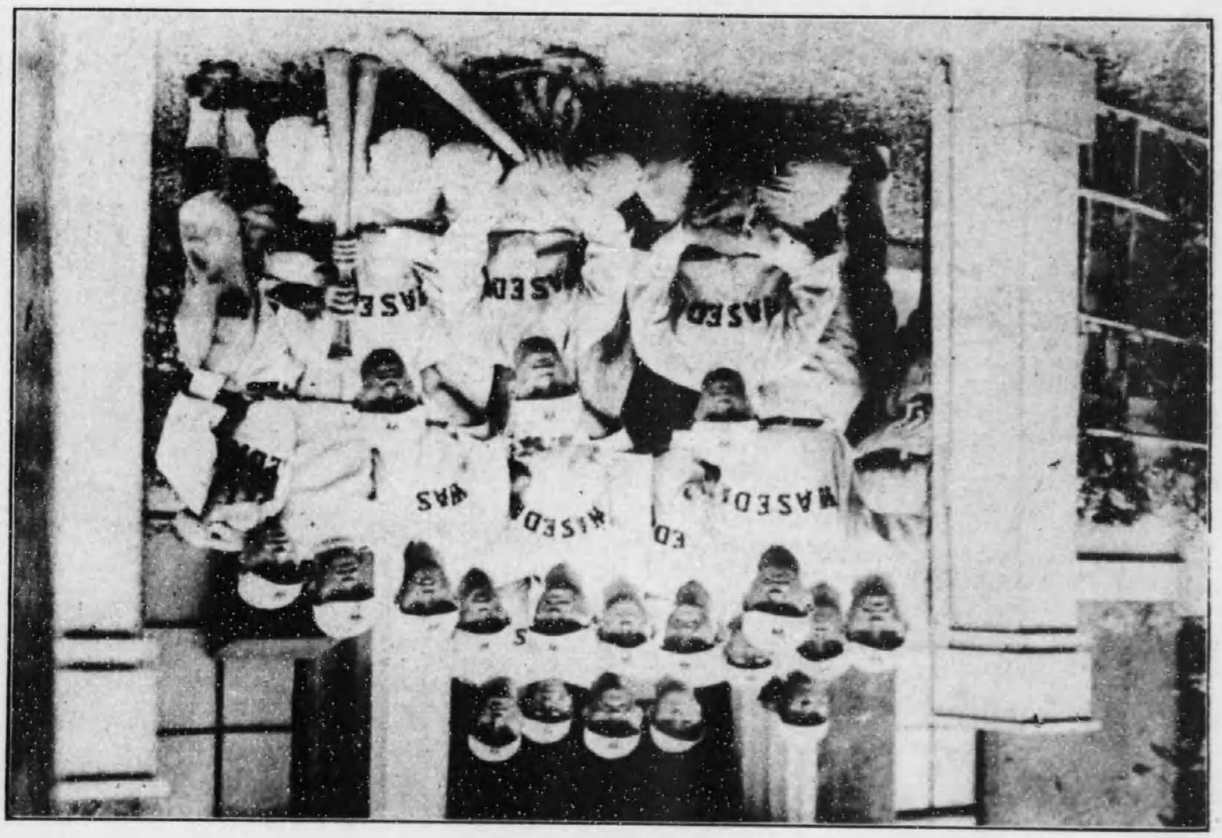
大正十四年秋期の慶應チーム



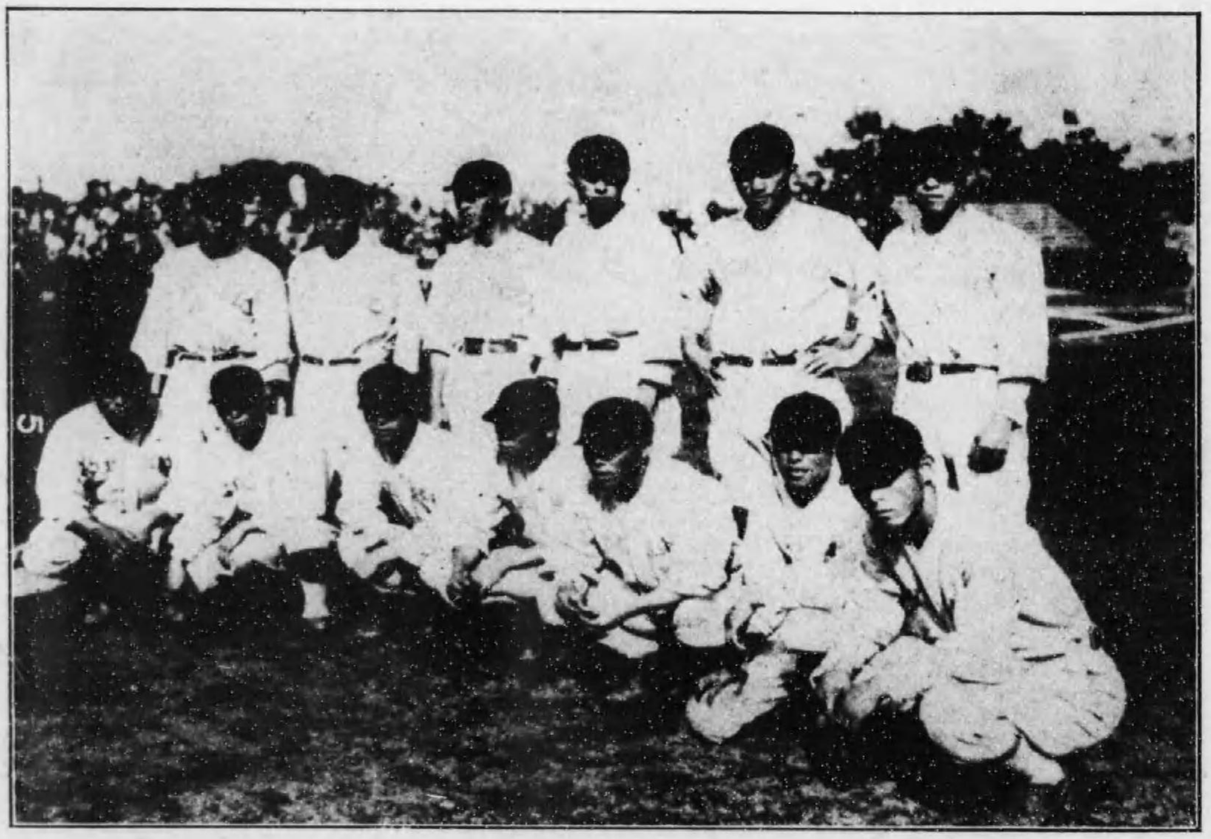
タイ・カツブの得意とするフツク・スライドに成功せる刹那



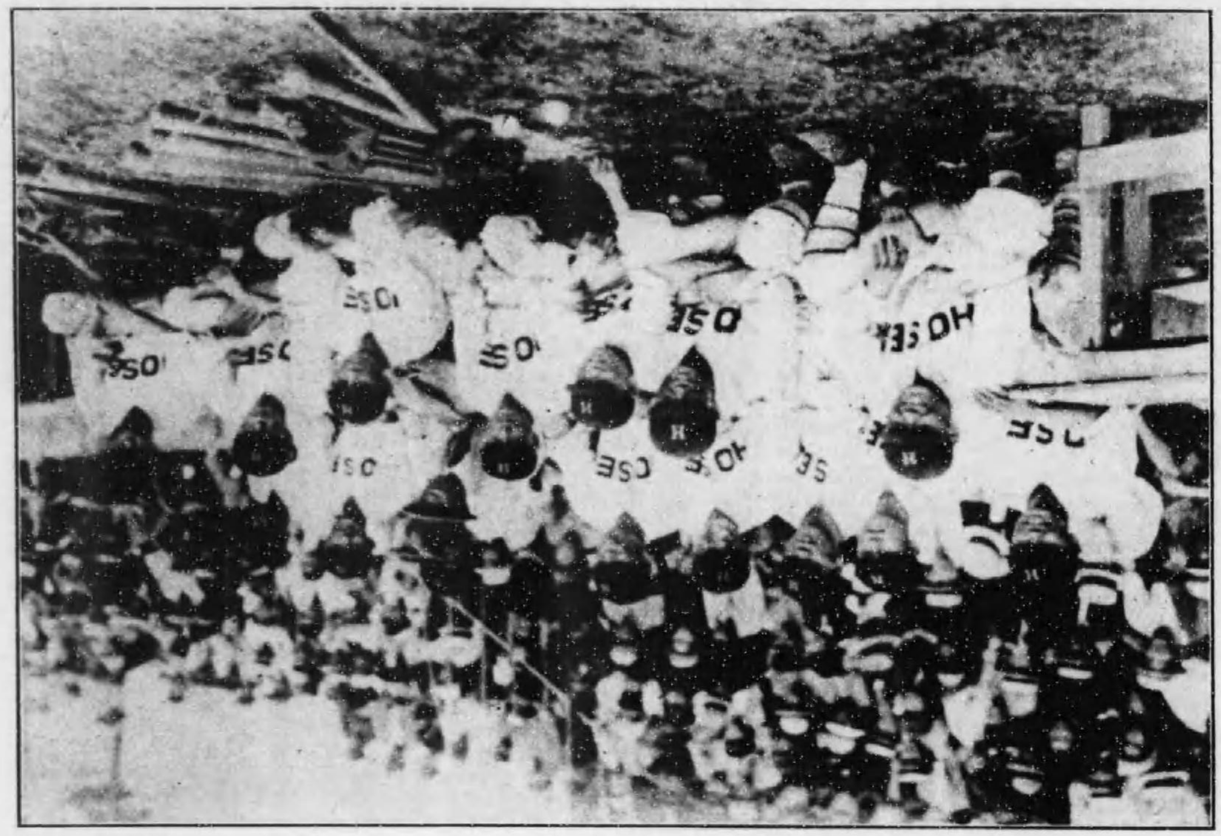
大正十四年秋期の明大チーム



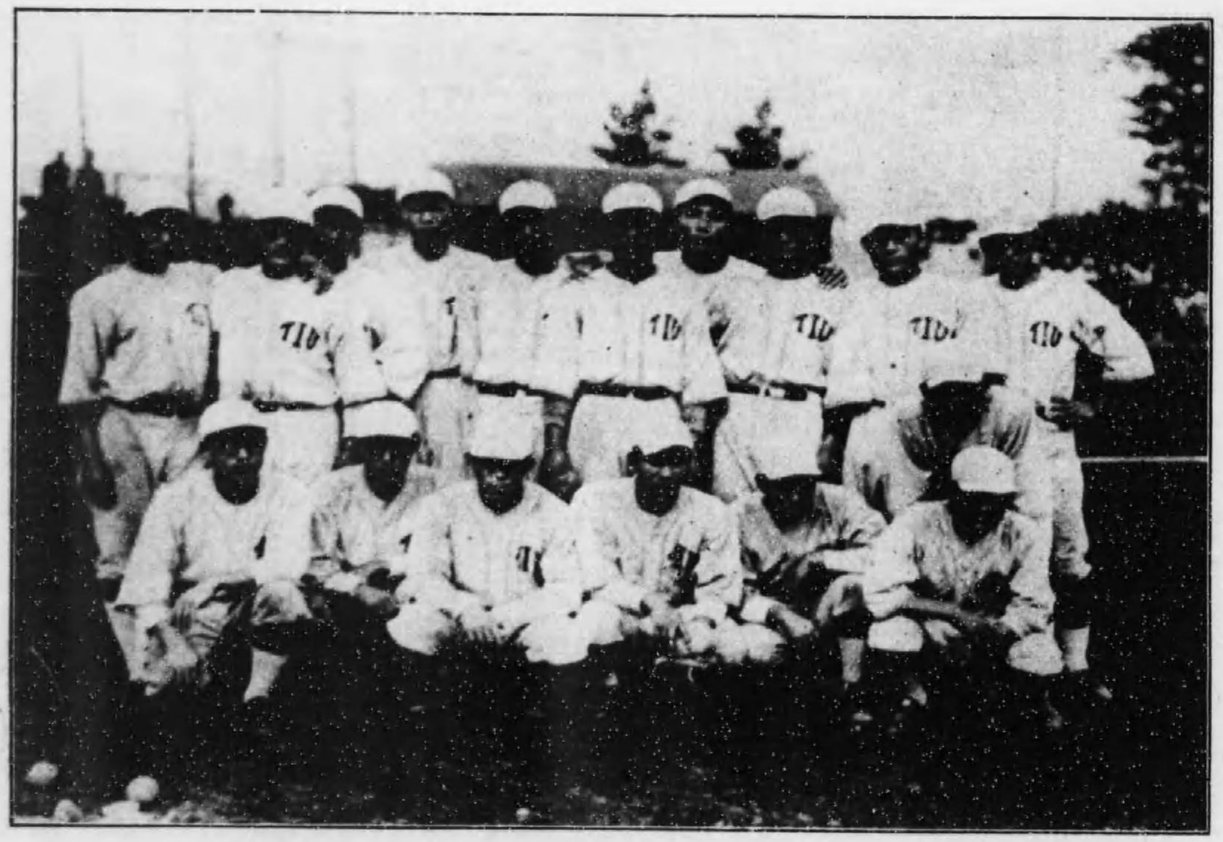
大正十四年秋期の早大チーム



大正十四年秋期の立教チーム

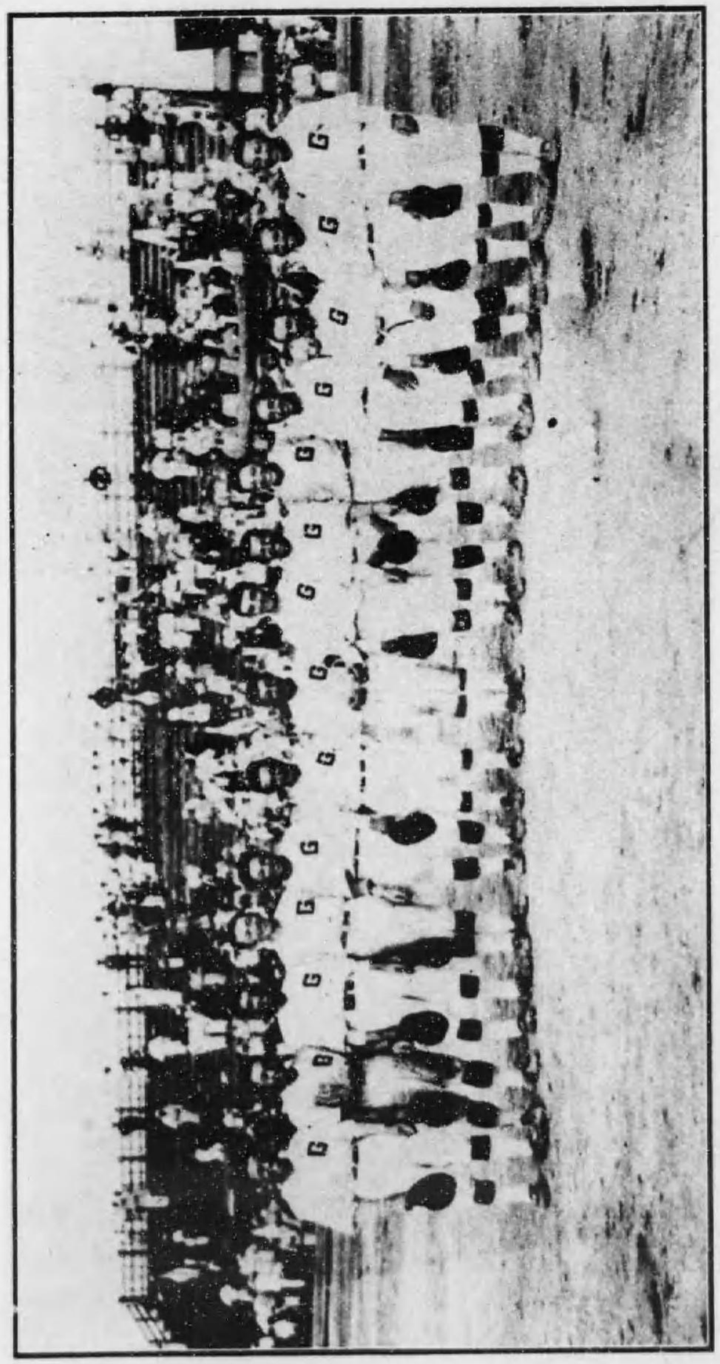


大正十四年秋期の法政チーム



大正十四年秋期の帝大チーム

大正十四年秋期の一高チーム



大正十四年秋期の學習院チーム

明大チームの五大勢力

安田投手

湯淺投手

梅田一壘

天知捕手

中村投手

早大の至寶、怪腕と健棒

藤本投手

竹内投手

宮崎捕手

山崎二塁

井口三塁

慶應の五大勢力

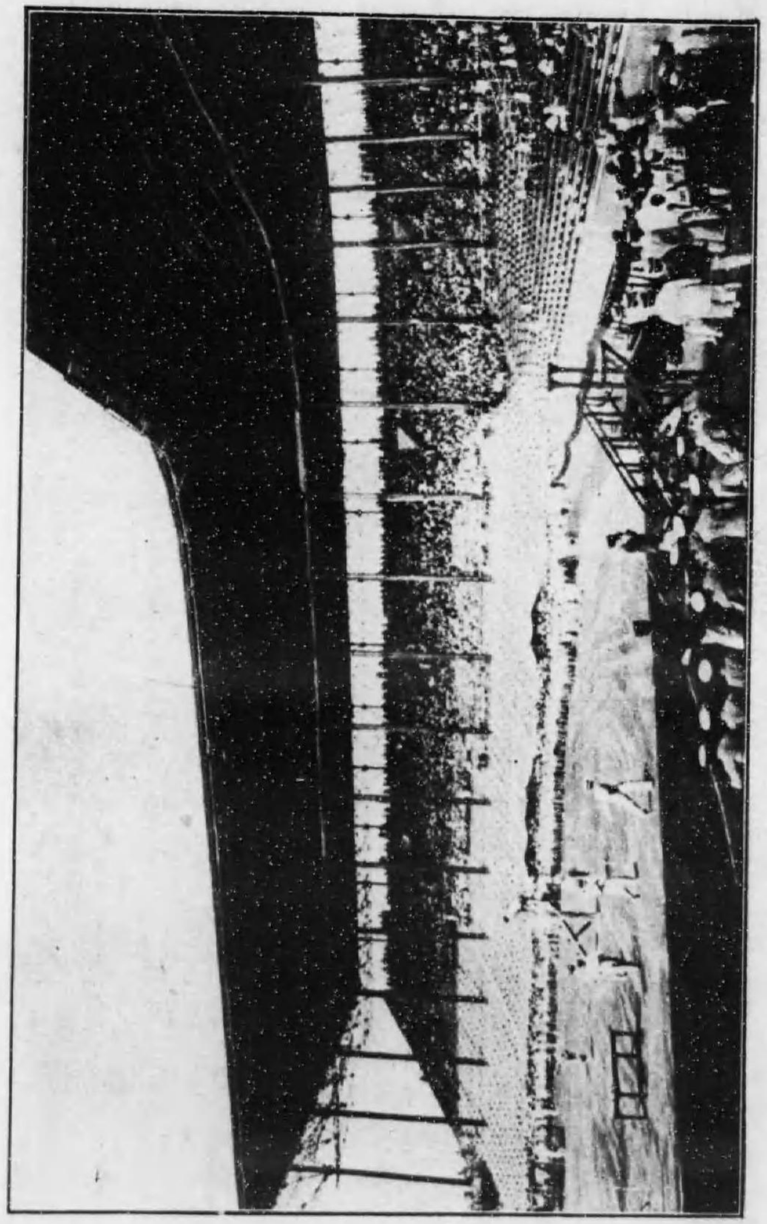
永井投手

岡田捕手

濱井投手

橋本捕手

濱崎投手



東洋第一のスタンド阪神間甲子園球技場

505-27

序

我國の野球競技が日一日と普遍されるにつれて、參考となるべき書物は可なり多く出版された。最近のものとしては三宅大輔氏の「野球」谷口氏の「投手としての投球術」腰本壽氏の「野球」など何れも堂々たるもので、野球技の蘊奥は殆んどこれ等によつて盡されてゐる。野球技が根本的に新らしくならない以上は、これ以外の著述は殆んど無用であるかも知れない。されど私は辛うじて他に書き得る天地を見出した、それは物語を通じて見たる野球である。米國に野球が呱々の聲を擧げてから八十餘年、日本に紹介されてから五十餘年を經過した間に起れる出來事の中には、可なり傳ふべきものがなくてはならない、私の行く道は正に此所である。

かくて私は成るべく新らしく活字にされたる内外の書物を渉獵した結果、先づ「歴史としての野球」に、彼我五十年間に起れる重なる事件を對照し「物語としての野球」には、マグロー將軍の自叙「私の野球生活三十年」から、野球家にとつて指南車となるべき挿話を拾ひ、更に華軍の監督バッキー・ハリスの新著から「技術としての野球」を摘記し、東西大家の説をも網羅してその足らざるを補つた。相成るべくは物語の中から野球技の眞髄を探らんとした爲め、ハリスの新著はその骨子のみを傳へたるに過ぎない、これは最初の目的に添はんが爲めと、紙面の制限とに歸する點が多い事を諒とせられ度い。

大正十四年早慶の握手が成立せる秋

橋戸信

日本體育叢書　第五編　野球　目次

歴史としての野球……一

混沌時代……明治六年―二十年……一

はしがき―五十年前の野球―本岡氏の歸朝―子規と野球―一日がゝりの試合―デレクト・キッチの祖

一高時代……明治二十年―三十七年……二六

直傳のカーヴ―一高覇業の基礎―聯合試合の濫觴―初めて外人を破る―光榮の一八九四年―議員の大失態―一高の弛緩―一高中興の祖―世界選手權試合の起原―二十五歳の監督―吹き當てた大法螺―將星頻に動く―環境の序曲―愈よ巨人軍に入る―一高の危機―早慶の勃興―慶應また一高を破る―巨人軍の完成―大投手マシューソン

早慶時代……明治三十七年—大正十二年……七一
未曾有の强チーム—早慶戰の中止—一高早大に勝つ—早大の不振—明大野球部生る—球界頗る多事—アメリカン・リーグの擡頭—三大學リーグ戰成立—一高早慶を破る—市俄古三度來朝—外來チームの輸入超過—早慶明の鼎立—明大の覇業
早慶明鼎立時代……自大正十二年……一〇六
物語としての野球……一〇九
マグロー將軍の監督術……一〇九
舞臺が大きければ苦勞も大きい……一〇九
五十餘人の使者を派遣—ヤ軍を破りたる新戰法—學校生活の眞價—個人とチームとの關係—マークルの粗忽—奇妙な契約書
早慶戰の回顧……一四五
二十年來の再戰に際會して—外人の抱く誤解—三田山上のノック—三田の進境—早大チームの出現—疑問の謎—野球の民衆化—私學の二大權威—第一戰の開始—早大は球界の成金—早慶戰遂に中止—明大の努力—偉大なる時の力
ジンクスの正體……一六三
ジンクスとは何—籤覗みはジンクス—備前長船の一刀—小鰐の粗忽—「シッカリやれ」が祟る—不思議な禊合—女優の手紙—林遊擊の脫帽—バットの雨で勝つ—吉岡將軍と葬式
奇行監督小鰐先生……一七四
縱橫の奇策……一八一
ドイルの口笛—際どい策戰
選手の今昔……一八七

マグロー將軍の觀たる選手觀……一九一
スポーツと年齢……一九六
天狗倶樂部の人々—三田稻門の選手—鐵腕投手マギニチ——老人の天下—オールド・ボーイスの當り年
有料試合の表裏……二〇五
有料試合の濫觴—何時迄續くか—太夫の選手—際どい掛引—人知れぬ苦勞—寛大なる大阪—事勿れ主義
强健術から觀たるファン……二一三
ボール物語……二一五
術としての野球……二一八
野球競技の見かた……二一八
豫備知識の一—同の二—同の三—肩馴らしに注意—小野投手の告白—
フリーバッテング—打擊順の作成—監督の頭腦—飛田監督のノック—嚴肅なる瞬間—バッテリーは葡萄酒—選手交代のコツ—交代難の實例
一—同二—面白い打擊戰—打者の癖—走壘の巧拙—危機打者の操縱—審判の良否
名投手となるには……二三九
はしがき……二三九
投手となる條件……二三九
投手と巨人—ワルシュの告白—全國大會の投手—不動の教訓—投手と日常生活—身體の鍛練
投球術のＡＢＣ……二四七
我が二大投手—意外の悲劇—ピンペンの挑戰—シエリダン翁の裏書—小野、谷口の投法—野球の祕訣—野球の禪的方面

投手の資本……二五四
速球の威力—三種のカーヴ—全盛のアウ・ドロ—フエード・アウエー—十字火的投法—スロー・ボール—量よりも質—打者に對する研究—早慶の特長—明大の打法—缺陷を突け—二樣の凄い打者—緩球の効果—低い球は難物
投手の價値……二六七
投手の守備力—速球王の發憤—一壘のカバー—本壘の守備—マ將軍の忠告—投手の守備十則—投手と強打者
フリーク・バッテリー……二七四
マグローの實驗—球面の粗滑と曲折—卷添を喰つた唾球—ワグナーの缺陷—禁止條件を犯すな
投手はチームの礎……二八三
一高の覇業—一道の暗影—守山君の發憤—早慶並び立つ—内村投手の出現—偉材蘆田投手—百花燎亂の三田—寂しい影—早慶沈淪の秋—不斷の論爭—櫻井對河野—三田の雙璧—聖路易の來襲—投手難の早大軍—慶應の善戰—水際立つた投捕手—ヂャーデンの英姿—明大覇業の因
健棒よりも投手……二九六
打てなくて勝つたチーム—大マチーの舞臺—名投手團の威力—アダムスの殊勳—軍神の再來—猛烈な投手戰—二つの不思議—ウッドの奮鬪—黄昏烏雀悲しむ—ア軍の盛衰—ボストン軍の勃興—投手としてのルース—フエーバーの獨舞臺—花々しい投手戰—コベレスキーの快勝—投手の一騎打—ホイトの記錄破り—ハッギンスの苦心
投手の不老長生法……三一
投手術の箴言—若がへりの鍵—二つの祕訣—高價な犧牲—誤解され

たる齒科醫—私の自慢話—此の記錄を破るは誰—投手術の變遷—
大リーガーも人間—愉快な投手戰—投手の今昔—奇しき投球心理—
三振を焦るな—二樣の打法—投手と天候—思ふ樣にならぬ審判……三四
バッテングの祕訣……三四
名打者となる要素……三四
この意氣—バットの握り方—バットの均衡—視力とバット—ワッグル の方法—打球の姿勢—踏み出しの種類—天才的の型—理想的の型
—バットを平行に—球を見分ける事
ステップ・インとタイミング……三三
唯この一語—例外の二偉人—和製バーンスーコレクト・タイミング
—マグローの自叙—キーラーと云ふ人は—打擊の藝術味—我國のキーラーは—打擊の新傾向
打つか待つか……三四〇

スフインクスの謎—名手の記錄—恐ろしい「待つ人」—四球の研究—
彼我の名打者比較……三五〇
カップの發憤……三五八
左右兩方で打て
左手投手と左手打者—兩刀使ひの時代—一流選手の特徴—理想的の強打者—進步せざる打擊—因襲的野球—進化論から見て—興味ある懸案
捕手の心得……三六五
所要の體質……三六五
捕手の訓練法……三六七
實戰に關する注意……三六七
一塁手の心得……三六九

所要の體格……三六七
練習の要領……三七〇
二塁手の心得……三七一
所要の條件……三七一
守備上のつとめ……三七三
ダブル・プレイ……三七三
盗塁と觸球……三七四
遊撃手の心得……三七六
所要の條件……三七六
守備萬能……三七七
守備上のつとめ……三七八
三塁手の心得……三七九
所要の條件……三七九
守備のつとめ……三八〇
外野手の心得……三八二
外野手の資格……三八二
各種の注意……三八四
走塁の心得……三八五
審判に關する知識……三八六
はしがき……三八六
審判法の概念……三八七
塁審の役目……三八八
主審との協力……三八九
アメリカン・リーグの審判法……三九〇

目次

酷なる批判……三九一
審判員の立つべき位置……三九二
面倒臭い規則……三九四
名審判の裁斷實例……三九五
審判十六則……四一〇

日本體育叢書 第五篇 野球

橋戸信著

歴史としての野球

混沌時代

◇はしがき

野球競技が米國で產聲を擧げてから、今に約八十餘年の歲月が流れてゐる。而してこれが我國に傳來したのは明治六年の頃で、五十餘年の昔である。而白い事には米國で最も古く、且つ强固な職業團たるナショナル・リーグの成立したのも、丁度我が明治七年で、今年の二月二日は、その五十年記念に當ると云ふので、その際集會場に當てた紐育セントラル・ホテルで一大盛宴が開か

れ、米國大統領クーリッヂ氏を初め、各方面の巨頭より心からの祝福を受けたさうである。この意義あるゴールデン・ヂユビリーを記念する爲め、スポーディング會社囑託の記者、ジヨン・フオスター君は、過去五十年間に於けるナ・リーグの變遷を至極簡單ながら、頗る要領を得たる筆致で叙述された。これを一讀すれば宛かも彼地に於ける野球競技の繪卷物を見るが如く、今日の野球が如何なる變遷を經、如何なる洗禮を受けて淨化せるものかを窺ふに難くはない。記者はこれに巨人軍の名監督マグロー將軍が最近著述せる自叙傳中の記事を點彩して、動もすれば無味乾燥に流れ易き史實に血を盛り肉を添へ、且つ我が日本野球史上忘るべからざる事件と對照して、野球史を知らんとする人の參考に供し度いのである。但し一九〇三年アメリカン・リーグの創立と共に、記述すべき記事は頗る多方面に涉つてゐる。之をも併記すれば、更に興味深き事ならんも、餘りに繁雜、且つより以上の紙面を要するので、今回は割愛する事となし、マグロー將軍の自叙を以て、幾分その足らざるを補つた。

日本の野球史に關する事柄は、大朝發行の野球年鑑（拙筆に成る部分）横井鶴城氏の日本野球發達史、飛田忠順氏の早大野球部史、子規全集隨筆の部などを參照した事を附記し、併せて感謝の意を表する。

◇ 五十年前の野球

米國の職業團は、今を距る五十六年前、即ち一八六九年ハリー・ライトと云ふ人によつて成立されたもので、今のボストン・レッド・ソックスの前身をなしたものである。同氏は當時種々の反對を受けながら、決然として獨立せる職業野球團の旗幟を押立て、シンシナタ市で有名なる法律家エー・ビー・チャンピオン氏を倶樂部の總理に仰いで、總ての陣容を整へたのである。ライト氏は當時各方面で鳴らした一流の人々を網羅して、世の視線を此所に集中せしめ、先づ東方に向つて宣傳的の一大試合旅行を開始した。それより先、一行はナイヤガラのバッフワロー・チームを破りたるを手始めに、西紐育を經てマサチユセッツに到り、更に大紐育に入りて、時の最强チームたるミユーチユアルを四對二で破る迄十戰十勝の好記錄を擧げた。同チームは一時シンシナタに皈つて、附近のチームを薙斬りにしたる後愈よ西方遙か桑港に達する旅程に上つたのである。その間の試合數は五十七回、ランを得る事二千三百九十五（一回平均四十二點强）本塁打は百六十九本で、毎回平均三本弱とは驚かされる。旅行哩數は一萬一千八百七十七哩、入場者の總數は

二十萬に達した。これが米國職業團の花々しい出發振りである。

◇

斯樣に目覺しい活躍をしたライト・チームも、財政難には打勝ち難く、一八七五年即ちナ・リーグ成立の一ケ年前に、スポーディング運動具店の創立者エー・ヂー・スポーディング氏の手に一切を委せねばならぬ運命に陷いつた。其所でスポーディング氏は自ら盟主となり、翌年二月二日、前記紐育市セントラル・ホテルの一室に斯界の權威者を集め遂にナショナル・リーグの旗幟を竿頭高く掲ぐるに至つたのである。此時臨時の秘書役となつたのは、前記のハリー・ライト氏であつたが市俄古、聖路易、ボストン、ハートフォートなどの代表者が互選の結果第一總理にはハートフォートのフォン・バルクレイ氏が選ばれ、華盛頓のヤング氏が最初の秘書となつた。バルクレイ氏は『フォン』が附く丈けあつて、名門出の人であつたに相違ない。

◇

この集會で決せられた個條には次の如きものがある。

一、同盟に屬する倶樂部は、他の同盟倶樂部選手たりし者を、絶對に雇入れる事を得ず（選手の誘引と云つたやうなものは嚴しく禁じられたもので、まるで今日とは趣を異にしてゐる）

二、選手の契約破棄、試合賣買、賭博、運動場内で酒類を賣る事、選手が試合に賭ける事を嚴禁（其頃場内では公然カケが行はれ、選手迄も仲間に入る事が怪しまれてゐなかつた、試合を金で賣る手合もあつたやうである）

三、投手はダイヤモンドの中心にある六呎四方の劃線内から投げ、アンダー・ハンドさへ用ゐる事は許されぬ（要するにクリッケットのやうに腕を曲げないで投げたものらしい、この時代にあつては今と反對に、極めて打ち易い球を投げるのを以て名投手としたものである）

四、選手權試合は、各チームが十回宛戰つた後決せられる、後略。

かくてナ・リーグは米國建國後、正に一百年、米國に於ける野球の誕生を距ること三十七年の春に於て創立され、連綿として今日に續いたものである。以下其後の五十年を簡單に叙述する。これ正に彼我野球史の鳥瞰圖であつて、取分け其間に疊まれたる規則の變遷などは野球技を研究する人々に取つて多大の興味を唆るものであらねばならぬ。

◇　平岡氏の歸朝

明治九年　我が野球界の恩人と云はれる平岡凞氏は此年米國より歸朝、神田三崎町の原にグラウンドを作りて、米國直傳の野球技を敎示した。鄕誠之助男の亡兄溫三氏、山田海軍大技士、山田工學博士、大久保前大阪府知事などは秀でたるお弟子さんで、就中大久保さんは當時蠻勇を以て鳴つたものである。これは開成校が初めて野球をやり初めてから約四年の後であつて、從來同校の敎師ウィルソン又はマヂエットの二人、若しくは我が陸上競技最初のコーチと云はるゝストレンヂなど云ふ外國人に敎へられてゐたものが、漸く邦人の直傳に移つた過渡期と云ふべきである。尤も開成校時代にありて、其頃來原氏を名乘つてゐた木戸孝正侯、同じく舊姓の大久保氏であつた牧野伸顯子などは、平岡氏よりも一二年早く歸朝して、米國の野球通を以て任じたものであつたが、察するに平岡氏程の腕前がなかつたらしい。

因に開成校時代の第一期選手には、久原躬弦博士、中澤工學博士、高木元五郎博士、織田顯次郎博士、石堂博士あり、次いで飯島博士、故小村壽太郎伯、古在農學博士、田中館博士、辯護士界の巨頭秋山源造氏などが、第二期の選手として活躍したものである。仙石貢氏、嘉納治五郎氏などは、今で云ふと應援團長として鳴らしたもので、其頃の吉岡將軍であつた。

西曆一八七六年　ナ・リーグにあつては市俄古優勝し、聖路易が第二位となつた。

野球期の終りに於て、貴府アスレチックスとミューチュアル倶樂部とは、西部の都會に於て試合すべき日程を無視して、戰はざりし罰として同盟から除名された。彼等は共に優勝圈内のチームなりしため、百方謝罪の道を講じたが、總理は頑として主張を貫徹した。

明治十年　日本では西鄕戰爭の眞最中と云ふに、平岡一派の野球熱は益す熾んになる許り、三崎町のグラウンドには、平岡一家を初めとして、前記の人々の外、學生では樺山愛輔、野澤房敬、山田文太郎、市川延次郎などゝ云ふ人々の顏も見えた。此時開成校の野球は漸次下火となつて、中心は平岡氏とその一派に集中されつゝあつた。

西曆一八七七年　ナ・リーグではボストン優勝。シンシナタ倶樂部は選手に支拂ふべき金がない爲め、自ら同盟から脫退した。財政難はこの倶樂部のみならず、總てがそれに惱まされてゐた。

ニコルス。ホール。クレヴー。デヴリンの四選手は、賭博者とグルになつて試合を賣つた爲め、ルイズヴィル倶樂部から放逐され、彼等の野球家としての生命は絕たれた。

◇子規と野球

明治十一年　平岡氏は新橋鐵道局の技師となつたので、その附近にグラウンドを作り、新橋倶樂部なるものを起した。恐らく我國に於ける倶樂部チームの濫觴であらう。これに就いて正岡子規氏はその隨筆中に左の如く語つてゐる。

『此技（ベースボール）の我邦に傳はりし來歴は詳かに之を知らねども、或は云ふ元新橋鐵道局技師（平岡凞と云ふ人が）米國より歸りて之を新橋鐵道局の職員間に傳へたるを初めとするとかや。（明治十四、五年の頃にもやあらん）それよりして元東京大學（豫備門）へ傳はりしと聞けど如何にや』

子規氏は平岡氏以前に野球が、我國に傳はりゐたるを知らなかつたと見える。又一方から見ると、平岡氏の新橋倶樂部なるものが、子規氏をして殆んどその以前の野球を無視せしむる程、左樣に盛大を極めたものかも知れない。

西暦一八七八年　ボストン再勝。本壘は一壘と三壘とのフワウル線が、正しく交叉する地點に置かれるやうになつた（その以前はどんな所に置かれたものであるか詳らかでない）

各壘の大きさは一尺五寸四方に規定せらる。

明治十二年　其頃德川達孝伯殊の外野球に趣味を持たれ、一門の公達を集め、希臘神話中の勇士『ヘリクリス』の名を取つて、自ら主宰するチームに附けられ、盛に新橋倶樂部などに挑戰したものである。惜しむらくは勝負のスコーアは傳はつてゐない。伯の邸宅は三田にあり、廣大なる庭園は、野球のグラウンドを作るに適してゐた。昔は大きな邸が澤山東京市内にあつたものらしい。庭内にテニス・コートは造り得るも、野球のグラウンドを容れ得るやうなものは、今日では殆んど皆無であらう。

西暦一八七九年　プロビデンス優勝しボストン第二位となる。ボストンのアーサー・ソーデン君は、各チームに四人の補缺選手を置くべき事を提議して採用された。其後補缺の數は漸次增加して、今日では一倶樂部の最大選手數が四十人に膨脹した。

野球競技の入場料を五十仙に値上げする。

明治十三年　前記の達孝伯は、殊の外野球の道具に凝つたもので、バットなどは何本となく御出入りの大工に作らせたが、どうも思ふ樣に行かない、大概は重きに過ぎて蒲柳の體質には不

向であつた。いろ〳〵思案の末、遂に桐のバットを作られたが、一度でボキリと折れ、大に失望されたと云ふ挿話を殘されたのは此の時代であらう。

西暦一八八〇年　市俄古優勝、プロビデンス第二位となる。

選手にして同盟の規約を犯した者は休場を命ぜられ、其間給料は支拂はざる事となる。若しこの罪科が重い時は、現シーズン許りでなく、次のシーズンに渉つて休場命令は連續する事あるべしと云ふ一項も附加された。

日曜日は安息日の故を以て、野球競技は禁止された。而して一八九二年（明治二十五年）迄その禁止は續いた。

打者が一壘を安全に取り得るのは、八個のボールを得た後と決定。

走者が打者の打つた球に當る時、アウトとなる規則は此年から實行される。

明治十四年　西暦一八八一年。市俄古また優勝、プロビデンスまた二位となる。

如何なる運動場にても酒類を賣る事能はず、と云ふ規約は、幾分閑却されてゐたが、此年から厲行された結果、それでは經濟が取れぬとあつて、シンシナタ倶樂部は同盟から脱退した（シンシナタは獨に選手の給料が拂へずして自ら退いたのであるが、察するにまた加盟したものと見える）

フワウルの後壘を離れた走者は、アウトとなる危險なくして、もとの壘に戻り得る新規則が出來た。

投手の位置は、從來本壘から四十五呎のものが、五十呎に延長された。

◇　一日がゝりの試合

明治十五年　新橋倶樂部は『保健場』と稱する新グラウンドを造つた。今から思へばおもしろい名であるが、米國によくある『リクリエーション・パーク』の名からヒントを得たのであらう。其頃新橋倶樂部から駒場などへ試合に行く時は、夜明けに出發して、星を頂かなければ歸れなかつた、全部テクであるから、肝腎な試合の時はもうへト〳〵になつてゐる、さうして試合は四十點も五十點も取り合つたものだから、それのみでも半日は費やされた。

西暦一八八二年　市俄古三度優勝、プロビデンスまた二位。

一壘に於ける三呎線が引かれるやうになつたので、此邊で出來る紛擾が甚だ少なくなつた。

審判は規則上の反則なき限り、一度下した裁斷を取消し能はざることが規定された。

八つのボールで一壘をとれたものが、七つのボールに切りつめられた。

明治十六年　平岡氏の歸朝後新橋倶樂部を起せるを『十四五年の頃にもやあらん』と書ける子規氏は、

『それよりして元東京大學（豫備門）へ傳はりしと聞けど如何や。又同時に工部大學校、駒場農學校へも傳はりたりと覺ゆ。東京大學校豫備門は後の第一高等中學校にして、今の第一高等學校なり』

と續けてゐる。察するに同氏は明治十六七年から二十年頃にかけて工部大學の投手であつたらしい。

西暦一八八三年　ボストンが久し振りで優勝し、市俄古、プロビデンスの順となる。

捕手がフワウルを一バウンドで取るとアウトであつたのが、此年から廢された。

明治十七年　この頃日本で行はれた野球競技は、今と丸で反對な點もあつた。即ち現今の投手が、敵打者の弱點を知つて、其所へ投け込む代りに、敵の長所を見定めて、其所へ投け得る人が名人と云はれた。捕手は總て一バウンド後の球を取る規定で、本壘の後方三四間の所に立つてゐるから、一壘から二壘、二壘から三壘までは盗み次第である。

又當時のストライクは三に分れ、眼から乳に至る間をハイ・ボール、乳から腰迄をフエーア・ボール、腰から膝に達する迄をロー・ボールと稱し、打者は其中好む所を審判に告げる。審判は大聲を張り上げて之を一同に傳へ、その要求以外の球は悉くボールに宣告されたのである。明治十九年の工部大學寄宿所報に『赤組は正岡子規と岩岡保作とが交互に投捕手となる』云々とあるが、實際其頃の投手は、一人ではやり切れなかつたものらしい。

西暦一八八四年　プロビデンス宿年の宿志を遂げて一位、市俄古、紐育が之に續いた。

ユニオン・アツソシエーションと云ふ野球の新同盟が出來て、尠からずナ・リーグを脅かした。

クリーヴランドは、ユニオンに選手を横取された爲め、シーズンの終りに近づいて脱退を餘儀なくされた。

プロビデンスの投手ラツドボーンは六十回の試合に勝つて新記錄を作つた。

明治十八年　明治二十年以前の投手は悉く直球のみを投げたもので、唯新橋倶樂部の平岡氏のみカーヴの出し方を知つてゐたさうである。されどこれは一子相傳の秘密として人に輕々しく

教へなかつた。前記岩岡保作氏は、心力を傾倒して研究の結果、遂にインとアウトの二カーヴを按出し、それが福島金馬氏によりて完成されたと云はれる。

西暦一八八五年　市俄古第一位、紐育之に續き、プロビデンスは第四位となる。

ブリオデー。グラスコック。マクコーミックの三選手はクリーヴランドを脱して聖路易ユニオンに投じ、更に戻つて來たので一千弗宛の罰金をとられた。其他五百弗位の罰金を取られて出戻りした選手も二三あつた。

ジョン・ワードと云ふ人は、選手を擁護する相愛倶樂部の如きものを設立した。六つのボールで一壘へ行ける事とする。

バットは一方を心持ち平たくするも差支ない事となる。

◇ デレクト・キヤツチの祖

明治十九年　此頃の捕手は、打者の後方三四間の所で、一バウンドの球を取り、スリー・ストライク目になると前進して、直接に投手の球を取るやうにした。捕手では農學校の町田、明治學院の白洲など有名で、第一高等學校の高田は、デレクト・キャツチの祖と云はれる。其後伊木と云ふ人素手を喜ばずして、手袋を用ゐたとあるから、町田、白洲など云ふ人々は、素面素小手でやつたものか。明治二十七八年の頃でも、剛毅を衒ふ爲めマスクを用ゐざる捕手をよく見たものである。また投手の球が遲くて打たれると、面當にミットをかなぐり捨てゝ素手で取るやうな人もないではなかつた。

西暦一八八六年　市俄古また優勝、デトロイトが珍らしくも第二位に浮んで來た。

六つのボールで一壘へ行けたものが、七つに逆戻りした。

審判員は二つの球を手にして、いつでも新球を使用する特權が與へられた（これ迄は一の球で試合をしたものか）

ナショナル・リーグとアメリカン・アツソシエーションとの間に新規約が締結された。

明治二十年　此年平岡氏が職を辭したので、新橋倶樂部も權威を失ひ、赤阪、溜池、東京などの諸倶樂部が活躍するに至つた。學校チームとしては、駒場の農學校が盟主の如く見えたが、それも漸次衰へ、覇權は徐々として第一高等中學（一高の前身）に近づきつゝあつた。

西暦一八八七年　デトロイト選手優勝。費府が次位を得た。

ピッツバークが始めて加入した年である。投手のボックスが長さ五尺半幅四尺に改まる。審判がボールを『高い』若しくは『低い』と宣告するのが廢止された。四つのボールで一壘が取れ、四つのストライクで打者がアウトとなる。四球を得た者は安打同樣に記錄された（但し此年のみで翌年からは廢されたが）コーチャーが野球規則によりて正式に認められる。

一高時代

明治二十一年　二十年以後の野球は一高時代と云ふべきである。此年一高は新チームを造り、波羅大學を破り、大に存在を認められるやうになつた。其後引續いて向陵の天下を謳歌し、斯界の覇權を掌握して一歩も讓らなかつた基礎は、此の時代に築き上げられたのであつた。

西暦一八八八年　紐育覇權を握る。

ナ・リーグの選手は最高給料を一ヶ年二千五百弗、最低を千五百弗と定めらる。（現今の最高五萬弗に比して大した相違である）

エー・ヂー・スポーディング主宰の下に、世界一周野球團が組織され、一時その突然な計劃を危ぶむ人も多かつたが立派に成功した。

打者の打つた球に走者が觸れた時、打者に安打を與へる事をこの年から實行する。紐育の投手キーフは十九回連勝の記錄を作る。

明治二十二年　例のインブリー事件で時ならぬ問題を惹起した年である。明治學院は農學校に破れたので、是非その復讐をしなければならぬ。その前に新進の一高を相手にして練習に供しやうと云ふ腹で試合を申込んだ。力量は明治方に分が多かつた。六回迄六點を勝越して、一高は切齒扼腕、口惜し涙に咽んでゐる際、中堅の垣根を越えてノソ〳〵と入り込んで來た一外人がある。明治學院の教師インブリー先生である。折柄柔道の大會を終つて、この悲壯なる試合を見物してゐた猛者連は、時こそ來れと許りに外人を取圍んで敦圍いた。腕は強いが言葉は一向分らぬ連中、外人が事情を訴へるけれど耳に入れゝばこそ、矢庭に一人の投げた石が、外人の顏に當つたので流血を見るに至つたのである。サー大變、外人を傷けたと云ふので、問題は大分大きくなりさうであつたが、インブリー氏にも垣根を破つて闖入したと云ふ手落ちもあるので、其後一高

の連中が、態々白金迄行つて漸やく謝罪したので萬事は解決した。これをインブリー事件と云つて、一時は外務省の弱腰外交官をびくつかせたものであつた。

西暦一八八九年　紐育また勝つ、市俄古第二位。

各倶樂部の選手は、別に同盟を作るべく秘密に會合を續けてゐた。紐育一五五街のボロ・グラウンドの開場式が行はれた。この前の巨人軍は、ステーション島のグラウンドで試合をしてゐたのである。

◇　直傳のカーヴ

明治二十三年　子規氏は云ふ『されば高等學校がベースボールに於ける經歴は、今日に至る迄十四五年（この隨筆は二十九年四月頃に成れるもの）を費せりと雖（尤も生徒は常に交代しつつあるなり）稍々其完備せるは、二十三四年以後なりとおぼし。これ迄は眞の遊び半分と云ふ有樣なりしが、此時より稍々眞面目の技術となり、技術の上に進歩と整頓とを來せり。少なくとも形式の上に於て整頓し初めたり。即ち攫者（キャッチャー）が面と小手（擊劍に用ふる面と小手の如き者）を着けて直球（ヂレクト・ボール）を攫み、投者が正投を學びて、今迄九球なりしものを四球（或は六球なりしか）に改めたるが如き是れなり』云々。

捕手を攫者と譯したるは面白い『投手が正投を學びて』とあるは、從來下から柔かに投げて、所謂ピッチを爲し、決してスローでなかつたものが、此頃後者に變りしものを意味するのではあるまいか。かくてこそ平岡直傳のカーヴも役に立つたのであらう。

西暦一八九〇年　ブルクリン優勝。紐育第二位。

秘密に會合を遂げた選手連は、遂にブレイヤース・リーグなるものを成立して、ナ・リーグに對抗を開始した。インデイヤナポリスと華盛頓とは、ナ・リーグから脱退して、新らしい同盟に加入した。

されど新同盟はうまく行かなかつた、選手同志の衝突もあり、金主との了解もうまく行かずして、四分五裂の形勢を見せてシーズンを送つた。

◇　一高覇業の基礎

明治二十四年　一高覇業の基礎がやうやく出來上らんとしてゐる。當時の選手は福島金馬（投手）伊木常誠（捕手）福井松雄（一壘）中馬庚（二壘）恩田銅吉（三壘）伴宜（遊撃）鹽谷益次郎（右翼）

小松政吉(中堅)高田源五郎(左翼)の諸氏であつた。インブリー事件で其儘となつた試合をやり直して二十六對二の大勝を得、一方の重鎭溜池倶樂部を三十二對五で破るなど、向陵には百花燎亂春風駘蕩として到る趣きがあつた。

西暦一八九一年　ボストン優勝、紐育第二位となる。

ブレイヤース・リーグもやり切れなくなつて、もとのナ・リーグと妥協を遂げ、解散と共に選手はまたもとの鞘に治まるのもあつた。

アメリカン・アツソシエーション承認さる。

明治二十五年　この春一高は前記の選手一部が業を卒へて大學に進み、一部は勇退したのがあつた爲め、新選手として青井鉞男、森脇幾茂、井原外助などの人々が選ばれ、青山學院の前身英和學校を破つて氣焔を擧げた。

西暦一八九二年　ボストン優勝、クリーブランド。聖路易などが續く。

ナ・リーグとアメリカン・アツソシエーションの合同成る。

野球期を二つに分け、一を四月から七月迄他を七月から十月迄とした。而して前者の優勝はボストン、後半もまた同チームの勝利に歸した。

日曜日にも試合が出來るやうになる。

明治二十六年　この年慶應大に振ひ、一度一高を破つて氣焔を擧げたが、次の戰には十點の差で敗れ、依然として一高の堅城は拔く由もなかつた。

西暦一八九三年　ボストン優勝。

投手と本壘との距離が六十呎六吋に延び、ボックスを廢して、今日の如きゴム板を置く事となつた。

犧牲打、死球、ボールによる進壘の三は、記錄上タイムス・アツト・バツトに入れぬ事となる。

バツトの一面を平坦にすることが禁止される。

◇　聯合試合の濫觴

明治二十七年　この頃京都同志社のチームが、三高を連敗せしめて覇を關西に唱えてゐた。

一高はこれと戰はんものと、再三挑戰したが遂に果さなかつた。

一高は同年五月都下の一流選手を招いて、聯合試合なるものを行つた。これが今尙連綿として

續行されてゐる。此年高等中學校廢せられ、第一高等中學校野球部は、第一高等學校野球部と變つたのである。

西暦一八九四年　バルチモーア優勝。例のマグロー將軍が活躍した頃のチームである。バントしてフワウルとなつたものをストライクに見做す規則が出來た。ピツツバークの住人ウイリアム・チエース・テンプルと云ふ人が、大きなカツプをナ・リーグに寄贈して、シーズンの終つた後、第一位を占めたチームと第二位のものとを戰はしめ、その勝者に與ふべきを申出で受納された。

明治二十八年　此年の野球は比較的振はず、僅に一高對慶應、白金聯合軍の一戰があつたのみであつた。慶應は地形上白金と握手し易く、チームとしても親密の間柄で、共に一高を倒さん事に腐心してゐたものである。

西暦一八九五年　バルチモーアまた優勝。マグロー將軍は此時代最も油の乘つてゐたもので、キーラーとのヒット・エンド・ランは手に入つたものであつた。インフイールド・フライの制度が出來、フワウル・チツプをストライクにする規則が實行され初めた。

職業野球團の父とも云ふべきハリー・ライト氏死す。

◇　初めて外人を破る

明治二十九年　一高が初めて横濱アマチユーア倶樂部を破つた年である。當時の新聞紙はこの對外的試合を、大事件の如く取扱つて、可なり感傷的の文字を並べたものであつた。結局彼我の體格を比較して、一高の敗を豫期する者が多かつたのであるが、二十九對四の大スコーアで邦人の勝利に歸し、一高は頗る面目を施したのである。

其年一高は横濱に碇泊せる軍艦勢を自校に迎えて大勝し、アマチユーアにも再勝するなど、順風滿帆の勢で斯界に濶歩したのである。其後一高は米艦オリンピヤとアマチユーアとの聯合軍と戰つて敗れた。此時初めてグラブの必要を感じ、今迄捕手の外悉く素手であつたものが、漸くこれを使用するに至つた。

西暦一八九六年　バルチモーア三度優勝。一八九四年から續け樣に優勝を續けたバルチモーア倶樂部に、目今巨人軍の名監督として、盛名隱れなきジョン・マグローのゐた事は前述の通り

であるが、彼はこの當時會心のプレイをしてゐた事を忘れ兼ねたと見えて、最近著はした『私の野球生活三十年』の中にも、この時代に於ける思ひ出を多く物語つてゐる。以下その中の面白い部分を拔萃する。以下マグロー將軍の筆である。

◇　光榮の一八九四年

『記念すべき一八九四年』は光榮の裡に過ぎ、吾人は遂に多年の希望たる、大リーグの優勝權を掌握する事が出來た。サーこうなると、各地方の新聞紙は默つてゐない、筆を揃えてオリオレス倶樂部の新戰法ヒット・エンド・ランを、恰かもコロンブスが米國を發見したかの如く大袈裟に書き立て、あらゆる挿話や苦心談やらを絢え交ぜて、面白可笑しく紹介した揚句『オリオレスの驚くべき成功は、投手を中心とする守備にあらずして、全くヒット・エンド・ランと呼ばる、新戰法によりて獲られたものである』と、甚だ獨斷的の結論をした新聞記者も多く見受けられた。倶樂部の投手こそいゝ面の皮である、併しこの記事が災して或る下院議員が、切角の地盤を失つたと云ふ悲劇を生んだのは、更に氣の毒で、新聞記者も飛んだ罪作りをしたものである。その經緯を次に語らう。

◇　議員の大失態

或時私共のチームは、投手マクマホンの出生地から請待された事がある。小さい町の常として、米國最强の野球團が來ると云ふので、噂は至る所で喧しい。町の住民全部は、二三日も業務を休んで、歡迎の準備を爲し、委員は協議の末、その地方選出の下院議員を態々呼び迎えて、歡迎の辭を述べさせる決議をするなど、素張らしい前景氣であつた。

その迎えられた議員は、有名な辯舌家で、院内では一方の旗頭と推されてゐたが、生憎野球の事は餘り心得てゐなかつた。併し知らぬとあつては、自分の人氣に影響すると思つたものか、一かどの通であるかの樣に粧ふて、準備委員の前で大風呂敷を擴げた後、一生懸命各新聞の切拔きを蒐集し、一世一代の大雄辯を揮ふべき準備は全く完備したのである。

彼が切拔の中で、最も深い印象を受けたのは『オリオレス軍は、殆んど投手の手を藉らずして、大リーグの選手權を得た』と云ふ一項で、歡迎の辭の焦點としてヤンヤと云はせる魂膽であつた。而もその町の請待が、投手マクマホンを中心としてゐたのを知らなかつたのが運の盡きであつた。

いよ〳〵其日は來た。歡迎場は種々の國旗や、野球に關係あるもので念入りに裝飾され、一段高い所に私共は半圓を作つて公衆に面した。中央には司會者と、その日歡迎の辭を述ぶべき下院議員とが着席し、其左右には特に町と關係の深いマクマホンを初め、三四の投手連が、一際目立つやうに配置された。

其頃の寫眞を見ると、全く吹き出したくなる。私共は當時の習慣として、悉く髯を蓄へたもので、殊に捕手ロビンソンの如きは、八字髯の尖端を叮嚀に上へ反ね上げて、甚だ嚴めしいカイゼル髯の持主であつた。十七貫許りの小男の私が、人並以上に目につく濃い髯を生やして、殊更威嚴を作つて居つた光景は、今にして考へると冷汗が出る位である。

聽て司會者の紹介が濟むと、例の議員が壇上に登り、至極物馴れた調子で『滿堂の貴女及び紳士』と先づ冒頭を述べ初めた。ホールは一杯の人で、拍手の音は堂を搖がん許りに聞えた。議員は續けた。

『諸君は今や世界が生んだ最も優秀なる野球家を迎えてゐます、この人々は、最も華々しく且つ偉大なる、更に我が野球史上、不思議な程長足の進歩を遂げて、一躍大リーグの優勝權を掌握したるバルチモーア・オリオレスの選手諸君であります。今や我等は、この大選手諸君と一堂に會するの光榮に浴しました、我等が抱く感謝の念は、選手諸君が想像せらるゝよりも、更に大なるものがあるを信じて疑ひません。(拍手起る)

議員は頗る上手に冒頭を述べて一段落を告げ、そろ〳〵と自己の宣傳に取かゝつた。

『華盛頓に於ける我等下院議員の生活は、甚だ多忙にして、勞苦多きものであります。されど私は野球競技には、非常なる興味を有するもので、劇務の隙を見出しては、必ずグラウンドに赴くのを常として居ります。私は野球を學び、野球を尊重し、野球を崇拜するのであります。故に私はこの偉大なるオリオレス倶樂部が、そも〳〵生立の初めから、如何にして斯界の群雄を薙ぎ倒し、遂に大リーグの覇王となつたかを、悉く承知して窮めざる所なしと云ふのも過言でないのであります。而して此チームに關する一大驚異とする點、それは未だ嘗て何人も此の如き批判を下した者はないでしやうが、私の見解を以てすれば、殆んど投手の力を藉らずして、今日の光榮を築き上げた一事であります。實際に於て投手なきチームと云ふも可なり、而も……』

議員は有頂天になつて論じて行く。迷惑なのはチームの私共で、取分け公衆近くに面して座つてゐるマクマホンや、ドツグ・ボンドの二人は、殆んど居たゝまれぬ位に當惑もし、憤慨もせざるを得なかつた。この光景を見た聽衆は、急に騒がしくなつて、演說に對する嘲笑の聲も大分交つて聞えた。

大演說家は元來マクマホン氏が、此町の生れと知れぬから、尙も得意になつて雄辯を續け、丁度華盛頓で發行する新聞が書いた通りの事を、自分のものゝやうにして喋舌り立て、頗るいゝ氣になつて座席に就いた。これが爲め切角の歡迎會も、全く白け渡つて甚だまづいものとなつて了つた。さうして次の選擧期に於て、その議員は唯の一票をさへも、此町で得る事が出來なかつた。

◇　一高の弛緩

明治三十年　一高の盛時は尙續いたが此秋多少の弛緩を生じ此年と卅二年には郁文館に二敗青山學院に二敗して、一高の權威に尠からぬ暗影を投げつけられた。敗北に發憤したる時の投手故守山恒太郎氏は、毎日の練習後、三百宛の球を煉瓦塀に打つけて技を練つたと傳へられる。一高には今尙同氏の練習した球痕ある塀が可重に保存されてゐる。その後守山投手の手腕はメキメキと上達した、一高中興の祖と云ふも耻ぢざる程度に迄進んだのである。

西暦一八九七年　流石猛威を振つたバルチモーア敗れてボストン第一位となる。例のテンプル・カップ戰は第一位のボストンと、第二位のバルチモーアの間に行はれ、後者の勝利に歸した。かうした結果は甚だ面白くないと見て取つた爲めか、この試合は、同年限り中止する事となつた。

◇　一高中興の祖

明治三十一年　守山投手がこの年から三十五年迄一高に在學中は、向陵の天下頗る泰平で、何人も指一本さす事が出來なかつた。時に久保田三壘手の死球問題から、アマチューア倶樂部と物分れした事もあつたが、其後は堂々として打負かした事もある。他は森閑として一高と覇を爭はんとするものもない。されど後にして思へば、これは嵐の前の靜寂で、やがて三十七年早慶の爲め、一朝にして覇權を奪はるべき機運は、此間徐々として育くまれつゝあつたのである。

西暦一八九八年　ボストン再勝。この結果は天下の一人者を以て任ずるバルチモーアに對して一大鐵槌を下したものである。今度こそはと思ひし爭覇戰に敗れたる彼等の悲痛は想像するだ

に慘めであつた、此間の消息に就いて、マグロー將軍は、前記の自著に頗る興味ある告白をしてゐる。幸ひ野球史として別に記すべきものがない時代であるから、將軍の自叙傳によりて、此間の消息を傳へやう、以下將軍自らの言葉である。

◇　世界選手權試合の起原

現今世界各國、苟しくも野球を解する者に多大の注意を惹きつゝある世界選手權試合（ウォールヅ・セリース）の起原を作つた人は、當時の社交場裡に非常な德望を有したるピッツバーグの市民ウイリアム・テンブルと云ふ人で、私共の屬したるオリオレス倶樂部が（バルチモーアの別名）、紐育巨人軍を四回連敗せしめて、一躍斯界の覇權を掌握したる一八九四年に於て、氏は頗る興味ある提案を、大リーグの間に提供したのである。

其頃數年に渉りて、不可解の謎としてフワンの間に存在した疑問は『果して最强のチームが、大リーグの優勝權を得るや否』と云ふ問題で『それは野球競技には特に運不運の多いものだから、第二位のチームと雖、一騎打とならば、優勝チームを負かす事があるかも知れない』と、主張する人々もないではなかつた。テンブル氏はその謎を解く爲めに、毎年優勝權が確定した後、更にチャンピオンと第二位のチームとの番外試合を擧行せしむる提案を爲し、之に非常に高慢なる賞杯を賭したのである。故に私共はこの試合を、テンブル・カップ戰と稱して、早速その年から行ふ事に決し、其後三ヶ年間繼續して、大にフワンの歡迎を受けたものである。

この計劃は、一般のフワンには歡迎されたが、長い野球期の間奮鬪努力して、漸く光榮ある覇權を掌握したチームに取りては、一度優等で及第した試驗を、再び受けなければならぬ樣なもので、甚だ有難くないのに反し、第二位に落ちたチームは、幾分チャンピオンの鼻をヘシ折る意味に於て、この試合を又なき復讐の機會と心得た。さうして双方にこうした腹があつて試合するのが、從來の試合とは異つた色彩を呈する所以で、フワンの歡迎したのも、この理由に外ならなかつたのである。

前に述べた如く、一八九四年のオリオレス軍は、向ふ所敵なき有樣であつたから、無論相手の巨人軍など眼中に置かずして、このテンブル戰を迎へたのであつたが、意外にも四回連敗の慘を招いて、スッカリ面目玉を潰して了つた。而して巨人軍の監督ワード氏は、この花々しき戰勝を、好個の記念として、紐育倶樂部に永い別れを告げた。彼はブロビンス及び紐育の監督たる事十有

六年、當代得易からざる斯界の權威者であつた。

その翌年から三年間、引續いてオリオレスは、テンプル・カツプ戰の勝者であつた。その中一八九七年のみは、ナショナル・リーグの覇權はボストンに奪はれ、私共は第二位を得たが、丁度嘗て巨人軍がオリオレスを破つたやうに、優勝チームたるボストンを撃破して又々カツプの持主となつた。併し一八九五年のテンプル・カツプ戰は、喜ばしからざる風評に包まれて、私共の心を尠からず惱ましめた。その理由は恁うである。

◆

一八九五年の試合も殘り少なになつて、愈よオリオレスが、リーグの優勝者となり、ボストンが第二位を占めて、兩者の間に、例のテンプル・カツプ戰が行はるべく稍や確定された頃、何處ともなく『この試合は双方の妥協が成立して、オリオレスが勝つに決つてゐる』と云ふ風評がパツト擴がつた。遂には新聞紙迄がこれに關する記事を載せて『斯界の恨事』なる事を報道し、風説の出所は、恐らく試合を材料として、賭博を行ふ一團から出たのであらうとの推斷を下した。兎に角世間が五月蠅いので、私共はボストン市で戰はずして、スプリングフイールド市で戰ひ、非常な盛況裡に、オリオレスは凱歌を擧げた。

◆

私共のチームの間には、至極親しい交際を續けながらも、グラウンドの上では、丸で反對の性格を表はす二人の選手があつた。それは捕手のロビンソンと私とである。云はゞ彼は芝居で云ふ二枚目役者で、よい役廻はり許りしてゐたが、私はいつも惡役で、赤ッ面を引受けたものである。共に審判を牽制しながらも、彼は他迄も下から出て、オダテるのが上手であるのに反して、私は眞向から物言をつけて、怒鳴りつけるのが持つて生れた性質で、一度怒り出すと、なか〳〵徹底した所迄行かねば承知しなかつた。嘗て當時の審判をしたアーリー・レーザム君が、或る新聞記者に語つたと云ふ、左の如き記事が、今も尙私の手元に殘つてゐる。

『ロビー（ロビンソンの約名）とマグローとは、兩極に立つて仕事をしたもので、ロビーの物柔らかく、如才ないのに反して、マグローは宛かも毎日の朝飯に火藥を喰つて、それを溫い血潮で包んでゐるやうな危い人物であつた。先づゲームに馴れない好人物らしい審判が初めてバルチモーアの競技場に立つと、ロビーは懇ろに握手を求めた後「私共は君の來たのを非常に喜んでゐま

す。君の雷名は西部に居られた時分からよく承知してゐます。君は數ある審判の中で、一番優れた手腕の人だと、イヤもう大變な評判です。決して御世辭ではありませんよ。私共の中には、一見獰猛な男もゐますが、ナニ腹の中は皆な竹を割つたやうに、サッパリしたものです。ダガ投手は一寸癖のある球を投げますよ、十中の八九は、ブレイトの角を僅か許り通るコーナー・ボールなので、大概經驗の無い審判ですと、ボールにして了ふ位です。併し君が來たので投手連は大喜び、多年苦心のコーナー・ボールも、十分に見て頂く事が出來るのでね……」這那具合にうまく籠絡して了ふのがロビーの十八番である。一方マグローと來ては、絶えず審判の踵に附き纏つて、吠えたり、臭を嗅いだり、隙があらば飛びかゝらうとする、丸で山犬の樣な男であつた』云々

實際に於て私は山犬のやうに、審判を威喝すると共に、相手チームをも、微塵にしないでは置かなかつた。就中私が最も山犬振りを發揮したのは、やはりボストンとの試合に、十三對零の敗け戰さで、最後の九回に入つた時、一擧に十四點を擧げ、滿場のフワンを狂人の如く驚がせた事がある。大リーグの記録中、一回に此の如き多數の得點は甚だ珍とすべきである。

◆

當時の大リーグは、今日の如き複雜な組織に縛られてゐなかつた爲め、テンプル・カップ戰の如き番外試合の收入は、殆んど全部が選手の懐に這入つたもので、ナショナル・コンミッションへ何分、組合の金庫へ何分、曰く何、曰く何と云つた風に差引かれる金は全然なかつた。それでさへも現今行はれつゝある世界選手權試合に於ける選手の分前に比すれば、非常に少額なものであつた所を見ると、近頃のフワンは、實に素張らしい數に上つてゐる事が判る。詳しく云へば、一八九七年最後のテンプル・カップ戰に於ける私共一人前の取り高は九百弗で、一試合の平均入場者は、六七千を越えなかつた。然るに一九〇五年、ナショナル、アメリカン兩大リーグが協定せる規則の下に開始したる紐育巨人軍對費府アスレチックスの第一回世界選手權試合には、私共の分前が千百弗に上り、一試合の平均入場者は一萬二三千に上つた。其後風雨幾星霜を經たる一九二一年の世界選手權試合は、巨人軍とヤンキース軍との間に行はれ、ボロ・グラウンドの入場者記録は、從來のものを一掃して、新レコードを作るに至つた。尤もこれは九回ゲームの爲めではあつたが、勝つた巨人軍は、一人前五千四百弗を與へられ、入場者の最大記録は一日四萬人である。翌年やはり兩チームの間に行はれたる同試合は、九回戰が七回戰に縮められた爲め、巨人

軍が四回連勝すると共に試合は終了したので（其中第二回戰は引分けとなり、その收入十二萬弗は慈善事業に寄附した故、すべて五回戰つた譯である）前年に比して選手の分前は少なく、四千四百弗に過ぎなかつた。併しフワンの數は前年に劣らず、四萬以上を計上し得たのは、全くチンブル・カツブ戰時代に比して、野球の民衆化が、一層その圈線を擴げた證據と見る事が出來る。

◇

筆者曰く、一九二三年三度續けて巨人軍とヤンキースとが同試合を爭ひたる結果、ヤ軍は前二回の敗北に復讐して、流石のマグロー將軍を顏色なからしめた。この試合に於ける入場者と入場料の上り高とは、全く從來の記錄を完全に破つたもので、若しマグロー將軍が、この試合を終つて、著述に從事したのなら、必ず驚くべき結果として、その統計を掲げたに相違ない。譯者はヤ將軍の志を傳へて抄譯に從事した關係上、將軍の云はんとする所を左に掲載する。

試合は總て六回擧行された中（ヤ軍四勝二敗）第一回、第三回、第六回の三試合は、巨人軍のホーム・グラウンドたるポロ・グラウンドで他は新設のヤンキース・スタヂヤムで行はれた。從來示した上り高の最高記錄は、前にマグロー氏が云ふ如く、一九二一年の九十萬二百三十三弗を以て第一とするが、一九二三年には百六萬三千八百六弗の多きに達した。而も前者は八回戰つた結果であり、後者は六回に過ぎなかつたのであるから、一回に於ける入場者の率には、可なりの相違がなくてはならぬ。其中最も多くのフワンを集めたのは、第五回戰がヤ軍方で行はれた時で、六萬二千八百十七人とあるから、これが恐らく今日の世界野球競技を通じて、最も多數の觀客を吸收した記錄であらう。選手の分前も、當然從來のものに比して惡い筈はなく、勝つたヤ軍選手は、一人前六千五百三十弗、敗けた巨人軍は、四千三百六十三弗宛を得たのであつた。

◇　二十五歳の監督

一八九八年に於けるバルチモーア市のフワンは、オリオレス倶樂部に對して甚だ冷淡であつた。成績の惡いのに愛想を盡かしたものであるか、兎てもペナントは取れぬものと見捨てたものか、兎に角見物人の數は、著しく減退したので、機を見るに敏なるハンロン監督は、バルチモーアは畢竟敗者を勞はる義俠的氣分に乏しい町であると見て取つたので、その冬期からは、突如としてブルクリン倶樂部の經營に全力を注ぐ事となつた。されば數名の大選手は彼に從つてバルチモーアを去り、ロビンソンと私とのみは、考ふる所があつたので行を共にしなかつた。それが爲め私

は骨を拔いたやうなオリオレスの監督に擧げられ、ロビンソンは主將の印綬を帶ぶるに至つたのである。其時私は二十五歳の春を迎へた許りの若造で、監督の任は重きに過ぎたが、生れついての利かぬ氣は、とう〳〵私を高い所へ押上げて了つたのであつた。

チームはどうやら出來上つたものゝ、その結果はなか〳〵容易に生れて來ない。併し間もなく親友ヂエニングスが歸つて來る、更に市俄古からデモンストレビルが加はるなどして、稍や陣形を整へる事は出來た。このデ君の名が餘り長いので、一つの珍談が起つた。

デ君がオリオレスに參加と決した時、私は市俄古からバルチモーアへの汽車賃として、壹百弗を電報爲替で同君の許へ送つた。私は多くの人々が、彼の長い名を略して、デモントと呼んでゐるので、其通りの名を電報紙に認めた所、一方デ君が局へ行つて見ると、デモンストレビルと云ふ名の通牒がないので、局員はどうしても金を渡して呉れない。再三再四取調べた結果、デモントの名が發見されたので、それこそデ君の略名である旨を告げて、便宜の取扱ひを依頼したが、どうしても採用されない。其中汽車の時間に間に合はなくなつたので、彼は遂に豫定の期日にバルチモーアに着く事が出來なかつた。

◆

私の新チームは、鐵腕投手として聽名を馳せたヂョー・マギニチーを得るに及んで、漸次他のチームを壓倒し初めた。マギニチーは、私の寶石として大事にしたマシューソンと同樣に、非常に記憶力に富みたる人で、一度打者の長短所を自覺し、又人から聞かれたが最後、決して忘れると云ふ事はなかつた。多くの選手を向ふに廻はして、一野球期に尠なくとも數十回の試合をする投手は、打者の一人々々に對して、深大な研究を爲し、其結論は悉く頭の中に仕舞つて置かねばならない。野球の投手は、役者が科白を覺えるよりも、更に多樣の記憶力を要求されるとは、全く以て嘘の樣な話である。

◇　吹き當てた大法螺

一八九九年は、米國が西班牙に對して宣戰の布告をした年で、獨立戰爭以來の大鬪爭であるから、人氣は悉くその方面に吸集せられた。野球競技と雖、影響を蒙らぬ譯には行かない。其結果誰れ云ふとなく、十二チームから成立するナショナル・リーグは結局八倶樂部に減少されるとの噂が、喧々として關係者の耳に這入つた。驚いたのは小市街を背景とする大リーグ所屬のチーム

で、差當りバルチモーア・オリオレスの持主などは、損耗の大ならざる中急いで所屬選手を、他のチームへ賣飛ばす算段に着手した。其年の野球期が先づ事なく過ぎてから、愈よ減少案が提出され、思ひ出多きオリオレス倶樂部の最後が宣告された時、私とロビンソンとは、早くも聖路易倶樂部へ賣られてゐたのには、その手廻しの早いのに一驚された。

當時十二倶樂部から切離されたる不景氣なチームは、バルチモーア。ルイスビル。華盛頓。クリーブランドの四倶樂部で、後にこれ等の蹶起がアメリカンリーグ八大倶樂部の基礎を定めたのである。

私は聖路易へ行く事を拒んだ、併し理由をつけねばならぬので『年俸九千五百弗、さうして一年後その契約が濟んだなら、何處へ轉籍するも勝手たるべき事』と云ふ少し過大の要求を、屹度斷はれる事だらうと思つて提出した所、案外にも、同倶樂部の持主たるロビンソン君は、之を快諾したので、茲に破天荒の取引が成立したのである。私の身賣高は、當時野球界の驚異であつた。

私は聖路易に入つてから三壘を守り、自慢ではないが、九千五百弗の價値は十分に發揮して、持主を滿足させたのである。私の技倆に惚れ込んだ持主は、是非監督になつて呉れと逼つたが、併し其所には從來からの監督たるバッド・デビューがゐる。彼と私とは、數年間グラウンドの上でこそ、烈しい敵對をして來たものゝ、不思議な緣で、私が監督される身分となり、而も甚だ仲の善い友人となつてゐるのに、どうして私が彼を蹴落して、その位置を襲ぐ事が出來ようか、再三再四の請であつたが、私は絶對的にそれを拒絶した。さうしてデビューが其後自ら位置を退いた後でも、私は初一念を通して、其跡を繼ぐ事を承知しなかつた。

◇

その野球期に於て、私は戰に臨む事九十五回、油の乘り切つてゐるに任せて、可成物凄いプレイをしたものゝ、どう云ふものかオリオレスに居た頃のやうな、若い且つ花やいだ活氣を抱く事が出來なかつた。ロビーもこれには同感であつた所を見ると、烈しい競技をするものにとりて、最も尊ぶべきは『感激』の二字であつて、その高潮に達した時が、即ち身心共に緊張味に充實する刹那であらねばならない。

丁度其頃聖路易所屬グラウンドの近くに、大きな競馬場があつて、其所で小馬に乘つて遊ぶの

が、私共にとりて何よりの慰めであつた。私共はどうかして野球試合から逃れて、小馬と遊ぶ方法が無いかと考へた結果、それには審判に物言をつけて退場されるに限ると思ひ附いた。されば私は機會ある度毎に審判に喧嘩を吹かけて、案の如く退場されるのが、何よりも樂しみであつた。

或日の午後、私の常に賭ける馬が走るので、試合をしながらもそれが氣になつて耐らなかつた。何とかして物言を附けてやらうとしても、生憎問題が沸いて來ない。所が幸にも三壘に滑り込んだ走者があるので、此所ぞと許りに、私は態と球を觸れないで、丁度觸れたやうな態度をして見せた。流石審判ハーストの目は鋭い、勿論嚴そかなるセーフが宣告された。この機會を逃しては、馬を見る事は出來ぬかも知れぬと思つたので、私は先づ

『君は盲目ぢやないか、バットと同じやうな人間だね』

と先づ一本極め込んで、先方の出やうに依つて、第二彈を浴せかける積りであつた。所がハーストは、唯ニヤリとした許りで、一向相手になる氣配がない。これでは困ると思つて、私はグラブを空へ投げたり、帽子を審判の方へ叩きつけなどして、大概ならばこれで退場の資格は十分なのに、彼は更に無頓着でゐるので、私はとう〳〵審判の傍へ走り寄つて、殊更怒りに燃えた眞紅の顏を彼の鼻先に突つけて、

『何とか云はないのか、君は目が見えぬ許りか耳も聞えないのか』

可なり手嚴しくやつゝけてやつた。流石のハーストも五月蠅いと思つたのであらう、口を開くかと思ふと、スタンドの隅々にも聞えるやうな大きな聲で怒鳴りつけた。

『おとなしく試合をするのだよ、出やうたつて退場は許さないのだ、馬に賭けたかつたら、小供を代理にやつたらどうだ』

流石の私もこれではスツカリ悄氣て了つた。

このハーストと云ふ男は、なか〳〵利巧で、而も頑固一點張りな所があるので、選手も一目置く事になり、晩年迄威嚴を損せずに、難役を勤めあげたが、當時の審判中には、選手の爲め可なり苛い目に逢はされた人も尠なくない、序だからその代表的なものを御紹介しよう。

◆

まだナショナル・リーグが八倶樂部に縮少されぬ前に、マナソーと云ふ餘り冴えない審判がる

た。嘗て華盛頓の試合を審判した際、投手ウイン・マーサーの投球に對して、甚だ不利益な裁斷を多く下したので、マーサーは彼に對して甚だ不快の感を抱くやうになつてゐた。その翌日の試合にマーサーは三壘を守つた所、又々彼にとりて不利益の宣告をマーサーが下したから耐らない、矢庭に彼は審判の二の腕を捉へて、グン〳〵二壘の方へ引摺つて行つた。人々は唯呆氣に取られて成行きを見る許りであつたが、聽て哀れなマナソーは、二壘の所迄引摺られて行くと、溺るゝ者は藁をも摑むの道理で、足を壘に引つかけて、動くまいと頑張つた。マーサーはそんな事に頓着せずに、グン〳〵と引張つたから、丁度兎の皮を剝ぐやうに、マナソー審判は、上着をズタ〳〵に破られて、下着一枚にされて了つた。これを見たフワンはドーッと喚聲を擧げて笑ふ。下着一枚になつた審判に選手を罪する威嚴がどうして保てようか、彼はあべこべに自分が退場するより外はなかつたのである。

『ナゼ君はマナソーを二壘の方へ引張つて行つたのだ』

と戰友が投手に聞くと、

『外野の塀から外へ投げ出してやるつもりだつた』

と答へたさうである。昔は這那選手が多かつたので、審判は命がけの仕事であつた。

◆　將星頻りに動く

明治三十二年以後　三十五年迄は、依然向陵の天下、枝も鳴らさぬ泰平の天下が續いた事は前記の通りであるが、此間米國の野球界には種々の波瀾が起つて、將星頻りに動搖した。即ち西暦一八九九年には、マグロー將軍の自叙傳にある如く、バルチモーア・オリオレスの有名な選手は悉くブルクリンへ走り、その結果同年と一九〇〇年には引續きブ倶樂部が優勝の榮冠を得た。

一九〇〇年に於て特筆大書すべきは、後にナ・リーグと對抗して下らざるアメリカン・リーグ創立の發牙を見たことである、一方ナ・リーグの内訌多難は益すその機運を促がさずには置かなかつた。

捕手が打者の直接背後にありて捕球することを命ぜられたは、一九〇一年とあるが、それ迄は昔のやうなバウンドで取つてゐたものであらうか。

一九〇二年はナ・リーグにとりて百鬼夜行の時代であつた。恐らくこの時代程リーグが危機に瀕したことはなかつたであらう。時の總理エス・イー・ヤングを後援する一部の野心家は、總理の

改選と共に同リーグの組織を改善せんとし、それに反對が多かつた結果ヤングは憤然として會議の席を蹴立つて去り、後にエー・ヂー・スポーティングが假りの總理に選ばれたが、喧嘩兩成敗で、ヤングと共に手を引く事となり、ハート。ブラッシュなど云ふ人によりて、一時事務が取られたのであつた。

ブラッシュ氏は紐育巨人軍が散々の窮地にありて持續出來兼ねると云ふので、時の持主アンドリュー・フリードマンから買取り、これより先きバルチモーアから招聘されてゐた小ナポレオン・マグローに對し、フリードマン以上の厚遇をなして、思ふが儘の手腕を揮はしたのである。これが現今の斯界の巨擘として敬慕される紐育巨人軍監督マグローの登龍門となつたので、將軍自身も餘程感銘が深かつたと見へて、這般の消息を可なり力ある筆で記述してゐる。

マグロー將軍の紐育入りは、自然バルモーアの破壞を意味する。流石斯界の耳目を聳動せしめたるオリオレスの核心は、今や紐育に移されて、巨人軍繁榮の基礎は築き上げられんとする時である。これは單にマグロー將軍の出世談たるのみならず、舊式の米國の野球が正に轉換の機に際し、古き外套を拔ぎて、新らしき或者を着けんとする過渡期たるを失はない。ナ・リーグの動搖、ア・リーグの勃興、マグローの活躍、舞臺は段々面白くなつて行く。

これを日本の野球界にありては、一高の覇權が一朝にして早慶に移る時である。球界の動搖が、東西軌を一にしたのも不思議と云はねばならぬ。さらば先づマグロー將軍の手記によりて、當時の形勢を一瞥しよう。

◇　環境の序曲

私がいよ〳〵紐育巨人軍の印綬を帶びたのは、一九〇二年七月十日で、私の話し甲斐のある花花しい野球生活は、眞にこの刹那から展開されたのである。この興味あるテマを引き出す前、私をこの位置に押進めたる環境の力を、序曲として聞いて頂かねばならぬ。

一九〇〇年の野球期が終る頃、聖路易市に於ける新聞紙は、アメリカン・リーグの勃興に關して、多大の刺戟やら、興奮やらを世間に振り撒いた。ナショナル・リーグは持主、監督、選手の別なく、悉く浮足となつて噂の成行を凝視し、又これ等を取圍むフワンの中には、種々な金棒引が入亂れて、蜚語紛々、兎に角米國野球界の地盤に、一大變動がなくてはならぬ雲行が、日一日と濃厚になつて行つた。

此際バルチモーア、華盛頓、クリーブランドの三倶樂部は、從來の地盤があるので、其儘アメリカン・リーグの所屬チームとして加入するは誰れも想像した所であるが、其他の各都市には如何なる陣形で浸入せんとするか、斯界の彗星バン・ヂョンソン氏の一擧一動は、多大の興味を惹かずには置かなかつた。

一九〇〇年の野球期の終つた頃、私は遂にバン・ヂョンソン氏とその親友にして一味の首領株たるチャーレス・コミスキー氏とに會見した結果、ヂョンソン氏は私に托するに、古きオリオレスを復活し、バルチモーア市に、ア・リーグの旗幟を翻がへさん事を以てしたので、私はロビンソンと相談の上、之を快諾して忠勤を勵むべき誓を立てたのである。かくてコミスキー氏は、從來の聖ボール倶樂部を提げて市俄古に據り、ヂミー・マンニングは華盛頓倶樂部成立の任に當るべき部署が定められた。而して東部にありては、ボストン、バルチモーア、華盛頓、費府、西部にありては市俄古、クリーブランド、デトロイト、聖路易の八倶樂部同盟が成立し、バン・ヂョンソン氏を總理と仰いで、愈よナ・リーグ對抗の一彈を送つたのは、一九〇一年の春であつた。

◆

バルチモーア市のフワンは、再び大リーグを得たる喜悅に溢れた爲めか、其年の試合には、相當の入場者を迎へることが出來た。私もロビンソンも一陽來復、昔のオリオレス時代の感激に浸りつゝ、大に奮勵努力を續けたのであるが、此に一つの不足と云ふのは、ヂョンソン氏の擧動が、動もすればバルチモーアに親しみを缺くやうになつた事で、それが漸次鋒芒を現はすに連れて、私共は同氏の野心が、バルチモーアを聯盟から脱退すべく餘儀なくさせて、紐育にア・リーグ所屬の一チームを成立せんとするにあるを看破した。成程バルチモーア市は、他の都市に比してフワンの數は少ない、とても大リーグを置くべき資格はないかも知れない。この理由を以て、眞向から堂々と切込んで來るのなら我慢も出來るが、女々しくも、側面から沒落の機を早めんとする彼の態度は、私共の不快を彌が上に唆つたのである。

◆

一九〇二年の收支決算は、多少の損害をバルチモーア倶樂部に與へた。私は株主に、より以上の出資をなさしむるに忍びなかつたので、約七千弗を私のポケットから出して、選手に支拂ふべき給料の一部を補つた。私はその中一方にヂョンソン氏の野心が益々盛になるを觀破し、更に私

財を投じて倶樂部を支へるのが馬鹿々々しくなつたので、或時株主を集めて自ら七千弗を支拂ひたる旨を説明し、さうしてその返還を請求した。

『若しこの返金が出來ないならば、遺憾ながら、私はこの倶樂部とお分れするより外はない』

私はかう云ひ切つて、靜かに回答の至るを待つたが、株主は一人として、返事をする者がなかつた。

◇

其頃紐育巨人軍の秘書役フレッド・ノーレが、(持主はアンドリユー・フリードマン)バルチモーアに來て私に會見を望んだ。話の要點は、巨人軍の監督權を全部私に委せ度いと云ふのである。事頗る重大なので、私は即答を避け、數日間熟慮の末、

『若し倶樂部の持主が、チームに關する絶對權能を私に與へ、競技場に於ける支配、選手の交換、賣買等に就いては一切干渉する事なく、而も四年間監督たる契約を結ぶならば御引受け致しましやう』

私は再度會見の際、個樣な主張やら希望やらを述べて、その返事を待つ事とした。これは可なり手嚴しい條件の如く見へるが、苟しくも全力を擧げてチームの活躍を期するには、この位の抱負、要求は寧ろ至當と云はねばならぬ、果せるかなフリードマン氏は之を快諾して、私の年俸は一萬一千弗と決定された。

バルチモーア市の新聞紙は、この記事で大分賑やかされた。アメリカン・リーグの人々は、私が窮地にあるバルチモーアを置去りにして、敵のナ・リーグに投じた態度を大分非難したが、株主諸君は周圍の事情をよく知つてゐるので、却つて同情の涙を流して、誠に止むを得ざる結果と見て呉れた。

一方紐育市の新聞紙は何れも大々的歡迎の辭を、その運動欄に滿載した。今尙私の手元にあるものは、二段抜きで私の寫眞を掲げ、四段抜きの見出しには、左の如き大活字が羅列されてある。

『マグロー！一年に一萬弗、當代の野球界に濶歩する大監督！年齒僅かに二十九歳』

監督の頭は雪か霜かで、屹度白く見へるものと相場が定つてゐるのに、當時私は三十になるかならぬの血氣盛り、勿論頭髪には、一條の白線をも加へなかつた。然るに勞苦多き監督の地位と、

二十餘年の年月とは、遠慮なくどし〳〵と私を初老の域に追やり、今では頭髪にも大分白いのが見へ出した。私が初めて巨人軍を統御後の一、二年間から、今日に至る實歴を讀む人は、必ず『人生監督となる勿れ』の感を抱かれるであらう。

私はブレスナハン。マギニチー。マツクカーン。マーテイス。ギルバートの五大選手を連れて巨人軍に投じた。

◇ 愈よ巨人軍に入る

私が初めて巨人軍の監督を引受けた時の同チーム附屬選手は、總計二十三人で、當時一壘を守つたクリスチー・マシューソンと、二三の選手とを除く外、餘り感心する人は見當らなかつた。その野球期の試合は、既に十四回を過ぎて、巨人軍の成績は八倶樂部の最下級、從つて最負のフワンは甚だ少ない。フリードマン氏が未曾有の大金を出して、私を招聘したのは、誠に故あるかなと肯かれた。

私は運動場に出て、選手の活動力を仔細に觀察した後、フリードマン氏とチーム改造に關する忌憚なき意見を交換した。

『もう十四回も試合が過ぎて、さうして最下級の成績では、これからいくら骨を折つても、ペナントを取る見込はありませんから、今年は專ら來年度に活躍する爲の準備に、全力を注ぎましやう』

個樣に大體の意見を發表した後で、私は二十三人の選手名簿を取出し、

『先づこの九人丈けは、取敢へず暇を出して頂き度いので』

と云ひながら、グン〳〵鉛筆で名前を抹殺し初めた。すると持主は慌はてゝ引止めながら、

『一寸御待ちなさい、その人々の爲めには一萬四千弗と云ふ大金が拂はれてゐますぞ』

持主の聲は少し慄へて聞へた。

『判つてゐます、併しこれ丈けの人が居なくとも、チームは現狀以上には弱くなりませんよ、これからの給料を節約する丈けでも、結構ではありませんか』

『しかし、何しろ大金が……』

『しかし、も何も要りませんよ、フリードマンさん。私は監督として選手の去就に關する一切の事件は委せられてある筈です、貴方が殊にこの人々を御好きならば、御自分の費用で養はれては

如何ですか』

持主は私の鼻息の荒いのに呆れたものか、兩手を擴げて、是非がないと云つた調子で云ひ出した。

『さうですか、それも好いでしやう、併しその外の人々はどうなるのです』

『サー私は先づこの人々には居て貰ひ度いのです、エルバーフエルト。ヂヨンス。デレハンテー。ダビス……』

『一寸待つて下さい』

持主は急に引止めて、何を云ふかと思ふと、

『そのダビスはどうも私の虫が好かないので、三千五百弗を拂ふのは惜しいのです、序に出す方へ入れて頂けませんか』

と嘆願的に彼の追放を逼つた。併し私は斷乎として之を退けた。

『いけません、彼奴は倶樂部に必要な良材です。もう一度御斷りして置きますが、私は一切を委されて監督ですよ、どうか御忘れなく』

流石頑強な抗議も、敵し難しとや思つたのであらう、持主は、

『さうですか、それではどうぞ御隨意に……』

フリードマン氏はかう云つて、とう〳〵私の强情に手を引いて了つた。

同時に私はマツクカーンを一壘とし、從來一壘であつたマシューソン（約名マチー）を投手の候補者として、叮嚀に取扱ふ事とした。私は一見して、將來大投手となるべき素質を彼の活動中に認めたからである。

◇

私の峻嚴なる淘汰は、長夜の惰眠から、巨人軍を蹶起せしめた『戰はんかな』の精氣は、烈々としてチーム全體を支配し始めた。さればその野球期は、平々凡々の裡に過ぎて、私は世間の期待から、遠く離れた者のやうになつたが、焉んぞ知らんその半期に於ける臥薪嘗膽の結果は、やがて來た翌年、一躍第二位を占むる因となつて、斯界を驚倒せしめたのであつた。

私はその秋マイク・ドンリンをシンシナタ倶樂部から招聘した外、數名の鵬雛を他から集めて益す陣容の整理に沒頭した。其中又々フリードマン氏を悲しませたのは、彼が年俸三千五百弗を

拂ふのが厭だと云つたダビスに對して、六千五百弗支拂の契約を結んだ一事であつた。倶樂部でこの契約書を見せた時、フリードマン氏は見るも氣の毒な表情をして、私の顏をヂッと凝視したが『チームを強くする爲めには、持主の御機嫌許りは取れない』私は腹の中で獨語しながら、思ふ事をドシ〳〵遠慮なく取運んで行つた。

◇

その翌年巨人軍はグン〳〵頭を擡げ、第一位のピッツバークに、追ひつ追はれつして一二を爭つてゐたが、氣の毒な持主は、巨人軍の株をシンシナタ倶樂部の持主ヂョン・ブラッシュ氏に讓つて、全く斯界から引退した。新らしい持主は、野球事業に馴れ切つた太つ腹の人で、云ふ迄もなく巨人軍の全權を私に委ねた許りでなく、一言の干渉をも試みなかつた。さうしてそれが彼の死期まで續いた事は、尠なくとも球界に於ける一光彩と云ふべきであらう。

此年私として思ひ出多きバルチモーア倶樂部は、豫期の如くアメリカン・リーグから振り離されて、紐育市に今のヤンキースの前身たる新倶樂部が生れ、ヂョンソン氏の積年の理想を實現されたのである。巨人軍は同じ都會を根據とする關係上、この大敵を向ふに廻はして、更に振興の意氣を增さゞるを得なかつた。

◇　一高の危機

明治三十六年　一世の名投手故人守山君が大學に去りたる後の投手は黑田君であつた。彼は球のスピードに於て先人に劣らざる者であるが、惜しむらくは太平に馴れて苦勞が足りない。發憤せんとする機會が即ち早慶に敗れたる時で、その際骸子は既に投ぜられてゐた。投手としては甚だ不幸な立場に置かれた人である。早慶の勃興期も、また一高の少しく弛緩せる時代であつた丈け、頗る調子好く運ばれた觀がある。此年は慶應チームが櫻井、林田の好バッテリーを得て振つた時なので、一高に挑戰したもの〻黑田君に退けられて志を貫徹する事が出來なかつた。されどこの一戰は『一高も大したものでない』と云ふ自信を三田軍に與へたもので、三田は寧ろ勝つべかりしに負けたやうなものである。かくて烽火は擧がつた、陳勝吳廣は起つた。一高の陣は汲乎として危い位置に立たねばならなかつた。

◇　早慶の勃興

明治三十六年の我が野球界に忘るべからざるものは、私學の二大頭目慶應と早稻田とが第一回

の野球試合をなして斯界に多大の刺戟を與へた事である。一方に一高の牙城、嚴として覇旗に輝かされてゐる際、この二大チームの對抗は、斯界の漸く多事ならん事を示したものである。新進の早大は善戰して老舗の三田を壓し、十一對九の接戰で敗れたが、此の一戰によりて、存在は遺憾なく認められた。

西暦一九〇三年　ピッツバーグ優勝（一九〇一年から引續いて）例の名打者ワグナーが盛んに活躍したる時代である。

ハリー・プールマン氏がナ・リーグの總理に擧げられ、初めてア・リーグの存在が承認された。

明治三十七年　早慶が前後して一高を破つた年である。顧みれば明治二十年以來城頭高く掲げ來れる覇者の大旆は、此時に到つて悲しくも引下された。優勝劣敗の世とは云へ、餘りの無常迅速に驚かされる。早大が一高を破つたは六月一日、慶應はその翌日に苦戰して勝つた。二日續けて試合するのは甚だ一高にとつて不利であつたに相違ない、されど當時の向陵軍は、早慶を眼中に置いてゐなかつた。二日でも三日でも、そんな事は構はぬ程度に敵を呑んでかゝつてゐたのである。

餘りに重大な結果を生んだ試合である、一高の盟主時代が、早慶に移るべく餘儀なくされた試合である。後世の爲め簡單にその戰況を傳へやう。

第一回。一高先攻、河野の球勢定まらざるに乘じて第一打者黑田四球、小西安打後杉浦三振したれど、小林、石川、上野よく攻めて先づ二點を取る。早大無爲。

第二回。柏村三振後、兩角以下四球を利して滿壘となり、小西飛球、石川ゴロで三壘を襲ふ間に兩角生還してまた一點。此回早大方も奮起し、森本、押川の二者陶山の遊擊を襲ふ猛ゴロによつて生還、三對二となつて試合は漸く緊張した。

第五回。早大方は打順一廻はりして正に乘ずべき時である。先づ河野、山脇共に安打、橋戸の死後、森本絶好の二壘打を右翼に飛ばして河野、山脇を入れた。押川猛打遊擊を破り、泉谷凡死せしも、陶山三壘を襲ひ、一壘の失に乘じて押川森本生還、四點を得て形勢一變した。

第七回。押川ゴロにて遊擊を破り、泉谷、陶山の死後、小原遊擊後に安打して押川を入れ、早大又々一點を加へた。此に於て一高方の敗色益す濃厚となり、一高名物の彌次は囂々として毒舌を揮ひ初めたが、早大方一糸亂れず、堂々として戰を進めた。

第八回。一高は一點を恢復したのみ、依然として振はざること甚だしい。

第九回。一高方彌次の狂熱高潮に達して、向陵も搖ぐかと怪まるゝ中に、最後の一回は到來した。二死後兩角四球、田代左翼に黑田右翼に安打を飛ばして兩角を入れ、小西また外野にヒットして滿壘となつた。一高式の發憤力は、今や恐るべき力となつて、早大軍を壓し去らんとしてゐる。早大の投手河野は此日四球を出すこと十有三、コントロールを失はざらんとすれば此の如き亂打あり、亂打を防がんとすれば、ボールが遠慮なく續出する。加ふるに校友の危機を傳へて聽せ參ずる一高の應援隊は怒號漫罵、あらゆる方法を以て早大の陣營を攪亂せんとするので、流石の戸塚健兒も稍や杞憂に促はれんとする際、主將橋戸は二壘の黑田が遠く壘を離れてゐる隙を覗ひ、河野に投球せしめて二三壘間に挾擊し、田代の生還には目もやらずして、遂に目的を達し、九對六、即ち三點の差で凱歌は早大方に擧つたのである。

この試合で最も注意すべきは、兩軍が打順を作らずして戰つた一事である。一高は由來この種のものを練習試合と稱して打順を作らざるを常としてゐる。早大もさらばと云つて之に倣つて戰つた。戰はざるに兩者の意氣は左樣に昂まつてゐたのである。兩軍のメンバーは左の通りであつた。

早大—投手河野　捕手山脇　一壘森本　二壘押川　三壘泉谷　遊擊橋戸　右翼陶山　中堅小原　左翼鈴木

一高—投手黑田　捕手小西　一壘石川　二壘小林　三壘上野　遊擊杉浦　右翼柏村　中堅兩角　左翼田代

◇慶應また一高を破る

早大に敗れたる一高は翌日打擊順を作つて慶應を向陵に迎へた。三田は知らぬ顏で、早大の如く投手以下位置其儘のオーダーで對峙し、なか〳〵味を見せて戰を開始した。

第一回。一高先攻、小林遊擊越の安打を飛ばし黑田また遊擊を破つて出づ、石川遊擊ゴロで小林を三壘に封殺したが、小西一壘に死した後、石川挾擊され、其間黑田は生還した。

慶應は櫻井二失に出で、林田、時任、宮原快打を續けて一擧三點、一高方啞然たるものがあつた。

第二回。一高の杉浦、上野の安打で生還。慶應は二死後青木、時任、宮原盛んに打まくりてま

た三點を加へた。

第三回。湧川敵失に出で、櫻井の右翼安打で生還、合計七點となる。

第五回。田代、小林四球、石川の猛打遊撃を失策させて田代還る。

第六回。杉浦三壘越安打、兩角の遊撃ゴロで生還、一高徐々として逼る。慶應七一高四。

第七回。慶應の宮原三壘を破り、吉川、宮本共に快打、高濱一壘を失策させて二者生還、一高益す不利に陷る。

第八回。猛然として奮起せる一高は、杉浦の死後、兩角、田代共に四球、上野、佐藤續いて右翼に快打、小林も安打、石川の中堅安打を野手トンネルなどして一高は一舉五點、忽ちにして對となつた。彌次の喧囂は極に達した。

第九回。一高は杉浦遊撃失に出で、佐藤の右翼安打で生還、一點を勝越して最後の陣を布いた。慶は攻めたが忽ちにして二死、その儘で逆轉して終るかと思はれたが、高濱遊撃を破り、次の巨漢櫻井バットを一閃すると、球は遠く中堅の頭上を越へ、高濱悠々と生還、櫻井は長驅して本壘に達せんとしたが、其時早く球は捕手小西の掌中にあり、無論アウトと思ひきや、小西は不覺にも落球して櫻井生還、かくして一高の大事は去つたのである。若しこの落球なくば、一高の横威はさう容易く地に委ねられなかつたかも知れない。野球もデリケートだが、野球競技にからまる運命もまた奇なるものである。

◆

同年六月共に一高を破れる早慶は、最後の覇權を爭ふべく戰つたが、十三對七で早大勝ち、更に秋十月の試合は、十二對八でまた〳〵三田が不利であつた。之より先き早大野球部長は『若し早大野球部が覇權を握るならば、米國に渡りて鐵腕を比ぶべし』と云つて選手を鞭韃してゐたが、覇成ると共に直にこれの實行に着手した。思へば早大は球界の成金である。忽ちにして存在を認められ、忽ちにして覇王、而して破天荒の渡米を實現する。彼等の行動はとん〳〵拍手に功果を結んだのである。

西暦一九〇四年　紐育遂に覇權を握る。東に早大の覇權掌握あり、西にマグロー將軍の覇業あり、東西共に野球界の爲めに記念すべき年である。鐵腕投手マギニチーを初めとして、マシューソンが漸く擡頭した頃である。

新にナ・リーグの總理となつたビューリアム氏は、萬難を排して野球界の積弊を一掃し遂に打勝つた。

ビッツバークを一蹴して、チャンピオンになつたマグロー將軍は得意の絶頂に達した。されど巨人軍をしてこの位置に押上げる迄に盡したる將軍の努力は非常なものであつた。將軍の自叙は涙なくして見る事は出來ぬ。以下將軍が廢頽せる巨人軍を引受け、遂に一流チームにたゝき上げたる努力の跡を、その自叙傳から摘記しやう。

◇ 巨人軍の完成

一九〇三年に於ける巨人軍は、前年の後半期に蘊蓄せる全勢力を傾倒してかゝつたので、不幸第二位の成績であつたとは云へ、翌年度の覇權は、必ず私共のものであると豫言をする人が多きを加へた。

此年ナ・リーグの代表チームたるピッツバーク倶樂部は、其年初めて勃興したるア・リーグの優勝者たるボストン赤踏軍と、七回戰を行つて雌雄を決する事となつた。これは前述テンブルカップ戰以來の大試合であり、且つは新進ア・リーグとの初めての對抗戰であるから、非常なる興味を以てフワンから迎へられた。試合は初めピッツバーグ市に於て行はれ、三回連續してピ軍の勝利に歸したので、フワンの興奮は、忽ちア・リーグを輕侮する念と代つて、ボストンの不成績は、驕て所屬リーグの興廢にも關するやうになつた。バン・ヂョンソン氏はこは容易ならぬ形勢であると思つて、あらゆる方法を盡して赤踏軍を鞭撻した功果空しからず、次の四回はスラ〳〵とボストンの勝利に歸し、此に於てナ・リーグが貪りたる太平の夢は破れ、新人の一團は、花々しき出發の第一歩を開始したのである。

◇

一九〇四年の巨人軍は、正に強味の高潮點に達した。即ち内野には、新に三壘の名手アーサー・デブリンを加へて、ダーレン。ギルバルト。マックカーン等と共に内野の堅壁を築き上げ、古今に獨歩するブレスナハンは、投手から内野手に代り、更に捕手となるに至つて、天品の才華は、燦爛として光輝を放つに至つた。其他投手としてウイルッあり、テイラーあり、エームス等ありて共に著しき強味を增した以外には、例のマチーニ。マギニチーの二大投手を控へ、これに配する名捕手バワーマンと、前記ブレスナハンを以てしたのであるから、巨人軍の牙城は眞に金城鐵壁、

易々とその年の優勝旗を得たのは、少しも怪しむに足らぬのである。

一方アメリカン・リーグにありては、此年初めて紐育市にヤンキースの本營を作つたので、そのため、同市の野球熱は彌が上に燃え上り、前年の凱旋將軍ボストン赤踏軍との爭覇戰の如きは、紐育初まつてからの興奮をフワンに與へた。取分けヤ軍のスピッド・ボール投手たるチエスブローの評判は大したもので、私の舊友ウィリー・キーラーもスターの一人であつた。監督は有名なクラーク・グリフイスであつたから、一躍ボストンと覇を爭ふに至つたのは、決して偶然の出來事ではない。

同じ都會に同樣のチームが出來た事は、一見巨人軍に取りて不利益の如く見えるが、實際はさうでなく、ヤ軍がボストンと覇を爭つて、火の出るやうな戰をした結果は、この大都市を擧げて悉く野球のフワンたらしむる景氣を作つた。此時の決勝戰に於て、ボストンの打者は、悉くチエスブローの唾液球に壓せられて九回で同點となり、其所で一點を得ざれば、更にエキストラ・イニングに入らんとする際、チエスブローは敵に二ストライクスを與へた後、餘り調子をつけて投げたスピット・ボールが、手も附けられない暴投となつて、三壘からの走者を生還させ、數萬のフワンが呆氣にとられてゐる間に、試合はヤ軍の敗北に歸した。チエスブローが自分も許し、人も恐れたる獨得の武器で、却つて自殺を遂げたのは、今に野球界の好話題となつてゐる。蓋し『よく泳ぐものは溺る』の類であらう。

◆

かくてボストン軍は、又々ア・リーグの優勝旗を得たので、愈よ巨人軍との對抗は、前年不覺を取つたピッツバーグの復讐の意味に於て、一方ナ・リーグの名譽恢復と云ふ點から見ても、非常に面白い奮鬪振りを見せるであらうと、誰れも豫期した所であつたが、巨人軍の持主ブラッシュ氏は、何等の權威によりて統一されず、準據すべき公の規約もなき餘興試合は、御免を蒙ると云つて相談に乘らなかつた。口の惡いフワンの間には『巨人軍は體よく逃げたのだ』と罵る者も多く、その噂を聞く選手達は、身を切られるよりも辛い思ひをしたが、ブラッシュ氏は、一度云ひ出した事を後へ引かぬ質の人だから、遂に世の期待を外に見て、とう〳〵自分の意地を立て通して了つた。

見す〳〵手に入るべき大金を、塵芥の如く捨てゝ顧みざりし彼の態度は、現今最高の權威を持

續しつゝある野球内閣、即ちナショナル・コンミッションの出現を促すに至つた。ナ・リーグからはハリー・ブューリアム。ア・リーグからはバン・ヂョンソン、而して委員長としてはォーガスト・ハーマンが推擧されて、此に初めて確乎たる米國職業野球團の本部が築き上げられたのである『その議なら敢て戰を辭まない』と、ブラッシュ氏も乘り氣になり、巨人軍が費府アスレチックスと愈よ本式の世界選手權試合を行つたのは、一九〇五年の秋十月であつた。試合は大マチーの獨舞臺で、彼は三回連勝、而も悉く零敗に敵を屠つて、今に破られざる尊き記錄の持主となつたのである。

◇　大投手マシューソン

一九〇三年に於ける米國野球界の驚異は、大マチーが示したる異常の進境である。彼は十分なる身長と、優れたる體力との持主で、その巨腕から繰出す速球は、恐るべき威壓を打者に與へずには置かなかつた。其上彼を偉大ならしめたものは、彼が有する天稟の記憶力で、私は嘗て彼の如き强記の人を見た事がない。

マチーが初めて巨人軍の投手として立つたのは、彼が十八九歲の時で、まだ弱々しい嫩芽なが

技倆、人格共に米國野球界が生める大立物として謳歌されたるクリスチー・マシューソンは、從來ボストン・ナショナルの總理として斯界に重きを爲してゐたが、一九二四年秋、バイレトと華盛頓との間に行はれんとする世界選手權試合の第一日に病の爲め長逝した、その昔世界選手權試合のヒーローとして活躍したる彼が、思ひ出多きその試合の日に此世を去つたのは奇蹟である。

ら、何となく末は天をも摩せん良材となるべき、風貌と技倆とを兼備してゐた。彼が若かりし頃の失敗談に就いて、一つお話しをして見度い。

或時の試合であつた。九回に入つて、味方は一、敵は零である。其時敵は走者を壘に出して、古強者のヂミー・スラッグルが打者としてボックスに立つた。彼は速球に對しては恐るべき打者であるが、カーヴは不得意であるとの定評があるので、無論その弱點に附け込む事とマチーは考へてゐた所、どう間違へたものか、捕手バワーマンは肩の上部を通ずる速球を出すべき信號を與へた。マチーに取りてバワーマンは先輩であるから、彼は別に異議を云はずに、註文通りの球を投げ込むと、スラッグルは此所ぞと許りに、渾身の力をバットに籠めて一振りした。球は非常な勢で外野の空へ飛び、ホームランとなつたので二者生還、誠に呆氣ない敗け方をして了つた。私は稍やムッとした氣分になつて、マチーをかう詰つた。

『スラッグルは高い速球が得意なのに、何だつてあんな球を投げたのだね』

『私は唯バワーマンの信號通りにしました』

マチーの返事は甚だ率直であつた。さうして二人の間には次のやうな會話が交換された。

『今度弱點の分らない打者があつたら、私に聞くやうにし給へ』

『貴方はどんな打者の弱點でも、悉く御承知ですか』

『知つてゐないのもあるが、野球期の終る迄には、皆な頭の中に入れて了ふから安心し給へ』

『何故走者が三壘にある時、内野手を淺く守らせるか判つてゐるかね』

これは判り切つた質問ながら、私は教訓の中心に彼を連れて行かねばならぬので、態と平凡な一問を發した。

『それは打者の打つた球によつて、走者が本壘を襲はんとするのを防ぐ爲めです』

『さうだ、その時君の依賴する球は、どんな種類のものだね』

私の質問はやうやく根本に觸れんとしてゐる。

『無論カーヴです、カーヴなら打つた球の多くは強い當りを見ませんから、内野も取扱ひいゝと思ひます』

『其處だよ君の心得べきは、さうすると何故あの際君はスラッグルにカーヴを投げなかつたか、甚だセオリーに反した行爲と云ふ事になるではないか』

マチーは私の顏をヂーッと見て、さも嬉し相に肯いて見せた。翌日彼は私の所に來て、打者に就いての私の觀察を聞取つて行つたが、悉く記憶したものと見えて、其後の試合にあつても、二度と聞き直す事さへなかつた。

マチーの師範役は、鐵腕投手のマギニチーである。マチーは競技場にマギニチーが出ると、その一擧一動を熱視して、悉く彼の長所を頭腦の中に貯藏して了つた。今尙斯界の物語りに殘る所の、彼が唯一の武器として敵を苦しめたる魔球『フエード・アウエー』の如きは、驚くべき曲折力を有する緩球の一種であつて『マチー以前にこれなく、マチー以後また之を見ず』と云はれる程、天禀の才と苦心の結晶とによつて出來上つたものであるが、これとてマギニチーの投球から、學ぶ所が多かつたのである。

◆

自分の力量が非凡になると、直ぐ天狗になるのが人情の常で、奇行投手として有名なワッヂルが、三人で試合したが如きはその好適例である。マチーは之に反して、投手は決して一人で戰ふものではなく、彼の前後左右には、八人の戰友がゐる事を忘れなかつた。されば壘に走者がゐ

ない時は、比較的樂な投法を取り、一人でも走者を出すと、そろ〳〵踏張りを利かせ、いよ〳〵危機に臨んでは、渾身の勇氣を呼起して奮戰するのが、彼の勢力を濫費せざる戰法の一であつた。初心の人々は、自分一人の喝采を博する爲め、徒らに三振の數を殖さんと努力する向もあるが、これは損あつて益なき事である。

マチーの制球力に富んだ事は、從來の投手にその比を見ざる程で、彼は一野球期を通じて、唯一つの四球を敵に與へたと云ふ素破らしい記錄の持主である。

マチーとマギニチーとは、一九〇三年に二人して七十五回の勝利を巨人軍に與へた。この位の投手が常に二人も揃つてゐれば、ペナントの所有主となつて、世界選手權試合の舞臺に立つのは、甚だ難しい事ではない。併し世間にはかゝる名投手のみ揃ふものではない、可なり手數のかかる手合の方が却つて多いのである。

早慶時代

明治三十八年　我が野球史に謂ふ所の早慶時代を劃せる第二年である。此年早大は愈よ宿志成つて渡米の途に就いたのは四月二十日、まだ日露戰爭が終熄せず、バルチック艦隊來襲の報頻りなる時分であつた。一行は安部磯雄氏を監督として左の十二人である。

投手河野　捕手山脇　一壘泉谷　二壘押川　三壘小原　遊撃橋戸　右翼獅子内　中堅小原　左翼鈴木　補缺細川、立原

一行は五十餘日を太平洋沿岸に送る間二十六回戰つて僅かに七勝せるのみであつた。されどこの敗北は當然の結果であつて、其頃に於ける早大チームの力量を以てしては、本場のチームにどうしても勝てやうがなかつた。手腕に於ても頭腦に於ても、彼等は丸で別個の野球をしてゐたのである。されば早大は歸國後、彼地で見聞せる新しい野球を紹介し、此に舊式のものは影をかくして、科學的の新野球が我國で行はれるやうになつたのである。

早大遠征土產の一として、この秋から早慶戰は三回で決することになつた。而して第一回は早大敗れ、第二、第三戰に於て慶應は大敵を逸した。當時の學習院は、斯界のダークホースである。屢々早大を苦しめ窮地に陷いれた事さへあつた。

早大の持つて歸つた他の土產に新らしい應援法があつた、それは數十人を一團として、エール

を叫び、若しくは校歌を合唱するのである。吉岡信敬君はこの園長として有名な人であつた。

所謂この渡米によりて持來されたネオ野球時代と、舊式の野球時代との間にどんな相違があるかは、紙面に限りがあるから此に述べない、飛田忠順氏編の早大野球部史が這般の叙述を遺憾なからしめてゐるから就いて見られ度い。

西暦一九〇五年　又々紐育が優勝した、マグロー將軍の得意や思ふべしである。

ナ・リーグの總理ピューリアム氏は、身を賭して腐敗せる當時の野球界と戰ひ、遂に暗雲を一掃して、同リーグの搖がぬ基礎を作つた。

最初の世界選手權試合が、巨人軍と費府アスレチツクスとの間に行はれ、前者の勝利に歸した。

ナ・リーグにあつては、巨人軍とビツツバーグ海賊軍とが、共に相下らざる二大頭目で、丁度今年の爭覇戰のやうに、一進一退の成績を擧げてゐた。さればマグロー將軍の自叙傳にもこの時代の出來事を可なり詳說し、且つ海賊軍とのイガミ合ひに就いては、抱腹絶倒せしむるやうな挿話さへ掲げてゐる。私は讀者諸君をまた〳〵その記事の中へお連れしなければならぬ。

◇　未曾有の强チーム

一九〇五年度に於ける紐育巨人軍は、一言にして盡せば、古今未曾有の最强チームであつた。一八九四年から九六年にかけての、バルチモーア・オリオレスも可なり秀いた團體ではあつたが、當時の巨人軍に比すれば、多少の遜色は免れなかつた。然らば左程自慢する巨人軍の特徴は何であるかと云ふに、第一は古今に獨歩する大マチー。マギニチーの二大投手と、之に配するにバワーマン、ブレスナハンの二名捕手を併せ得たと云ふ事である。私の長い野球生活の間に、成程名人であると感心した捕手は、約十二人程ある。殊にヂョー・クリングの如きは、最も優れたる防備力を持ち、壘へ投げる球の美事さは、何とも云へぬ位であつたが、惜しむらくは攻擊力に於て、拔群の域に入る事は出來なかつた。之に反して巨人軍のブレスナハンは、一野球期に三割の打擊率と、四十五の盜壘をした記錄を持つてゐる。投、捕手は最も劇しい仕事をするのであるから、打擊、走壘の振はざるは、些か構はぬ習慣であるのに、以上の如き好成績を作る事となると、チームとしての實力が、どれ程增大するかは、全く想像以上である。其上ブレスナハンは投手から外野迄、何でも御座れの優れた萬能選手であつた。此の如き名選手は、米國野球界が生んだ理想的

プレイヤーとして、萬代迄も謳歌せねばならぬと思ふ。而してこれ等優秀なるバッテリーを取圍む他の選手は、何れも持場獨得の技倆に秀で、而も揃つてブルの如き戰鬪的氣分に富み、電光の如き迅速なる判斷力を有する點に於て、遙に他のチームを凌駕したのであつた。

◇

其頃巨人軍にとりて最も手强い相手は、ピッツバーグ海賊軍で、可なり緊張した大試合を續行した爲め、双方に附隨するフワンも、圖拔けた敵愾心を發揮して、至る所に脫線的の興奮、紛擾の種を振り撒いたものである。巨人軍の背後には、何と云つても大都市紐育が附いてゐる。だから紐育で試合をする時は申すに及ばず、敵地へ乘込んで行く時でも、多數のフワンや新聞記者が、チームを擁して出かけると云つた調子なので、行く所として横暴振りを發揮するかの如く見做されたのには困つた。ピッツバーグ市の一新聞紙は嘗て『無遠慮極る巨人軍』と大きく書き立てた下に『黃色紙の記者などに圍繞されつゝ』などゝ、どちらが無遠慮であるか判らぬやうな見出しを附けて、同市のフワンを焚きつけたりなどしたものである。

◇

私共がピッツバーグ市へ行くと、必ずモノンガヘラ旅館を宿と定め、其處から無蓋馬車に搖られて、グラウンドへ乘込むのを常とした。其間に大きな靑物市場がある、これが頗る難儀な關所で、幸にグラウンドの前で、小石の雨に見舞はれずに濟む事はあつても、屹度この市場では、何等かのケチを附けられるに決まつてゐた。可なり物騷な關門ではある。

或日兩軍は鎬を削つて力戰し、スタンドは引くりかへるやうな騷動に搖れた後、私共は馬車に乘つて歸らうとする刹那、何處からかヒューと不快な音を立てゝ、小石が頭上を掠めて行つた。一つ又二つ、數は段々殖えて行く。這那所に長居は無用と、どん〳〵鞭をあげて、第二の難關たる靑物市場に來て見ると、例の如くタヾでは通さぬと許りに、歩哨戰とも見るべき毒舌を投げかける一團が、其所にも此所にも現はれて來た。此方も鬼と取組まん許りの若者揃ひだ、負けずに二言三言言ひ爭ふ中、矢庭に腐れかけた馬鈴薯が、臭氣を空中に漂はせながら、一行の眞上にと落下したのを合圖に、玉葱、赤茄子、眞桑瓜などの類が、雨霰の如く飛んで來る。而も悉く腐れかゝつたもの許りだから、臭いの臭くないのつて堪つたものではない。此時溫厚の君子マギニチーは、馬車の上に仁王立となつて、市場の人々をなだめ、更に振かへつて、イキリ立つ戰友を押

鎭めんとする刹那、後方を見せたから耐らない、眞赤に熟し切つた赤茄子を、この巨人の臀部に四つ程矢繼早に叩きつけたので、敵も味方も、ドーッと聲を擧げて笑ひくづれた。可哀想にマギニテーは紐育に歸る迄、その汚點を洗濯する事も出來ずに、グラウンドで耻かしい思ひを續けてゐた。もう一つの馬車にゐたサミー・ストラングは盛に罵詈を交換してゐる最中、眞桑瓜を横面に叩きつけられて、火の樣に怒つたが、どうともする事が出來ずにブー〳〵云つてゐた。散々な目に逢つて、ホテルに引上げて見ると、馬車の中は、丸で塵芥箱を引くりかへしたやうで、鼻持ちがならぬ有樣であつた。

こんな事は決して一度や二度ではない、何回となく繰返されて、その都度怒つたり、笑つたり、兎に角昔の野球には、野趣が多くて頗る面白かつたものである。

◇　早慶戰の中止

明治三十九年　我が球界にとりて一大恨事の殘された年である。天下の耳目を集めた早慶戰は春行はれずして秋行はれたが、一勝一敗の後、いよ〳〵決勝をなすに先立つて、應援に不穩の傾がある、流血の慘事を見る杞憂ありとの理由の下に先づ慶應側から中止が申出され、早大も相手なき相撲は取れず、止むなく同意するより外はなかつた。其後二十年の間、再三再四相見ゆる機會もあつたが、兩者は遂に握手の機會がなくして濟んだ、されど時の力はいつまでもこの反目を許さず、大正十四年の春に至つて三田から正式の使者が早大を訪ひ、その秋から快よく試合を再開せん事が約束された。二十年……餘り長い、されど再開は中止の繼續よりもベターである。尠なくとも行詰らんとする球界に、一道の生氣を添へるものである。

西暦一九〇六年　市俄古大勝、有名なる三指投手モデカイ・ブラウンの活躍に負ふ所が多い。監督は向ふ見ずで有名なるフランク・チャンスであつた。

此年のペナントを得る爲め、市俄古は百十六回の勝利を得た、蓋しこの記錄は未だ破られないで嚴存してゐる。

明治四十年　早慶戰はず、球界は一葉落ちて天下の秋を知る淋しさで支配された。この寂寞を破つたものは布哇聖路易大學チームの來襲で、十月の下旬、慶應の招聘に應じて、初めてスッキリした外來チームの姿を我が邦土に見せたのである。慶應は善戰して二勝三敗したが早大は三戰三敗して苦戰に泣いた。來襲軍の花形には、ローン。ジョンス。フエルナンデス。ブッシュネル、

支那人エンスイなどあつて縱横に手腕を振つた。慶應では小山、福田、佐々木、神吉などの若手が奮闘し、早大以上の成績を見せた。

此時の慶應は强い筈である。早慶戰當時未だ十分發育せざりし鳳雛が、漸く技倆の爛熟期に入らんとする所であつた。之に反して早大は漸く老い、取つて代はるべき新らしき要素を求めつゝ而も得ざる時であつた。

慶應は布哇軍の招待費に宛てる爲め見物人から人場料を徵集した、蓋し我國に於ける最初の試みで、何等の故障なく遂行せられた。早慶共に一高の挑戰に應じ共に快勝した。

西暦一九〇七年　市俄古また優勝。ブラウン。オーバラル。ルユールバックなどの名投手、チャンス。エバースなどの内野が鐵桶の守備力を見せた頃である。流石の巨人軍も、この優勢に對して一指を染める事さへ出來なかつた。

◇　一高早大に勝つ

明治四十一年　一高が久方振りで早大を破れる年である(五月八日)。一高のバッテリーは戸田、田代、早大は新に水戸中學から來れる巨漢大井をプレイトに立て、老練の山脇を以て配したが、十一回戰後遂に敗北したのである。河野、押川、森本を送れる早大は著しき淋しさを見せた。

この勢を持して一高は慶應に挑んだが、七對二で無事に擊退された。

此夏慶應は布哇に遠征した。我が野球史上記憶すべき第二回の海外旅行である。約二ヶ月滯在して六勝四敗の好成績を得た。

秋は華盛頓大學が早大の招聘に應じて來朝し、早大は一勝三敗、慶應は三戰三勝、華軍をして顏色なからしめ、邦人チームの爲め萬丈の氣焰を擧げた。

十一月に入つてリーチ・アメリカンなる米人チームが來朝した。彼地に於ける二流所の選手を網羅したのであつたが、我が學生チームでは齒が立たなかつた。十七戰十七勝、彼等は悠々として南洋地方への旅を續けた。これ等の選手は重に太平洋沿岸のコースト・リーグから選ばれたものであつたが、東部の大リーグからはデレハンテー。フラハテー(華盛頓)ダンヂック(ボストン)などが參加した。

西暦一九〇八年　紐育と市俄古とは同點となつて最後の勝負を爭ひ、結局後者の勝利に歸し

た年である。

この試合本來から云へば、巨人軍の勝利であつたものが、巨人軍の一壘マークルが、粗忽にも踏むべき二壘を踏まずして更衣室に引上げた爲め、兩者は再戰を餘儀なくされ、遂に市俄古の勝利に歸したのである。米國の野球史では、これをマークル事件と稱して、選手が陷いつたボンヘッドの隨一としてある。

◇ 早大の不振

明治四十二年　一高又々早大を破つた。されど慶應に逼りてまた壁退せられた。

秋になつてウィスコンシン大學慶應の招聘に應じて來訪し、同チームとは一勝三敗、早大とは二勝一敗した。慶應中興の名投手管瀬一馬氏の初陣を飾る試合であつた。早大は頼みとする大井對一高戰に肩を傷つけて立たず、年少大村プレイトに立ちてよく一勝を得た。

西曆一九〇九年　ピッツバーグ優勝。

海賊軍のワグナーは、七回ナ・リーグのリーディング・バッターとなつて從來の記錄を一掃した。

野球規則の變更されたものが四つある。

(一) 審判員は選手が交代せる際、觀覽者に向つてその名を披露せねばならぬ。
(二) 打擊順は試合前本壘に於て審判員に交附せらるべき事。
(三) 投手が投球モーションを附けた後、ボックスを代へた打者はアウトたるべき事。
(四) 甲走者が前の走者乙を追越した時は、その刹那甲はアウトたるべき事。

ナ・リーグの第五總理ハリー・ブールマン氏死し、ジョン・ヘイドラー氏後任に推擧され、それが今日に及んでゐる。

コーク・センターの用球が發明され、それが一般リーグの間に行はれるやうになつた。飛び方が烈しいので投手は大弱りである。

明治四十三年　早大三年振りで一高に報復し、慶應は依然段違ひの試合で向陵軍を擊破した。

早大布哇に遠征し、十一勝十三敗の成績を得た。

特筆大書すべきは早大に招かれたる市俄古大學チームの來朝である。主將にして投手ベーチの怪腕は、早大の打者をして施すに術なからしめた。早慶は三回宛戰つて共に敗れたが、慶應は比

較的善戰し、早大は醜敗の結果内訌さへ起る不幸を見た。

◇ 明大野球部生る

後に至りて早慶と對峙するに至つた明治大學野球部は、此年の秋を以て呱々の聲を擧げたのである。コーチは慶應の小山、福田の二選手、投手は早大にありて志を得ざりし山下君、一躍して早慶の壘を摩するには、役者が十分でなかつた。

西暦一九一〇年　市俄古優勝、コール。オーバラルの時代で、ブラウンは稍や下り坂となつてゐた。

前のナ・リーグ審判トーマス・リンチ氏は、同リーグの總理に推擧された。

明治四十四年　春早大は前年來朝せる市俄古大學の招きに應じて渡米し、三十三敗十五勝の成績で歸朝した。

早大の出發に後るゝ事約二旬、慶應もまた渡米したが、二十七勝十七敗引分二で、頗る上乘の首尾であつた。

東海道に試合旅行を試みて好成績を擧げたる明大は、多大の野望に燃立ち、早慶に挑戰したが、何れも輕く擊退されて問題にならなかつた。

西暦一九一一年　紐育巨人軍優勝、マシューソン。マーカードなどの盛んに活躍せる頃である。

大正元年　一月下旬早大は馬尼剌の謝肉祭に招かれて渡馬、三敗二勝で成績は餘り芳ばしいものではなかつた。

一高振はず、早大には四對零、慶應には十二對一で共に大敗した。

この春明大には藤枝中澤など入部、早大とは四對二、慶應には五對零で敗れたれど、充實せる意氣は大に世の認める所となつた。

世は諒闇となりて各方面の野球競技は、等しく中止となつたが、喪の明くを待つて早明、慶明は盛んに戰ひ、新進の明大は漸くにして早慶のレベルに達せんとする勢を見せた。池田、中村二選手の加入は、大に同チームに強味を增した。

西暦一九一二年　巨人軍又々優勝。

巨人軍の投手マーカードは十九回連勝の成績を擧げて、一八八八年にキーフが得たる記錄に追

付いた。

◇　球界頗る多事

大正二年　球界多事の年である。二月馬尼剌に於て極東競技大會の第一回が開かれ、我が野球界を代表して明大が赴き、七戰五勝の好成績で凱旋した。凱旋後の明大振はず、早慶に敗れて、覇權への道は鎖された。

一高また〳〵早慶に敗る。殊に早大には九對零で、ノーヒット・ノーランに終つたのは珍らしい記錄である。

全比軍來朝、盛んに負けてゐる時分スタンフォード大學が慶應の招聘に應じて來り、相當によい試合を見せて呉れた。就中ス軍の投手メーブル、對慶應の菅瀬の投手戰は物凄いものであつた。

秋は華盛頓大學の來朝でまた賑はつた。慶應は例の菅瀬投手を押立てゝ善戰したるに引かへ、早大の苦戰は見るも憐れであつた。投手難は依然として戸塚に災してゐる。慶軍は二度華軍と爭つて一はフォーフィッテッド・ゲームで勝ち一はコールド・ゲームで敗れた。勝敗以外手間の取れた試合であつた。

十一月に至つてマグロー、コミスキーの引率する世界一周野球團の來朝があつた。憧憬の的となれるスピーカーやクローフォードやマークルなどが猛打また猛打を續けてフワンの膽を奪ひ、音に聞く小ナポレオン・マグロー將軍のシェドー・ボールなども見せられて、愉快なる數日が三田のグラウンドで送られた。これに關する記事は、マ將軍の自叙傳中にあるが、日本に關するものとしては左の數行があるのみである。

『英語を使用されぬ國の中では、日本が最も多く野球を理解する國である。而も各大學には何れも立派な學生チームがコーチされて、毎年盛んに覇を爭つてゐる、日本は近き將來に於て、玖馬の如き野球國となるであらう』

西暦一九一三年　紐育また優勝。

巨人軍の名投手マシューソンは、此年五十イニングスの間一回も四球を出さざる記錄を得た。

第二の世界一周がマグローとコミスキーとによりて行はれた（前述のものと同じ）

一九〇六年あたりからアメリカン・リーグの强味はグン〳〵と增された。私はこの記述をする

に、又々マグロー將軍の自叙傳を拜借して、當時の光景を偲ぶと共に、巨人軍奮鬪の跡を紹介し度いと思ふ。

◇ アメリカン・リーグの擡頭

一九〇七年から一二年迄の米國野球界は、アメリカン・リーグの强味が增すと共に、甚だ殷賑を極めるやうになつた。當時ナ・リーグにありては、巨人軍が市俄古カッブスと對峙して鎬を削り（流石一時は根强く爭つた海賊軍は此頃漸く衰へて行つた）一方ア・リーグにありては、コニー・マックの引率する費府アスレチックスが一頭地を拔いて群雄を壓してゐた。此中最も公平な見地から見ると、遺憾ながら費府軍の强味が一番多かつた樣である。即ち投手としてベンダー。ブランク。クームスのトリオは、何れも名人の域に達した人々で、其他カリンス。ベーカー。バーリー。マクイネスなど、何れも一騎當千の猛者のみを集めたものである。巨人軍は一九一一年にこのチームと世界選手權試合を爭つたが、以上の三大投手が代り〳〵ブレイトに立つので、手の附けやうもなく打負かされた。併し試合はいつも緊張味を缺いた事はなく、敵に當時のベーブ・ルースとも云ふべきホームラン・ベーカーさへゐなかつたならば、さう易くは敗れなかつたであらう。もう一つ巨人軍の敗因とも云ふべきは、例の强敵カッブスとの爭覇の爲め、私共は疲勞の極に達してゐたからである。兩虎相搏つて、一虎は倒れ、一虎は傷けられて喘ぐ所を仕留めたのは費府軍で、爭つた虎は市俄古と巨人軍とであつた。

◇

由來巨人軍は盜壘に優れたチームである。殊に一九一一年の一團と來ては、栗鼠のやうに素早い人許り揃つてゐたので、盜壘の多いことは、他チームの二倍半位はあつた『優勝旗を獲たのでなく、盜んだのだ』と云つて私共は笑つた位である。この盜壘チームが、野球期も終りに近附いて、大勢を決すべき大事の試合を、例のカッブスと數回行ふべく市俄古に乘込んだ時は、何れのヅボンを見ても穴だらけで、縱横に膏藥を貼り付けて間に合はせてゐた。就中デボーア。マークル。ムレイ。ヘルゾックなどと云ふ連中のものは、連日の烈しい滑り込みに地が薄くなつてゐるから、日光にすかして見ると、丸で脚部がよく判る、これを『エックス光線バンツ』と呼んで、彼等は笑ひ合つたものである。餘りヒドクなつたので、私は紐育に打電して新らしいものを取寄せたが、それが着いた時、一同が示した喜悅の表情は、今も忘れる事が出來ない。

こんな調子に烈しい試合が續いたので、一同は悉く疲れ切つて了つた。個樣の始末では、假令ペナントを取つても、後の世界選手權試合には役に立たぬと思つたので、私は殊に少量のビールを飲むことを許した。それでも氣が引立たぬので、或者がウイリー・ロビンソンを紐育から呼んで呉れと云ふのに委せて、直に來るやうに打電した。ロビンソンは春期練習の大取締りで、彼の持つて生れた愛嬌と德望とは、どんな陰氣な人をも心から陽氣にさせないでは置かぬのである。

翌朝食卓に一同がズラリと並んでゐる頃、快活な彼の顏は、ホテルの入口に表はれた。直ぐ食堂に走り込んだ大取締は、呆氣に取られてゐる皆の顏を一廻り見廻はしたが、イキナリ破鐘のやうな聲をして叫び出した『オヤ皆なぴん〳〵揃つてゐるぢやないか、電報なんか打つから、誰かまいつたのだと思つた』一同は思はずドーッと笑つた。こんな調子で、人を煙に捲いて了ふのが此人の得意とする所で、やがて尊重される所以なのである。彼は其夜大マチーやマーカード其他二三を連れて町へ出たが、輕い飲物で興奮させて置いて、あらゆる面白い話で選手の勞れを醫やして呉れた。一同は彼が來たので、生命の洗濯でもしたやうに、よく笑ひよく談じた。スツカリ優勝戰の事は忘れて、クリスマスの前夜が來たやうにハシヤいだのである。

◇

巨人軍は個樣な苦心の末、やうやく强敵カツブスに勝つた。されど一方の大敵、費府アスレチツクスは、早くからペナントを得べきチームと決してゐたので、巨人軍が市俄古で戰ふ時には、絶えず二三人の選手を派遣して、我等の弱點を見定めてゐたから耐らない、いよ〳〵世界選手權試合の舞臺に上つて見ると、始終押され氣味で勝味に乏しかつた。特に不思議なのは、あの名投手マークルが、私の忠告を忘れて、油斷のならぬベーカーに大好物の高い球を投げた事である。ベーカーはその機を逸せず、美事な本壘打を飛ばして勝因を作つた。更に不思議なのは、この苦い經驗を目擊して、今更のやうな感に打たれた筈のマチーが、フトこれと同樣の球をベーカーに投げて、二度目の本壘打を飛ばされたことで、用意周到の彼に、此の如き失策が出るやうでは、とても勝利は覺束ないと見なければならぬ。

◇　三大學リーグ戰成立

大正三年　三月慶應はスタンフォード大學の報酬的招待に應じて渡米、十七敗十二勝引分一の成績で歸る。

明大が早大を破つて氣焔を擧げた、されど二、三回の兩戰には敗れて、未だ宿意を遂げる事が出來なかつた。

明大は華盛頓大學の招聘に應じて渡米し、歸朝後十一月二日慶應に勝つたが、二回に敗れ、三回を引分け、決勝戰を春の早大同樣に失つた。秋の明大は早大に二敗した。

此年から早慶明三校の間にリーグが締結され入場料を徵する事となつた。

西暦一九一四年　ボストン優勝。

可なり多くの野球規則が改正された。

各倶樂部の選手は廿一人と決せられ、期限は五月一日から九月一日迄とされた。

大正四年　一月馬尼剌へ遠征せる早大は、一勝四敗引分一の成績で歸る。

五月三田は新チームを編成して一高を校庭に迎へたが、芦田投手のアンダー・スロー功を奏して四對三、接戰ながら一高が勝つ、明治三十七年の昔から負けたことのない慶應は、久方振りの敗衄に泣いた。

一高は勢猛に早大に當つたが、十對五で大敗した。五月十六日の出來事である。

五月廿四日慶明は決勝戰を三田綱町で行つた、此時三塁側に於ける明大のコーチが走者に觸れたるを以て慶應のコーチ三宅氏は新規則によりてアウトなりと主張し、主審故花井氏（早大選手）は習慣上その規則は用ひずと云つて下らず、結局慶應は退場し、審判は試合をフォーフィッドして明大の勝利を宣告した。

大阪朝日新聞社主催全國中等學校野球大會の第一回が大阪市外豐中で行はれ、京都二中と秋田中學とが決勝を爭つて前者の勝となつた。

秋に至りて市俄古大學再來、また〳〵十戰十勝して引上げた。ヂャーディンの猛球、ベーヂのカーヴは我が打者にとりて餘りに鋭かつた。

法政チームが芽を吹き出した年である。

西暦一九一五年　フィラデルフィア優勝。

ナ・ア兩リーグ以外にフィデラル・リーグなるものが出來たが、一年にして滅びた。

エー・ヂー、スポーディング氏逝去。嚮に紐育巨人軍の持主であつたフリードマン氏も死んだ。

大正五年　早大は大阪、明大は奈良で冬期練習を行ひ、其後二回同地で戰ひ共に早大の勝に

歸した。今後引續いて冬期練習を關西の地で行ふに至つた。

春の早明戰は一勝一敗。早大はその戰を濟まして第三回渡米を行ひ、二十敗九勝の不成績に終つた。投手としては岸、川島、伊藤、捕手は市岡である。

法政慶應と戰ひ、二回共大敗したが、第三回戰は十一回のエキストラ・インニングに入りて惜しくも敗れ存在を認められた。笠原、由家がバッテリーである。

慶應は一高に赴いて戰ひ、三對二で敗北した、森の投球は何等の脅威を向陵軍に與へなかつた

全國中等學校野球大會の覇者は慶應普通部。

秋は布哇から聖路易チームが來て賑はつた。

早大は聖路易に大敗した爲め士氣振はず、明大とは一勝一敗して十一月十二日決勝戰を行つたが十一回にして引分けとなつた。

西暦一九一六年　ブルクリン優勝。

巨人軍は此年十七回連勝、更に二十六回連勝の記錄を作つたが、遂に優勝するに至らなかつた。

各チームの所屬最大數たる廿一人の選手は廿二人に增加。

大正六年　極東競技大會の豫選は可なり賑はつた。結局學校では早大、倶樂部では横濱ナインとなつた。後者には菅瀬、小野、肥後、櫻井、龜山などがゐるので、宛から早慶の對抗を見るが如く大した人氣であつた、横濱は善戰して二回共に敗れた。

五月慶應は二回共に明大を破る。慶のバッテリー森(茂)平井、明大　藤田、海老塚。

極東競技大會は五月九日から芝浦で行はれ、日本を代表せる早大は、比島代表チームに勝ちて、野球の覇權を握る。バッテリー橋本市岡。

五月十九日慶應は六對零で一高を破り積年の耻辱を雪いだ。バッテリー森(茂)平井。

秋は明大、慶應と戰つて三戰三敗、早大とは二勝二敗で打切つた。早大は岸、明大は藤田が重にプレイトに立つた。

全國中等學校野球大會では愛知一中が關西學院と惡戰の後優勝した。

西暦一九一七年　紐育巨人軍久方振りで優勝す。

前記テンプル・カップの寄贈者たるウィリヤム・テンプル氏は、フロリダのウインター・パークで死んだ。

◇　一高早慶を破る

大正七年　四月十四日明大の藤田投手は、早大の橋本投手を破り、二回戰は早大復讐、決勝戰は二對零で明大遂に勝ち、初めて本懐を遂げた。慶應とは一勝一敗。

五月四日早大は七對零の大スコーアで一高に敗る。越えて同月十八日、一高は餘勢を驅つて慶應をも四對零で破り、美事覇權の奪還に成功した。バッテリー内村、中松。

早慶と善戰せる明大は、法政の破る所となつた。法政のバッテリーは植田、由家。

秋は法政よく戰つて早大と決勝戰に見え、九回を終つて共に零であつたが、十回に二點を得られて惜しくも敗れた。

十月早大は明大と戰つて一勝一敗し、決勝戰は六對四で、前年の雪辱を爲した。

慶應は小野、新田投手として頻りに振ひ、明、法を問題にせずして連勝した。

全國中等學校野球大會は大阪を中心として起れる米騒動の爲め中止。

西暦一九一八年　市俄古優勝。

ナ・リーグ所屬選手グラント大尉アルゴンヌにて戰死、ボロ・グラウンドの一隅に立派な記念碑が建てられた。

大正八年　春の早慶は共に全勝して十分の力を見せた。

早大は五月十一日六對四で一高を破つて雪辱、怪投手内村をよく研究して安打十本、中島、田中、市岡、高松など盛んに猛打を浴びせた。早大のバッテリーは澤、市岡、一高は内村、木内。

越えて十六日慶應もまた一高に勝つ、徹頭徹尾投手戰を演じ、新田の三塁打で戰は決した。

秋は明大小野、新田に苦しめられて慶應に二敗し、早大とは決勝戰迄漕ぎ付けたが、五對零で大敗。

全國中等學校野球大會は神戸一中が長野師範を破つて覇權を握る。

西暦一九一九年　シンシナタ優勝。

ナ・リーグは一シーズンに百四十回の試合を爲すべく決定。

日曜に試合する事が紐育州に於て許可された。

◇　市俄古三度來朝

大正九年　明大法政共に不振の春である。早慶は樂々と全勝した。

五月二日早大は一高軍を自校庭に招いて戰ひ、十對三で大勝した。一高の應援は從來の態度を改め極めて靜肅に試合を見た。

其後一高は慶應を破つて男を上げた、新田よく打たれ、小野が救ひに出たが間に合はずして三對二で敗れたのは全くの番狂はせであつた。

市俄古の第三回來朝は五月十一日であつた。前二回全勝せる同軍も、今回は常勝を繰返し得ず、第一回の來朝以來二十八回目に於て慶應の爲め敗れた。早大も松本をプレイトに立てゝまた勝ち、東都に於ける成績は一勝一敗引分一であつたが、共に關西へ赴いた後は市軍に勝味が多かつた。慶應は關西より歸れる市軍を迎へて決勝戰を爲し、一對零でこの大敵を破つた、小野の好投と森の三壘打は、此日の偉勳である。

秋は早大が明大に勝つた、谷口の初陣は、その決勝戰に於てなされた。

早大に勝ち得ざりし明大は、一方慶應の決勝戰に勝つて萬丈の氣焰を擧げた。バッテリーは渡邊、岡田。

全國中等學校野球大會は、關西學院覇權を握る。優勝戰は慶普との間に行はれ、十七對零の珍らしい記錄を殘した。

此秋日本運動協會なるものが早大系の人々によりて創立された。合資組織の下に開かれたが、後に株式會社となり、定款として左の三ヶ條を發表した。

一、運動及び競技に關する一切の事業の經營。

二、運動競技場の設計工事、工事監督、修繕、請負及び之に附帶する一切の事業。

三、各種運動體育用具製造販賣及び之に附帶する一切の業務。

尙此上職業團を作つて、協會の財源とせん計畫があり、着々として業務に就いたが、大正十二年秋に起つた大震災と共に潰滅した。

之に對抗して北郊尾久に、中野神吉などの人々が一大運動場を經營したが、之れも忽ちにして經營難に陷いつた。まだ日本には野球事業が早きに過ぎたのである。

西暦一九二〇年　ブルクリン優勝。

ナ・リーグは一シーズン百五十四回試合する事となる。可なり多くの規則が變更された、フリーク・デリバリーの禁止の如きその一である。

ボストンとブルクリンとは二十六回一對一の試合をして、最も長い試合の記錄を造つた。

ナ・ア兩リーグ共に了解の上、ケネソー・マウンテン、ランヂスを最高幹部として、一切の主權を委ねた。

◇　外來チームの輸入超過

大正十年　多忙な一年である。此の如く外來チームの多く來朝した年は未曾有である。されば何れも財政難、これを取扱つた人々は何れも尠からぬ痛手を負はぬものはなかつた。

春は運動協會主催の三田稻門戰で賑はつた。この競技の目的は早慶の握手にあるので、現役選手三人迄を限つて出場させ、成るべく相互の接近を計り、一方その所得の五割を協會が得て經營費に宛てる事となつた。三田には小野、稻門には谷口ブレイトに立つて、勝敗以外に非常な元氣を見せ近頃の快戰であつた。

三月二十七日早大は第四回米國遠征の途に上つた。十五勝二十三敗、依然として早大は遠征運がない。

極東大會豫選は明大とダイヤモンドとの間に爭はれたが、後者の勝利に歸した、其後ダ軍は同大會出場の爲め上海に赴いたが、比島選手の爲め敗北した。五月の末加州大學が來た、品の惡いチームであつた。

八月から秋にかけてカナディヤン・スター。華盛頓大學。シャーマン・インデヤン。全布哇スター。日本人チームとしては晩香坡旭、シヤトル朝日、全布哇、ヒロなど云ふ連中が來て目まぐるしい程の試合が擧行された。

其外見るべきものとしては五大學リーグ戰に早大が全勝し、早慶が一高を破り、稻門が三田に春の復報をした三試合である。

華盛頓大學が早大の招聘に應じて來朝したのも此秋である。對大學戰は大した感興もなかつたが、全布哇スターとの試合は巨人揃ひの事とて火の出るやうな競合を見せた。

全國中等學校野球大會には和歌山中學優勝す。

西暦一九二一年　紐育巨人軍優勝。

巨人軍のメンバー中には、其後益す圓熟の境に入れるバーンス。ライアン。ネーフなどの顏振れが投手團に見え、ケリー。フリッシュ、バンクラフトなどが内野を固めて鐵桶の守備を爲すや

うになつた。其後四年間連勝の基礎は、このシーズンから固められたのである。この翌年ケリーと共に來朝したるステンゲルも外野の一人であつた。

ア・ア南リーグは、八月一日以後互に選手の取りやりをせぬ申合をなした。

◇　早慶明の鼎立

大正十一年　春のリーグ戰には明大が大に振つた。早慶と六戰して四勝し、斯界の覇權を掌握した觀がある。唯法政の小坂投手に牛耳られて二回敗れ、結局最後の決勝を完全に得ることが出來なかつたとは云へ、事實斯界のチャンピオンとなり早慶明の鼎立が完成された譯である。されど世間ではさう騒がなかつた、十二年秋を以て同チーム十三年間の宿志が成つたやうに書き立てた。リーグ戰の優勝打者は早大大下で四割の打撃率を得た。

四月にはインディヤナ大學が早大の招待で來り、五月にはカナディヤン・チームが來たが、共にさん〳〵の成績で引上げた。

三田稲門は一勝一敗となり、決勝戰で三田が勝つた。

全國中等學校野球大會の優勝旗は、再び和歌山中學の掌中に歸した。秋のリーグ戰は早大全勝し、明大の望みは成就しなかつた。

秋期三稲戰はまた〳〵三田の勝利となる。稲門の谷口投手逆モーションなる投法を發明し、盛んに三田勢を苦しめた。三田は之をボークなりと主張し、大分意見を新聞紙上に發表した人もあつたが、後にモリアリチー審判が來朝して、そのボークならざるを敎へたので、問題は總て解決された。

ハンター氏の率ゆる全米野球團が秋も遲くなつて來朝した。その年の世界選手權試合に出場したる選手を數名交へ、他に一流の選手も多かつたので、我が野球界を啓發する所頗る多かつた。このチームがたつた一回三田倶樂部に敗れたのは不覺であつた。投手はヤ軍の若手ホイトであつたが、肩を大事にして思ひ切つて投げぬ爲め本壘打さへ打たれた。東洋の一試合などどうでも構はぬ、彼の身體は一年何萬弗の働きをするのだ、つまらぬ意氣を出して勝たうともせぬのに不思議はない筈だ。されど兎に角この强敵を破つた小野投手は偉い人である。

秋のリーグ戰に於ける優勝打者は早大の田中で、五割二分五厘の高率を擧げた。

此秋立敎大學チーム新にリーグ戰に加盟した。

西暦一九二二年　紐育再びナ・リーグの覇權を握る。この年の世界選手權試合に於て、巨人軍はより強いと云はれたヤンキースを破つた。（マグロー將軍の苦心談は後章物語としての野球中に掲載）

米國大審院では、野球事業を以て普通の商法で律すべからず、即ちシャーマン・ロー以外のものである事を判決した。

事の起りは先年米國の野球界を震駭せしめて彗星の如く消えたフィデラル・リーグ所屬のバルチモーア倶樂部が『同倶樂部の破滅は、ナ・ア兩リーグが大トラストを形成した結果である。これ正しくシャーマン氏の非トラスト法に反する行爲である』との訴訟を提起した。訴訟は控訴院から大審院に至り、遂に前記の如き結論を見たのである。何故商業でないかと云へば野球事業なるものは一つ所に永住して商賣するものではなく、各州に渉つて同趣味の人々を喜ばせつゝ旅行を續ける事、丁度巡回學術講演の如きものである。學術講演をシャーマン・ローで縛り得ざる限りは、野球もまた束縛し得ないと云ふにある。一寸詭辯のやうだが振つた捌き方である。

◇　明大の覇業

大正十二年　春のリーグ戰は早大の天下であつた、明大は決勝戰で早大に敗れ、慶に二戰二勝した。

打擊の第一人者は早大の山崎で、四割七分一厘を擧げた。

春は其年六月大阪で行はれたる第六回極東大會出場の野球選手を豫選すべきであつたが、體協の煮え切らざる態度の爲め早明は出場を拒絶し、獨り全慶應チームが買つて出たが、比島チームの爲め脆くも敗れて我が國民を失望させた。

三田稻門戰はまた〳〵前者の勝利に歸した。

全國中等學校野球大會では、甲陽中學が最後に和歌山と戰つて優勝した。

秋は未曾有の震災によつて關東地方はすつかり攪亂されたが、若き人々の間に固き根を下したスポーツは犯されなかつた。

明大チームは宿志十三年の思ひを遂げて、立派に早慶を破り、他のチームにも全勝して斯界の覇權を掌握した。この結果明大は早慶握手に關して大に努力する所あつた、三田稍や動き、復活の機近きにあるを思はせた。大震後と雖フワンは變らず澤山であつた。

秋の最優打者は早大の主將有田であつた（打率四割三分五厘）

秋の三田稻門戰は大震後とて一回休んだ。

西暦一九二三年　紐育三度ナ・リーグのペナントを得、世界選手權試合では、ヤ軍が三回目で勝つた。

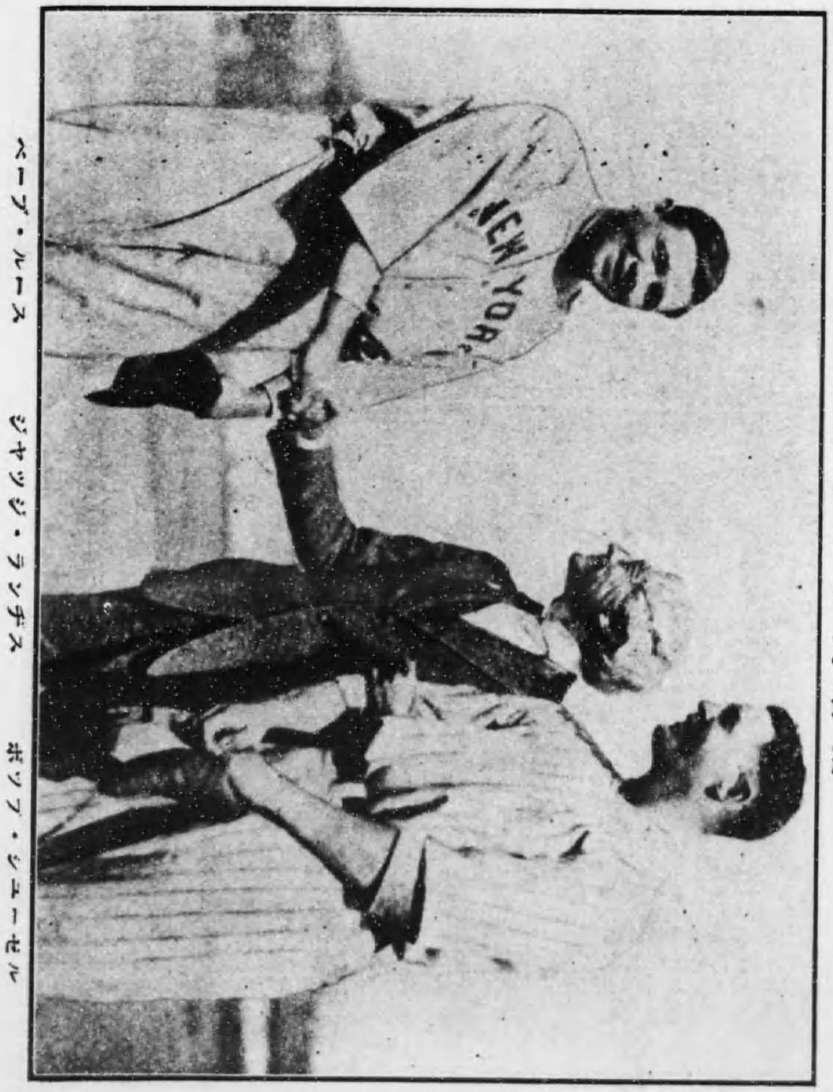
八月三日は米國大統領ハーデング氏の死によりて全部試合は休止された。越えて十日はその葬儀の爲め同樣の結果を見た。

故ハーディング氏は若い時野球の業に關與した人で、大統領となつてからも、非常な好意をその方面に注がれてゐた。

早慶明鼎立時代

大正十三年　春は明大の渡米によりてリーグ戰は淋しかつた。早慶共に四勝一敗し、その一敗は何れも立教の奮鬪が得たる賜であつた。

慶應の濱崎が五割で最優打者となつた。明大の渡米に先立ちて大毎チームが東上し、慶應以外



米國球界の三大名人

ベーブ・ルース　ジャッジ・ランディス　ポップ・シエーセル

の各大學チームを撫斬りにして行つたのは物凄かつた。

三稲戰は稲門方二回連勝し、漸く强弱の位置が轉換するかの如く見えた。

全國中等學校野球大會は廣島商業優勝チームとなる。

秋のリーグ戰は明大振はず、早大全勝して覇權を奪還した。早大には左手投手大橋の擡頭が力となり、明大には湯淺、谷澤などの健康が勝れなかつた。

三稲戰はまた〳〵稲門の二連勝で呆氣なく濟んだ、三田の御大小野投漸く振はず、全體としても元氣がなかつた。

四割七分八厘の高率で明大の梅田がリーディング・バッターとなる。

明治神宮競技開始され、倶樂部では稲門、中學では早稲田實業が優勝した。

西暦一九二四年 ナ・リーグでは巨人軍從來の記錄を破つて四回連勝し、世界選手權試合では新進の華盛頓軍に負けた。同軍の投手ウォルター・ジョンソン、若き監督バッキー・ハリス二者の評判は大したものであつた。

ジャッジ・ランジス氏は、巨人軍の選手ドウラン、オーコンネルの二人が、費府の遊擊サンドに

五百弗を贈賄して試合を賣れと誘惑せる事件に關して、二者を長へにオフィシアルの野球界から放逐した。

物語としての野球

マグロー將軍の監督術

◇　舞臺が大きければ苦勞も大きい

最近六年振りで歸朝したる、武士道の著者新渡戸稻造博士が、『嘗て野球は巾着切りのやうなゲームだ』と喝破された事がある。成程『壘を盜む』『敵の信號を看破る』『打者の弱點につけ込む』『投手が打者を愚にする』など云ふ不穩な文字が使はれるので、全く素人が文字の上から野球を見ると、これ程怪しからぬ競技は無いかも知れない。されど博士が唱道される武士道の宣傳者『武士』なる階級が、その昔殆んど獻身的の練磨を積みたる劍道にありても、面を打つと見せて小手を斬り、又は咽を襲ふことがある、又氣合の術で敵を面喰はすこともないではない。凡そ技を競ふものゝ中で、かうした傾向のないものは一として無い位である。其所に所謂策戰の妙味が窺はれ、競技心理から滲透される玄妙の理が湧くものである。碁に云ふ所の『右を打つ時は左に手ありと知るべし』と云ふのも、やはり一種の策戰であつて、これが複雜なゲームになればなる程多

枝多葉に渉つて興味を增すものである。

近來の野球は益す頭腦の競り合となつて來た。ベンチの監督から放送される信號によつて、九人の選手が一糸整然たる陣形を整へて行く所に面白味は際限なく擴かつて行く。米國の野球は云ふ迄もなく、我が六大學リーグにありても、早大の飛田君、明大の岡田君、慶應の三宅君、帝大の蘆田君、法政の稻垣君など何れも優れたラジオの放送者であつて、誰れにも知れぬ無言劇の指導に疑目をやつす一方、選手の薫陶に盡瘁しつゝある多忙な人々である。以下マグロー將軍の自著によりて如何に米國の監督が、苦心して選手を養成し、試合を運行しつゝあるかを窺はう。

次に『私』と云ふのは、マ將軍自身のことである。

〔一〕五十餘人の使者を派遣＝世界選手權試合前の策戰＝巨人軍の不評判がもつけの幸ひ＝何故本壘打王は振はなかつたか

私はこの發表をするに先立ち、五十餘人の使者を各方面に派遣して、あらゆる一流の野球家又は代表的のファン（野球見物の常連）を訪問せしめ『(一)野球競技に就いて、最も興味を感ずる點(二)競技に關して、殊に解答を求めんとする疑義』に就いて腹藏なき意向を聽き取り、それを基礎として、私の三十年間に得たる、波瀾重疊の實歷を編成するに至つたのである。この伴らざる告白が、野球家の期待し居るポイントに觸れ、且つ野球道向上の一助ともならば幸甚である。

最初手にしたるものは、ナショナル、アメリカン二大野球同盟の審判が發したる左の二疑問で、實の所、私の物語は此所に出發點を見出したのである。

一、巨人軍は如何にして一九二二年の世界選手權試合に勝ちたるかを語れ。

二、その大試合に於て、貴下（マグロー）は部下の選手に命じて、敵投手の第一球を、決して打たしめなかつたのを數度認めたが、深き理由ありての策戰なるか。

第一の疑問を一言にして盡せば、私は初めから、勝利を疑はなかつたから勝つたのであると、御答するより外はない。幸か不幸か、戰前流布されたる世間一般の評判は、頗る巨人軍に不利であつて、敵のヤンキース軍自身ですら、戰はざるに、早くも必勝を期してゐる樣に見受けられた。私は例年の如く、ナショナル・リーグの覇權を握つてから、更に世界選手權試合の檜舞臺に登る前日迄は努めて選手一同と會見するを避けて、虛心坦懷の日を送るべく腐心した。其間各新聞紙の運動欄では、種々の觀察やら、豫想やらが發表されたが、何れもヤ軍の必勝を想像する者のみ

で、曰く

『巨人軍の投手團は、ヤ軍のそれに比して頗る見劣りがされる』

『これに對するルースやミューゼルの健棒は、どれ程迄無慈悲の打撃を與へるであらうか』

曰く何、曰く何、形勢は腹立たしい程、巨人軍に背を向けてゐる。紐育ウォール街の相場は、ヤ軍七、巨人軍三の比例で、莫大の金が睹けられたさうである。私はこれに就いて一言隻語をも選手と交へなかつた、私にとりて世評は何等の影響を及ぼさない、巨人軍の不評は、却つて上乘の首尾で、敵を油斷させるに、これ程結構な象戰はない、實に願つたり叶つたりと云ひ度い位であつた。

愈よ試合が開始される前一日、私はショックリ彼等選手の集會してゐる所を訪問して、多少戰法に關する打合はせをした。その要點は恁うである。

『私は巨人軍が屹度勝つ事を信じて疑はない、何故ならば諸君はヤ軍の選手よりも優れて強いからだ』

私はこれを冒頭として更に續けた。

米國野球界の二大監督

向つて左巨人軍監督マグロー

向つて右紐育ヤンキース監督ハッキンス

『諸君に一つ注意し度いのは、明日の試合は、世界選手權試合でなくて、平生のものと少しも違はぬと云ふ信念を持たねばならぬ事だ。從つて諸君は、從來ナショナル・リーグの覇權を得るが爲めに戰つて來た通りの心持でベストを盡せば、それで十分なのである。又最近廿回許りの試合に於て、私は多く投手を代へて戰つた爲め、新聞記者の間にすら、我が投手團がヤ軍のものよりも劣るかのやうに觀察する者が尠なくない。甚だ佳しい、彼等迄私共の思ふ壺に嵌つたと云ふものだ』

個樣に選手に必勝の自信を吹き込んだ後、私は下の如く結んで、サッサと引上げて了つた。

『重ねて云ふが、諸君は日常の試合と、少しも違はぬ心持ちで戰つて呉れ給へ、私もまたいつもの通り諸君と一緒に戰はう、さうして負ければ、全責任は私が一人で背負つて立つ迄の事だ』

これが晴れの大試合前に行はれたる打合はせの全部である。或る選手は餘りの單純さに、物足らぬ感を抱いた事であらう、恐らく彼等の期待した要點は

『如何にして打擊王ベーブ・ルースを俎上のものとなして料理すべきか』

『シャングやベーカーの猛打は、どうして封じたものか』に連關したもので

斯界の大元老マグローは、尠なくとも日常の蘊蓄を傾倒して、敵打者の弱點を論評し、同時に敵の投手、ブッシュやホイトの缺陷をも指摘して、突擊すべき針路を敎示して呉れるものと信じてゐたらしい。世間で鬼神の如く言ひ傳へるルースの健棒は恐ろしくないのか、鐵砲玉のブッシュと綽名を受けた彼の速球は目に見えぬのか、餘りと云へば私の注意は、無雜作で、或る意味に於て選手の期待に乖馳したものであつたかも知れない。

何故私はアレ程評判の高い打擊王ルースを眼中に置かなかつたと云ふに、私は職掌柄として、ルースの有する長所も短所も、悉く知り拔いてゐたからである。

從來の野球界に於て、恐らくルース程、遠くへ球を飛ばし得る選手は一人もなかつたであらう。併し惜しむらくは、彼の打擊には、確實性が缺乏してゐる。時としては一擊の下に、榮ある勝利を得る花々しさもあるが、さりとてその弱點を覗はれると、全く別人の如き無力のものとなつて了ふのが彼の有する特徵である。私はその弱點を確實に握つてゐた、だから彼に對して些少の脅威をも感じてゐなかつた。

一九二二年の世界選手權試合に於て、ルースに對する投球の信號は、悉く私が傳へる事とした。實を云へばルースの場合のみならず、あらゆる打者に投ずる球種の選び方は、一々私の信號によりて決せられたので『負けたら一人で責任を引受ける』と云つた理由は、嚴として此所に存するのである。

要するに選手は、一種の技術者である。彼等はそれ〴〵の受持ち區分を完全に引受けるが、全體としての出來具合、勝敗に關する責任などは、成るべく避けんとする傾向を示すものである。故に一々私から投球指號の出る事は、責任の歸着上頗る氣樂なので、彼等は喜んでこの方法に從つてゐたのである。

私は一九二二年の大試合に於て、ルースには九個のカーヴと三つの速い直球を與へた外、他は悉く緩球のみを送らせた。カーヴは走者が壘にゐる時に限りて適度に利用したもので、結局彼は四回の試合に二個の安打を飛ばしたのみ、全然世の期待を裏切つたのは、恐らくスロー・ボールの策戰が、彼の弱點に喰ひ込んだからであらう。

〔二〕ヤ軍を破りたる新戰法＝左手投手ブッシュに背負投げを喰はす＝本壘打を飛ばした選手に廿五弗の罰金

一九二二年の野球期が終りに近づいた頃、私はフト新らしい戰法を發明した。それは從來の戰法として、第一、第二の兩壘に走者がある時ヒットが出ると、第二壘の走者は一擧本壘に突入し、第一壘の走者は第三壘へ、而して打者は第一壘を驅け拔けて第二壘迄猛進するのが定石の如く心得られてゐた。又之に對する守備としては、十中の八九迄、第一に先に立つ走者を刺さんとして、外野手は本壘に向つて投球する。されどそれが間に合はずと見れば、投手は捕手の前に立ちてその球を横取り、他の壘にて刺せさうな走者を捕へんとするのが、先づ典型的な策戰としてある。

吾人の案出した新策戰は、この形式を少々變更したもので、如上の場合が起つた時、外野手は球を必ず遊擊バンクラフトの所へ投げ、彼はそれを二壘へ輕投して、一壘から型の如く長驅して來る、得意滿々たる走者を刺すのである。この新法は、一寸考へると何でもないが、從來の型に欺つて、殆んど器械的に活動するチームには、奏功の能率が頗る多いのである。現に一九二二年の大試合に於て、ヤ軍の最も經驗に富んだ走者が、引續いてこの係蹄に引かゝつて、大切な機會を失つたのは、惰力の然らしむる所とは云へ、一寸した新工夫も、時に大なる結果となつて現はれる事を證明したものである。

それはヤ軍との最後の一戰であつた。ボツブ・ミューゼルは美事な安打を外野へ飛ばして、折から第二壘にゐた走者を本壘へ送り、自分も型の如く第二壘に殺到したが、まんまとこの新戰法に引かゝつて、遊擊バンクラフトから、二壘フリッシュへ送つた球によりて壘前で刺された。

最後の一回が來た時、敵の老將ワレー・シャングが、丁度ミューゼルと同樣、新戰法の犧牲となり、あたら好機を逸したのは大きな損害であつた。既に前回に於て戰友の慣死を目擊してゐる事だから、眞逆に古强者のシャング迄も、同樣な陷穽に落込まうとは、恐らく誰も信じなかつた所であらう。私共も餘り意外の收獲に迂頂天になつた位である。野球家の習慣をうまく呑み込んで、その裏を行くと、往々にして個樣な利益を得る事がないでもない。

（註曰）　マ將軍はこの有名なる事實に關して多少の思ひ違ひをしてゐる。この事件の起つたのは最後の試合でなくて、第四回戰、ヤ軍が四對三で敗れた時である、又最初の犧牲者はミューゼルでなくてビップである事も、序だから此際彼の爲め寃罪を雪いで置き度い。今米國スポーチング會社から出版する公認野球ガイドにより て、以上の場面を惹起したる壯快なる一幕を摘記する。

第一回―ヤ軍の第一打者ウイット二壘越の安打を放ち、デュガンまた右翼に安打し、次いで本壘打王ルースをボックスに迎へた。滿身の力を籠めて猛打したる彼の球は遙かに中堅の空を縫ふて飛び、アハヤ三壘打となる

らんとしたが、壯漢カニングハムは死力を出して、球を追ひ、辛ふじて掌中に入れた時、彼の身體はもんどり打つて球場に轉がつてゐた。而も彼は直ぐ姿勢を立直して、ライットに本壘を窺ふ機を與へなかつた。此時出たのが問題のピッフで、彼は中堅右翼間に快打し、球は當然本壘若しくは三壘へ投げられると信じて長驅第二壘を衝かんとしたのである。此時早くも、球はバンクラフトの掌中にあり、ピッフは二壘の露と消えたのである。

第九回―ヤ軍のピッフ一壘の頭上を拔く二壘打で出でミューゼルがグローに打つた球によりて二、三壘間に刺さる。續くシャング中堅へ安打し、ミューゼル一擧に三壘を襲つた。此時シャングはカニングハムからの球は當然ミューゼルに向つてプレイされるものと思つたので、第一壘を走り拔け第二壘に向つたが、いつしか、球はバンクラフトによりて遮ぎられ、シャングは前回のピッフと同樣の運命に陷いつたのである。

◇

一九二二年の世界選手權第一回戰に於て、敵投手ブッシュは、必ず制球力を欠くに相違ない、と見て取つた私は『第一球を打たずして待て』と云ふ命令を選手に下した。然るにブッシュの投球は、全く私の豫期を裏切つて、立派な制球力を示したので、試合の後半に於て、私は前の命令を取消し、機を見て打ち捲くるべき旨を傳へた。嚮に提出せられたる第二の疑問は、當日のフワンが、正しく這般の消息を不審に思はれた證據であつて、偶巨人軍の打ち出したのが、第九回に起つた丈け、私の取つた策戰を、甚だ齒痒ゆいものゝ如く觀察された方も多かつたであらう。

（註曰）實際に於てブッシュは『必ず巨人軍は第一球を打たぬ』ものと安心し切つて投球を續けたものらしく、九回バンクラフトが第一球を右翼に安打し、次のグローがまた第一球を同所へ安打し、續くフリッシュも三度第一球を左翼にするに及んで初めて目が覺めたやうであつたが、この三安打後に、又々ミューゼルの投手頭上を高いバウンドで拔くヒットがあつた爲め、二者一時に生還して二對二のタイとなり、遂にプレイトを少年投手のホイトに讓らねばならなかつた。ホイトは後にケリーとステンゲルを三振で打取つたが、其前の打者ヤングに犧牲飛球を中堅深くへ打込まれて一點を加へ、遂に三對二の際どい所で、第一回戰は巨人軍の勝利に歸したので、全くブッシュは、安心し切つた勝相撲を、土俵際で打棄られたやうなものであつた。

◇

監督と選手との關係は、丁度將校と兵士との如きものであつて、將校のみで戰爭に勝てぬと同樣に、監督許りいくら焦つても選手が手足の如く命令に從つて呉れねば駄目である。而して戰爭に敗れるのは、多く兵士の責任にあらずして、指揮の適宜を失つたのが、原因の大部分を爲すやうに、野球監督も、結果の不良のみを見て、選手を責むるが如き事は絶對的に禁物としてある。例へばピンチ・ヒッターを送る時でも、いつも彼は打てると極つたものでないから、假令三振に

終るとも決して厭な顔は見せない。又ノック・アウトされた投手に代る人を出す時、引續いて其人が亂打されても、神でない限り、選手に出來、不出來があるから、決して非難する譯には行かぬのである。唯最も嚴重に取締らねばならぬのは、命令に從はぬ選手のある場合で、かゝる者に對しては、可なり思ひ切つた制裁を加へて、他の者の見せしめにしなければならない。

話は一九〇五年の昔にかへるが、私は本壘打を飛ばして一時に三點を取り、立派な勝因を作つた選手に、廿五弗の罰金を課した事がある。

それは巨人軍が一、二兩壘に走者を出し、ノー・ダウンの場合であるので、私は打者サミー・ストラングに、必ずバントすべき旨を傳へた。然るに豫想外にも、彼れストラングは、憂然たる快音をバットに響かせて、球を右翼の柵外に飛ばし、光榮ある本壘打者としての歡呼を浴びつゝ、得意の鼻をうごめかしてベンチに引上げて來た。

私は彼がベンチに腰を下した時、苦い顔をしながら、

『君は廿五弗の罰金を拂はねばならないぜ』

と云つたので、彼は意外な事を聞くものかなと云つた調子で恁う問ひかへした。

『廿五弗の罰金？何です　それは』

『私は君にバントをしろと命じた筈だが聞えなかつたのかね』

『確かに、聞いた事は聞いたのですが、監督、餘り美事な打ち易い球が來たので打たずにはゐられませんでした、併し立派なホームランでしたらう、如何ですか』

『さうだ。素破らしい手柄だ、だけれど君は私の命令に從はなかつた罰として廿五弗拂はねばならないのだ。若しアノ時間違つて、ダブル・プレイでも喰つたらどうするつもりだ』

『承知しました。だが私は可なり價値のある仕事をしたと思つてゐますが……』

個樣な會話が殘されて、とう〳〵サミーは本壘打を飛ばした許りに金廿五弗を月の給料から差引かれて了つた。多く集まつた疑問の中に『個人的の妙技を推奬するや、將又全體としての共同策戰を重んずるや』と云ふ事を見たが、この事實は、如上の疑問に對する、最も適切なる御答であると信じて疑はない。

〔三〕學校生活の眞價＝フワンの心理＝野球通の嘘＝人知れぬ苦心

マグロー將軍の監督術

『大學出身の選手と、さうした經歷を有せざる選手との間には、特殊の相違點を見出し得るや否』

嘗て私の一知人が、以上の如き疑問を私に提出した事がある。この問題に關する意見は、常に一度は發表して見度いと思つてゐた所なので、今回も同樣の疑問を受けたるに依つて、この機會を利用して、一石二鳥的に双方の方々に私見を聞いて頂かう。一言にして盡せば私は『大學出身に限る』と云ひ度い。勿論大學出と雖、初めて大リーグに見習ひとして加入した時は、學校生活のない人と同樣、左顧右丐の體で、甚だ落着かぬやうに見へるが、彼等の特徴は、學窓によりて得たる精神上の鍛錬を土臺として、歩一歩、正確なる道を踏みしめて行く點に存する。其他あらゆる方面から獲得せる常識の發達は、忽ちにして市井から來た選手を、二ヶ年位背後に殘して突進するのである。

併し教育の有無から產み出される結果の差別は甚だ簡單である。私の經驗によれば、學校出の選手は、自己の陷いりたる失敗を明らかに自認して、虛心怛懷に、之を匡正せんと努力する。之に反して市井からの人は、見す〳〵失行を認めながらも、之を隱蔽せんとする傾向がある。之が後者の進路を阻害する所以であつて、忽ち二年間の徑庭を生ずるに至る理由は、頗る簡單にして而もその根ざす所は、なか〳〵深遠である。

私が努めて大學出の選手を集めんとし、又實際に於ても、これ等の人々が巨人軍の重鎭となつてゐる理由も大概は盡きてゐるが、さりとて從來大選手中の大選手と謳歌された人々、必ずしも大學出身の人許りではなかつた。即ちワグナー。スピーカー。ラヂョー。デレハンティーの如きは、その代表的人物で、其他ヒュー・ヂエニングスの如き、又甚だ潛越ながら、かく云ふ私自身とても、花やかなる學校生活を味ひ得ざりし一人であつた。

以上の人々は何れも優秀なる頭腦の持主であつて、總ての點から見ても、學校生活をした人々が、特權的に有する要素と、少しも違はないものを確かりと抱いてゐたのである。

『過失を隱蔽せずに明らかに、名乘つて匡正する精神』これは云ひ易くして、なか〳〵實行し難きものである。

◆

フワンの心理は、唯最負のチームが勝てば、それで佳いのである。監督の取りつゝある善惡邪

正も、そのチームが勝ち續けてゐる間は、光明面のみが讃美せられて、可なり大きな錯誤があつても問題にならぬものである。

『どつちが勝つても構はない、要するに面白い試合が見度いものだ』

少し通になると、誰れでも這麼ことを云ひ度がるものであるが、これは眞赤な嘘で、やはり最負が勝たなければ『所謂面白い試合』にはならぬのである。私は或時ウルツ・ハツバー。ルイス・マンなど云ふ一流の代表的フワンと食事を共にした後

『ハツバーさん、貴君の理想に適つた佳い試合と云ふのは、どんな種類のものですか』と聞いた事がある。

『私が本當に理想的の好試合で、而も面白い午後を暮し得たと思ふのは』

と、ハツバー君は、一寸考えたが、直ぐ次の如く續けた。

『さうです、最負のチームが第一回に十五點程取つて了つて、其上望むらくは、敵が一人も壘に出ない事ですな』

之を聞いてゐたマン氏も負けぬ氣になつて

『結構、その通りですな。併し敵に無死滿壘の好機を與へて置いて、次に出て來るバッターを、悉く三度振りさせるなども、ゾク〳〵させて好いものですね』

と、一寸玄人のやうな事を云ふと、ハツバー君は兩手を擧げて之を制しながら

『それはいけないよ君、さうなると面白いのでなくて、僕には苦痛だ。無死滿壘！思つてもゾツとする光景だ』

若い役者（ハツバーさんは人氣者の役者である）は恁う云ひながら、宛がらその緊張せる場面が、眼前に展開されてゐるかの如く、身をぶる〳〵と慄はせた。

私は必ずしもハツバーさんを見當違ひのフワンとは云はない。百人の中九十九人迄は、競技の結果にのみ留意して、其間に千差萬別の策戰が、チームの間に渦卷いてゐるのに、氣の附く人は甚だ尠い事を云ひ度いのである。

前記一九二二年の大試合に於て、吾人がヤ軍の二大選手を第二壘で、二度迄もアウトにした場合、この危急の際、巨人軍の戰士が、一糸亂れざる態度の下に、行ひたる行動の内容を觀測し得た人は、極めて少數であつたと思ふ。

〔四〕　個人とチームとの關係＝さう思ひました組の選手＝世界選手權を失ひたるスナッドグラスの大失策

野球監督と云ふ職務は、一方にハッバーさんの如きフワンを相手にしながら、他方に於ては複雜極まる所謂『インサイド・プレイ』の研究に沒頭しなければならぬ程多角的なものである。この研究を具體化する上に於て、最も必要なのは、自己を空ふする協力一致の精神で、私が大學出身の選手を歡迎する理由は、此所に存するのである。

例へば選手のプレイ振りに對して、私が訓戒を與へる事がある。此時市井からの選手は、殆んど言ひ合はせたかの如く『私もさう思ひました……』と云ふ返事をする。故に私は彼等を『さう思ひました組』と命名してゐる。之に反して大學出身の選手になると、さも滿足氣に私の忠告を受け入れる。それ許りで飽き足らずして、彼等は時として進んで自分の踏んだ競技上の失敗を提出して、それに對する忌憚なき批評を私の頭腦から絞り取つて行く。彼等の有する研究的態度が、かくして續けば續く程、野球學に對する智識は豐富になり、いつしかチームに重要なる位置を築き上げるやうになるのである。

大學出身の好模範として、エデー・グラントを紹介し度い。彼はハーヴァード大學を卒業して、直に費府ナショナルの選手になつた男で、當時巨人軍のマシューソンは、投手界の第一人者として、飛鳥をも落す勢であつたから、心密かに大マチーに對峙する機會を待つてゐた。いよ／＼その日が來て彼は不世出の大投手に面して見ると、どう云ふ拍子が最初易々と安打を飛ばす事が出來た。さうして引續いてボックスに四回立つたが、打つ球は悉く安打となつて、五回安打連續の好成績を擧げ得たのである。

『お前は誰れの球を打つたと思ふ、アレは有名な大マチーだぜ』

ビリー・ムレイはこの若者の肩を輕く叩きながら、態と這那ことを云つて、この驚くべき結果を賞讃した。

『ハイ存じてゐますとも』

グラントは眞面目になつて答へた、さうして

『だけれど　恐らくマシューソンは、私などを眼中に置かなかつたでしやう』

と、謙遜した態度で附加へた。

『イヤそんな事はないよ』

ムレイは頭から打消して、更にマチーが什麼種類の球をグラントに投げたかを聞いた。

『丁度腰の高さで、内角に曲り込むカーヴでした』

グラントは有體に答へた。ムレイは稍や安打連發の謎を解したかの如く

『さうか、それで判つた。マチーはこの後一つ球許り投げまいから、いろ〳〵の球が打てるやうな練習をして置き給へ』

と、彼は意味あり氣の一語を殘して、其場を立去つた。

利巧なグラントはムレイの言葉をよく含味して、一生懸命にバッティングの稽古を勵んだ。彼は大マチーの球を亂打したる一事を以て、直に天狗になるやうな馬鹿者ではなかつたのである。彼は其後次のやうな述懷談を私に物語つた。

『マーいゝ經驗を得ましたよ、其後マシューソンは、最初私に投げた球を一度も呉れませんでした。それが爲め、二十回程アノ人の前に立ちましたが、一本のヒットを出す事が出來なかつたのです』

◇

フレッド・スナッドグラスもやはり大學出身の一人であつた。アノ人は、嘗て加州のバークレー大學チームにあつて盛んに活躍してゐたのを、私が見附け出して迎へたのである。大學にゐる頃は捕手であつたが、身體が稍や小さいので、私は外野手の位置を彼に與へた。

所が不幸にも彼は、ボストンと對抗した世界選手權試合に、樂過ぎる程のフライを意外にも落して、それが爲め巨人軍は勝つべき試合に負けたのであつた。併し失策は誰もする事である、人間が神でない以上、危機の場合に臨んで、心の動搖を感じない者が、一人として存在するであらうか。スナッドグラスは誰も經驗しなければならぬ、悲しむべき失策をしたのである、野球家が最も忌む所の、ヘマな試合をしたのでは決してない。私は恁う云ふ見地から、彼の失策に對しては、唯一言の叱責をも加へざるのみならず、其シーズンの終りには、翌年度の給料を千弗增加してやつた。彼は實に恐縮して頭が上らなかつた、チーム全體のエラーを、一身に引受けたかの如く、長い間見せた憂鬱の姿は、實に痛々しい位であつた。個樣な場合に、監督の取るべき道は、大に考へねばならぬもので、やり方によりては、その人の一生を滅茶にしないとも限らない。

當時の新聞紙は悉くこの事件を書き立てた、さうして『マグローは必ずスナッドグラスを追放するだらう』など丶過激の文字を弄する記者もあつたが、私はスナッドグラスの感情を少しでも傷けるやうな記事があると、直ぐその新聞紙を燒き捨て丶、成るべく他の人々に見せぬ樣に努力した。

〔五〕　マークルの粗忽＝大學出の三大選手＝酒豪投手バック・レイモンド＝彼に關する珍裁判の實歴談

スナッドグラスと殆んど同樣な大失策が、巨人軍の一壘手フレッド・マークルによりて演ぜられたのも、可なり有名なる事實である。『彼は當然踏むべかりし二壘に觸れずして、競技場を去つた許りに、折角勝つた試合を無効にし、結局巨人軍は、世界選手權試合に出場の資格を失ふに至つたのである。

（註日）　この試合は巨人軍對市俄古の間に行はれたるナショナル・リーグの爭覇戰で、この試合に勝つたものが、アメリカン・リーグの代表チームを迎へて、世界選手權試合を爭ひ得べき資格を有する事となるので、兩者は必死の勢ひで勝敗を爭つたのである。

時は一九〇八年九月廿三日、マークルの粗忽によつてこの試合は引分けとなつたので、此日はマークル・デイとして今尙記憶されてゐる。此時兩軍は九回で同點となり、市軍先づ攻擊を終つて、巨人軍代り攻めたが、忽ちにして二アウトとなつた。この刹那マークルはピンチ・ヒッターとしてボックスに送られたが、火の出るやうな猛球を安打して、一壘にゐた戰友マクコーシックを三壘に送り、自分は悠々と一壘を占めた。次のアル・ブリッドウエルは、又々中堅へ安打を飛ばしたので、マクコーミックは生還し、それで試合は完全に終了した形ちであつた。マークルは其頃の例に倣つて、一壘から直ぐ倶樂部ハウスへ驅け込んで、頗る上機嫌で水を使ひ、大に得意滿面の體であつたが、焉んぞ知らん、其時敵のチンカーとエバースとはその球を群集の間から見附け出して、これを二壘に觸れ、マータルが二壘を踏まずして引上げたのだから當然フォース・アウトが成立すると主張したのであつた。所がブリッドウエルの安打と共に、フワンは場内に亂入したので、試合も終了と見て取つたものか、主審ハンク・オデイは早くもグラウンドを立去つて、このプレイに對する裁斷を下すものはない。市軍の選手は直ぐ場外に走り出て、オデイを追跡し、漸くクーガン・ブラックの邊で追ひ付いたので、この事情を具陳した所、オデイは異議なくマークルのアウトを認めて『試合は引分け』を宣告したのである。巨人軍はかくて十月八日決勝戰を行ふ事となり、四對二で遂に巨人軍の敗北に歸したのである）

此時でも私は何等の不平をマークルに浴せなかつたのみならず、實際を白狀すると、スナッドグラスと同樣、翌年の給料を增したのであつた。之は必ずしも失策をしたから、增給したのでは

なく、丁度その時期に達してゐたので、功名と失策の如何に拘はらず、之を斷行したに過ぎない。

實際に於て彼等は選手として申分ない男達であつた。監督の命令をよく守り、少しも我執に捉はれる所がなく、チーム全體に非常に好い感じを抱かせてゐた。換言すれば、私の野球器械を運轉させるには、どうしても無くてならぬ技師であつたのである。

嚮に本壘打を飛ばして試合に勝つて呉れたサミーに廿五弗の罰金を課し、一方では光榮ある世界の選手權を、吾人から拐り取つたスナッドグラスやマークルを咎めない許りか、增給さへも行つてゐる。一見私のした行爲は、甚だ矛盾に富んでゐるやうであるが、從來の主張を含味された讀者は、這般の消息を篤と御了解下された事と信じて疑はない。

以上列記した三選手は、大學選手として、殆んど理想に近い球界の偉人である。

◇

非大學出身組の代表としては、一時巨人軍で鳴らしたベニー・カウフの事を傳へ度い。彼は稀に見る技倆の優秀者で、私も尠からず彼を愛撫したのであるが、惜しむらくは「さう思ひました組」の選手で、何處かに修養上の缺陷が現はれてゐた。彼は徒らにチームのスターたらんとして人並優れた修業を積んだ。併し殘念な事には、眞のスターは、先づチームがその大を認め、且つ尊敬の念を拂ふべき選手でなければならぬ事に氣が附かなかつた。

之と反對にジョージ・バーンスは、世間で大した評判を受けなかつたが、非大學出身者の間にありては、一段と光輝ある人格を示してゐた。されば云ふ迄もなく、チーム全體から、多大の敬意を受けてゐたのである。

カウフの如きは、俗に云ふ『フリーク・プレイヤー』の部に屬するもので、監督としては可なり取扱ひ難い代物である。併しそれ以上に困るのは酒癖のある選手で、而も優秀な手腕を持つたものなどしてゐると、更に捨て難い氣がして頭を惱ますものである。

巨人軍に籍を置いた選手の中に、「最も酒が好きで、とう〳〵それが爲め身を持ち崩した男にバッグス・レイモンドがある。彼の有するスピット・ボールは殆んど天下一品と云ふべきもので、調子がよい時には、如何なる强打者も小供のやうに取扱はれて了ふ。嘗て捕手のチーフ・メイヤーが初めて彼の球を捕つた後

『マック！あいつの球は素敵ですよ、あんな不思議のカーヴは見た事がありません』

と、驚異の眼を見張りながら、私に私語いた位の男であつた。されば當時の彼は、巨人軍の寵兒としてフワンから非常な贔負を受け、彼の隻腕によつて勝ち得た試合も頗る多かつたのである。然るに白玉の微瑾とでも云ふべきは、彼の酒癖で、何回となく匡正すべく努力したが、元來友人好きの彼の事であるから、行く先々で歡迎を受け、チヤホヤされた揚句、遂に飲んで了ふ場合も尠なくなかつた。最後に私は彼の惡癖を根絶せしむる爲めには、金を持たせぬに限ると思つて、一切金を貸して呉れぬやう、あらゆる方面へ哀願して見た。

その功果は幾分か現はれたと見えて、幾日か彼は眞面目の顔をグラウンドに見せてゐた。或る日の事、其日プレイトに立つた投手の出來が少し惡くなつたので、バックを交代させる爲め、豫め肩馴しをする命令を下した。其頃投手が肩馴らしをする場所は、見物席の後方に出來てゐたので、彼は新球を摑んで、吾人の眼の前から姿を消したものゝ、いつ迄經つてもベンチに歸つて來ない。其中交代すべき時機が來たので、小供を見せにやると、こは如何に、彼の姿は何處へか消えてゐるので大騒ぎとなり、八方へ人を派遣して捜索をした揚句、遂に或る酒場で、ユニフォームの儘、ビールの滿を引いてゐる所を取押へた。どうして金を得たのか聞いて見ると、肩馴らしに與へられた新球をビールに代へたとの事で、怒るにも怒られず、苦笑するより外はなかつた事もある。

◆

レイモンドは何回となく禁酒を誓ひながらも、いつしかその禁を破つて居るので、私は探偵に依頼して十分の證據を擧げた上、嘗て彼が禁酒宣誓の際立會つて呉れた新聞記者に集つて貰つて、裁判所の體裁で、彼を問責する事とした。七八人の記者は裁判官で、私は原告、レイモンドは被告、無論辯護士などは一人もゐない。私は先づ立つて陳述を開始した。

『紳士諸君！私が皆樣を、今日裁判官として臨席を願ひました理由は外でもありません。此所に控へてゐるバッグス・レイモンドは、嘗て皆樣の前で禁酒を誓ひましたので、皆樣はその健氣なる行を傳へる爲め、貴重な紙面を割いて、その健氣なる態度を賞めて下さいました。然るに彼は近頃その誓を破り、皆樣を愚にした許りでなく、友を賣り、私共を瞞着しつゝあるのです。皆樣は之に對して、如何なる非難攻擊を加へらるゝも、當人は一言の不平を云ふべきではありませ

ん。それとも寛大なる皆様は、もう一度御許し下さいまして、今後斷じて禁酒するならば新聞紙上に於ける糾彈を御延期下さるでせうか、忌憚なき御批評を仰ぎ度いのであります』

『嘘です、嘘です、何者ですか、そんな無根な事實をあなたに告げたのは……』

レイモンドは、私の陳述が終るか終らぬ裡に、恁う叫び出して、一切を葬り去らうとした。

併し其時私の手元には、探偵から送られた報告書が、チャーンと開かれてゐた。私は態と落着拂つてそれを讀み出した。

『十八時間に渉りてレイモンドに尾行の結果、左の如き事實を確かめたり。彼れレイモンドは、午前九時ターフ・エキスチエンヂと呼ばるゝ酒場へ行きて七杯のビールと、一握りのビスケットと、二個のバームダ葱を食し、其足にて彼れレイモンドは、ナイト酒場へ赴き、ビールを飲む事九杯、前より多量のビスケットと葱とを攝取せり、其他十二時間に渉りて、彼れレイモンドの飲みたるビールは、合計四十八杯の大盃にして、多量のビスケットと、約八個のバームダ葱とを含む』

レイモンドはその報告を聞き終ると共に、前と同樣、全部虚報であると否定したが、その態度は如何にも狼狽を極めてゐたので、裁判官の口には、一樣に隠し切れぬ微笑が洩れてゐた。

レイモンドは尙も無根を主張して、どうとかして此場を切り拔けやうとしてゐる。

『ビールは二三十杯飲まうと思へば、飲まぬ事はないが、近頃は決してグラスを口にあてなかつた、葱だつて、六個月前から一切れだつて食べた事はありやしない』

と頑張つて見たが、餘りのそら〳〵しさなので、裁判官は思はず、ドーッと失笑して了つた。

『宜しい、判りました』

やがて年長の記者は、かう云つて稍や興奮した彼を手で以て制し、さうして靜かに、云ひ聞かせるやうに語り出した。

『事實の調査は後日に讓る事として、私共は兎に角もう一度、君に改悛の機會を與へやう。從つて此度の事は、一行も新聞に書かぬやうにするが、尙引續いて報告書のやうな事件が起ると、其時こそ私共は、自由な立場に置いて貰はねばなりませんぞ』

これで裁判は一先づ終つた。而して其後のレイモンドはどうであつたかと云ふに、依然として隠れてはバーに通つたが、後にはそれが大ビラとなつて、毎夜のやうに入り浸つてゐたやうであつ

た。球を持たせては天下一品、カーヴの鋭い事、スピット・ボールの制體力に富む事は、何人の追隨をも許さぬ彼であつたが、惜しむらくはかうした飲酒癖の爲に、とう〳〵身體を壞してしまつた。

〔六〕　奇妙な契約書＝ワッデルの奇智マックを伴る＝三人で試合＝
　　矯慢を利用＝選手が消防夫

前記のバックス・レイモンドに次ぐ奇行家としては、ルーブ・ワッデル。ラリー・マックリーン。オッシー・シュレッケンゴスト。ウォルター・ブローチーなど云ふ連中がある。

この人々が殘した奇行の中で、今尙フワンが云ひ傳へてゐるのは、シュレック（シュレッケンゴストの約名）が嘗て監督コニー・マックと更めて選手となるべき契約を取結ぶ時『ワッデルは寢床の中に於てビスケットを食ふ事を得ず』と云ふ但書が無ければ、契約書に署名しないと主張した事である。事件の起りはかうである。

揃ひも揃つてこのワッデルとシュレックの二人の變り者は、一緒にコニー・マックの軍に來て、同時に見習選手となつたので、二人は同室で起臥する事となつた。ワッデルには妙な癖があつ

ア・リーグ總理ジョンソン

ア軍の名監督コニー・マック

奇行投手ワッデル

ウラブ手投名のスプツカ

て、床の中でボリ〳〵とビスケットを噛らなければ寢られない。そのビスケットも普通のものならば差支はないが、彼は象や獅子の姿を打貫いてゐるものを食ふので、シュレックは毎晩その喰はれた獸類にうなされて敵はない、と云ふのが、但し書を附けねばならぬ理由であつた。若しマックが契約書にその一句を挿入しないならば、殘念ながら他のチームへ行くより外はない、と彼は六尺豐かの巨漢に不相當の小供らしい要求をしたので、マックは噴き出しさうな笑を忍んで、遂に彼の要求を容れたとの事である。

◆

一方前記挿話の相棒であるワッデルと來ては、レイモンド以上の大酒家で、而も奇行に富む點に於て、古來彼と比肩する者はないであらう。

或る晩の事である。ワッデルは俄然としてコニー・マックの許にやつて來た。監督が親切に來意を尋ねると、實はリーグの爭覇戰で得たるダイヤモンド入りの時計飾りを何處かで落して了つた。自分に取つてはこれ程尊重すべきものはないので、何とかして再び手に入れ度いが、此際取るべき最善の法を敎へて貰ひ度い、と云つたやうな意味を、さも殊勝氣に物語つたのである。

監督は聞き終つて、太い溜息を洩したが、直ぐ名案が浮んだと見えて、頗る自信のある調子で恁う注意した。

『それは一刻も早く新聞社へ行つて、これを拾つて屆けて呉れた人には、相當の報酬を贈呈する意味の懸賞廣告を出して貰うに限る』

『報酬て……どの位出したらいゝものでせう、實は御存知の通り一文無しなので』

『さうな十弗も出せば澤山だ、出た時は私が拂つてやるから安心し給へ』

斯樣な會話を交換した後、ワッデルは力なげに頭を垂れながら新聞社を訪ふべく去つたのである。

翌日正午頃、ワッデルは豫て例の時計飾りを預けて置いた酒場を訪うて、直ぐ其所からマックの所へ電話をかけた。

『私の時計飾りを拾つた人が、この酒場に來て居るのですが、直ぐ來て御禮をして頂けないでせうか』

正直なマック監督は、素より佯はれ事とは知らないから、大急ぎで其所へ馳せつけて、金十弗を酒場にゐた同じ腹の若者に與へ、厚く禮を述べた後、共に其所を立出でたが、ワッデルは途中でうまく監督と別れた後、前の酒場に取つてかへし、十弗の金で盛んに大杯を擧げたさうである。

◆

奇行には富み過ぎる頃飄輕なワッデルを、一方投手の技倆を本位として見る時は、恐らく米國の野球界が稀に產みたる天才の一人と云ふべきもので、普通の人が玉突の玉を握る位に、野球の用球が小さく彼の掌中に埋められる程、大きな手の持主であつた。されば彼の繰出す球勢は、實に素破らしいもので、どんな強いチームでも、負かさうと思へば屹度負かして見せると豪語してゐたのは、決して根據の無い自慢ではなかつたのである。

毎年シーズンの開始前に行はるゝ春期練習の際、費府軍が土地のチームなどゝ餘興試合をする場合などには『こんなものを負かすには、捕手と一壘と二人だけ佗を手傳つて呉れゝば澤山だ』などゝ大風呂敷を擴げて、現に三人で相手をした事さへあつたさうである。

◆

私は嘗て彼の負けず嫌ひの氣性を利用して敗けるに決つた試合を勝つた事がある。その日の試

合に敵はワッデルを出す番となつてゐたのに拘はらず、巨人軍はどうしても微力なる第二投手を戰はすべき段取りとなつてゐたので、どうしてもこの試合は勝てさうに見えなかつた。どうせ負けると決つてゐるのだから一同も餘り緊張せずに呑氣な練習をしてゐる中、誰かの打つた球が、遙かの隅に建てられた倶樂部ハウス近くへ轉々としてころげて行つた。其時折よく例のワッデル先生が、倶樂部から偉大な姿を現はしたので、私は大聲を擧げて、球を投げ返して呉れるやうに頼んだ。所が何處迄も遊戯的氣分に充滿したる彼は『この腕を見よ』とでも思つたのか、球を拾ふや否、素破らしい馬力で、私共の方へ投げ返して呉れた。

『何だ、一寸も來ないぢやないか、球を投げると云ふのは恁うするのだ、見て置いて呉れ』

私は大きな聲で怒鳴りながら、彼の投げた球を、また力一杯に投げ返してやつた。彼は案の如く烈火の如く怒り出して何回となく球を投げかへし、私も負けない氣になつて對抗した、彼の球が飛ぶ毎に、選手は大聲をあげて冷かすものだから、漸次疲勞して球の速力が著しく鈍る頃まで、彼は無我夢中になつて投合ひを續けたのであつた。これが祟つたものか、イザ試合となると、彼の球力は、平常のものと非常な相違を來たし、五回を出でずして、遂に退却するの止むなきに至つた。試合を眼中に置かずして、唯目前癪に障る敵を屈伏せんとしたる彼は、全く私の術中に陷いつたもので、頗る感心しない點もあるが、ヘト〳〵になる迄續けた所に彼の本領は遺憾なく發揮されたのである。

◆

もう一つワッデルに關する奇談を書かう。それは彼の屬する費府軍が、テキサスで春期練習をした時である。巨人軍もまた附近のダラスに滯在してゐた。すると例のワッデルが、二三日倶樂部に姿を見せぬので、人々は八方を尋ねあぐんでゐると云ふ噂が洩れて來た。彼は非常な釣好きで、興に乘ると、幾日も續けて出かける位はまだよい方で、時としては正に彼の手腕に依頼すべき大切な試合をスッポかして、太公望をきめ込む事も珍らしくない、私共はまた例の癖が出たのであらうと想像してゐた。

その晩丁度近所に火事が起つたので、私共悉くホテルの前に立つて、勇ましい蒸氣ポンプの通行を見てゐると、どうだらう例のワッデル先生が嚴めしい鐵甲を冠り、長いゴム靴を穿き、スッカリ消防夫の制服に身を固めて、御者臺に治まりかへつてゐるではないか。私共は意外の發見に

驚かされて、一時は自分の目を疑ふ位であつた。併し一同がたしかに彼を見たと云ふので、其旨を直ぐマックの所へ知らせてやつた。監督は火事の終るのを待つて、消防署へ行き、この大きな悪戯者を引張つて歸つたので、やうやく翌日の試合に間に合ふ事が出來た。

◆

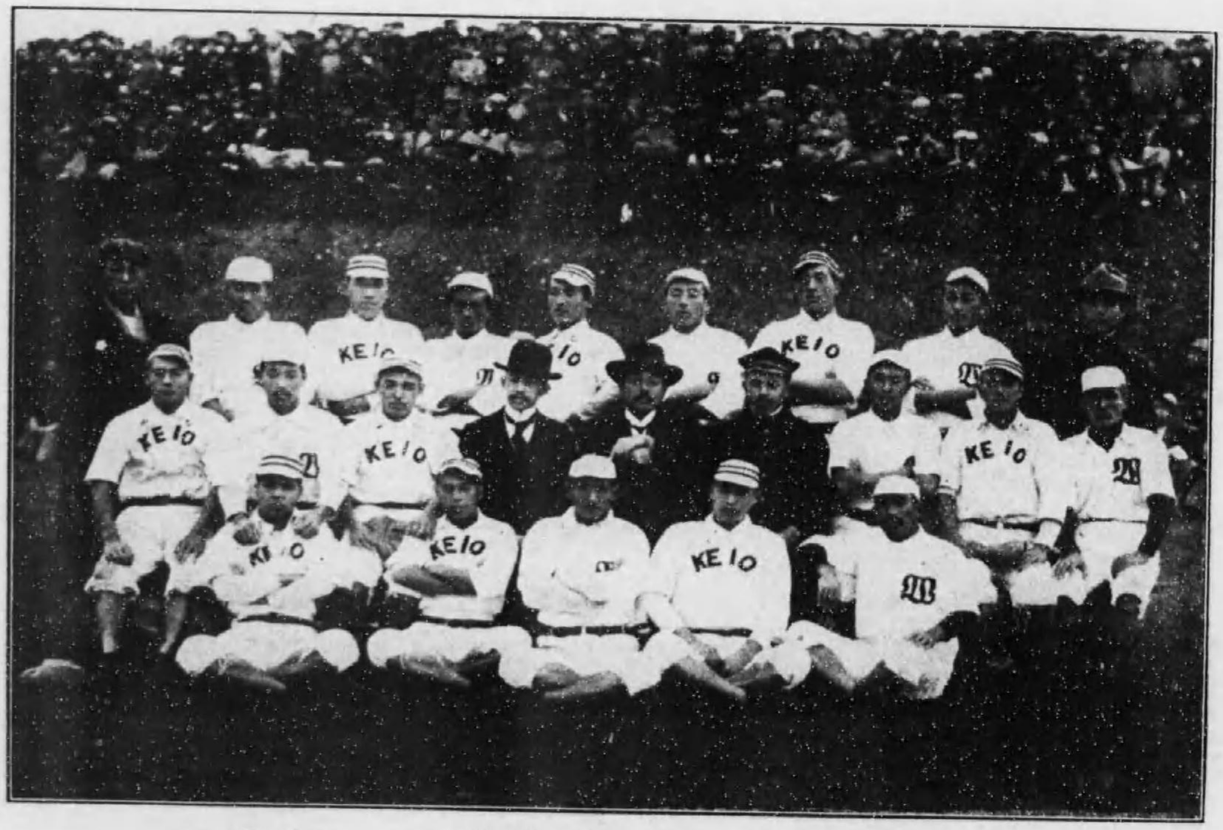
バルチモーア・リーグの選手の中にワルター・ブローチーと云ふ、これも一かどの取扱ひ難い選手が居た。倶樂部の監督は有名なハンロン君で、この人は『打撃はいつも焦つてはいけない、待ち過ぎると思ふ程待つて丁度佳い』と云ふ説を固持してゐたので、このセオリーを犯す者は、絶えず叱言を云はれたものである。所がヒネクレ者のブローチーは一向に頓着しないで、態と減茶振りを續けるやうな事もあつたので、或日ハンロンは彼を呼びつけて『今後球を待たない惡癖を正さないならば、相當の罰金を課するより外はない』と厳かに言渡した。

軈て野球語で所謂危機（ピンチ）の時期が來て、是非彼の一撃を必要とする場合に臨んだが、彼はいつもに似合はず悠々としてボックスに立ち、悉く球を看過して、至極簡單に三振を取られて引上げた。ベンチに歸つてから、彼が監督に言つた言葉が振つてゐる。

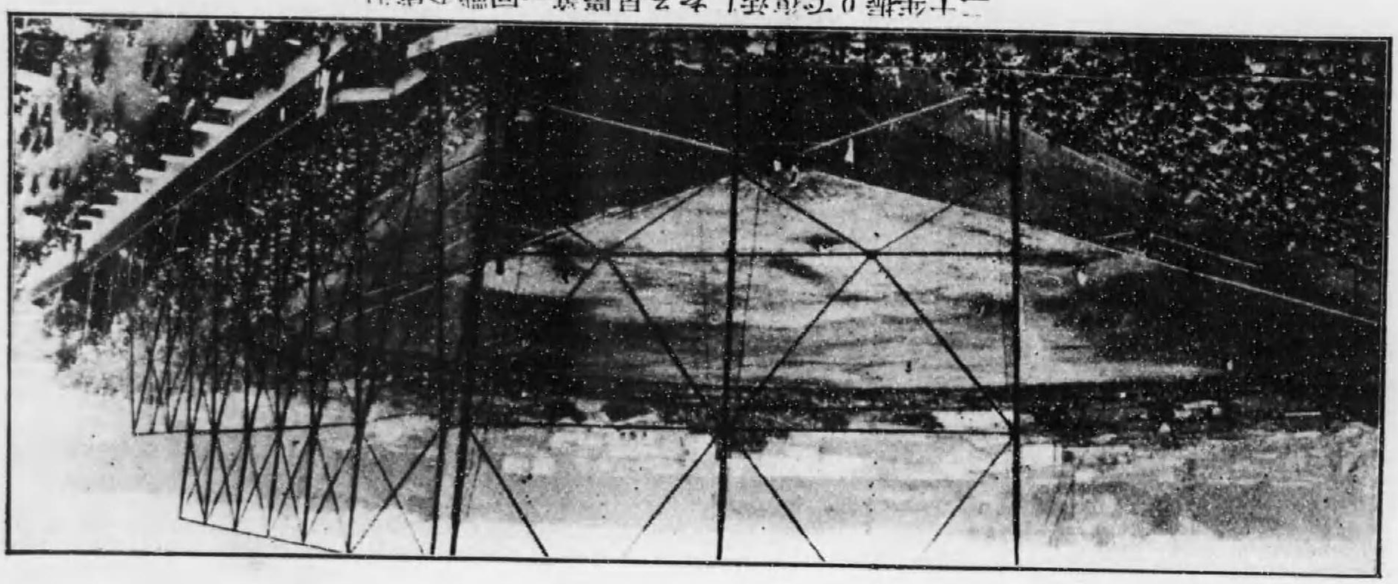
目出度い握手

二十年の確執解けて

早大主將　山崎君　　慶應主將　山岡君



早大チームの渡米を決したる第三回早慶戰
（明治三十七年十月三十日早大運動場にて撮影）



二十年振りで復活したる早慶第一回戰の盛況
（大正十四年十月十九日）

『御註文通りに球を待つてゐました、嘸御滿足でせう、餘程ホームランでも打たうと思つたのでしたが……』

早慶戰の回顧

二十年來の再戰に際會して

早慶戰は二十年來確執の衣を脱いで今秋目出度く再戰することゝなつた。

思へば長い歳月が反目の間に流れたものである。それも選手同志が殴り合ひをしたと云ふ譯でもなく、應援が斬り合つたと云ふのでもない『形勢不穩』の一點張りを押通して先づ慶應方から中止を申込み、其儘二十年をひた押しに押し進んだのである。日本人は氣が早いと云ふが、その確執、緩漫、遲鈍の程度は、遙かに支那人以上のものがある。

時は最後の審判者である。流石に反目し合つてゐた早慶の運動選手も、時代の潮流には押流されるものと見えて、先づボートを皮切りとしてテニスをやり蹴球をやり、最近では陸上競技、而もそれ等が數回を重ねて何れも順調に益興味ある對抗振りを見せてゐる。此間何の因果か、野球

のみが取殘されてゐるのは如何にも辛いやうな氣がする。また取殘されることが無意味極まるやうにも見えてならぬ。三田派の若き人々は、此に見る所あつてか、遂に今秋復活の使者を早大に送つて正式にその旨を通じた。早大はいつでも戰ふとこれに應ずる仕度はしてゐる、天下の敵を選ばざるが戸塚健兒の特長である。忽ち快諾、遂に立派に久方振りの握手が行はれたのである。

外人の抱く誤解

早慶戰の中止に關しては、嘆ずべき誤解が米人の間に傳へられてゐる。それは先年來朝したるハンター野球團の監督兼審判員たりしモリアリチー氏が歸米後發表したる東洋の野球觀の中に、左の如きものが記載されてゐる。

『日本のフワンが米國のそれと異つて頗る嚴肅の態度で野球を見、且つ選手自身も審判に對して頗る紳士的な事は、今を距る十數年前、早慶試合が行はれた時、審判の宣告に就いて双方非常なる葛藤を生じ、數千のフワンが場内に入り亂れて一大鬪爭を開始し、漸く巡査の力で鎭撫された時には、數多の死傷者が殘されてゐた。この苦々しい經驗によりて洗禮されたるフワンは、其後審判の宣告を尊重し、當然興奮さるべき場面が目前に展開されても、せい〳〵拍手を以て迎へるが如き習慣を養ひ得たのである。而して前記の如き大紛擾により十有七年間同一グラウンドに立たざる東洋の二大私學を見るに至つたのである』云々。

因にこの實話は早大野球部長安部磯雄教授に直接に聞いたものであると裏書してある。安部氏は英語に堪能な人であるから、決して前記の如き說明はしなかつた事と思ふが、實際殿り合も、大混亂もしなかつたこの試合が中止となつたに就いては、モリアリチー氏も想像が附き兼ねたので、前記の如き早合點をしたものではあるまいか。

三田山上のノック

サテ早慶相見えざる事二昔となつたが、當時の記憶を辿つて見ると、兩チームが初めてバットを交へたのは、今を去る三十六年前、即ち明治二十三年十一月二十日で、場所は近頃野球には使用されない綱町のグラウンドであつた。蓋しこの運動場は早慶戰が行はれるに就いて新らしく出來たもので、その以前は所謂三田山上の短冊方をしたる、坪數にして約千四五百坪もあらうかと思はれるやうな狹い所で練習してゐたもので、北の端から球をノックすると、稻荷山の樹の間に飛込んだものである。其頃はノックを遠くへ飛ばせば飛ばす程偉く思はれた時代であるから、三

田の人々はどうかして稲荷山へ打込み度いと思つたものである。

大澤長蛇を生ずと云ふが、必ずしもさうではなく、城南の覇王三田チームは、かゝる狹隘なグラウンドで育ぐまれ、今日の基礎を作つたものである。夫れでも當時の慶應は私學野球圏の牛耳を取り、一高にこそ勝てなかつたが、其他のチームにはヒケを取らなかつた。これは同チームの有する野球の歴史が與つて力あるもので、明治十四五年頃から新橋倶樂部、溜池倶樂部、波羅大學（今の明治學院）英和學校（今の青山學院）或は一高野球部の創立時代にかけて屢覇權を爭つた餘勢が依然として持續してゐたからである。

三田の進境

されど其頃三田軍の有する力量は、今から考へると大したものではなかつた。卅四年の東海道遠征なるものが總てを語つてゐる。其頃三田は龜山渡邊の好バッテリー（龜山君はアンダー・スローでなか〳〵立派な速力とコントロールを有し、渡邊君は小柄ではあつたが頑丈作りの好打者且つ主將であつた）を得たので、横濱のアマチューア倶樂部を破り、勢に乘じて東海道遠征なるものを企て五戰五勝の好成績を得て、最後に東海道の覇者愛知一中と戰つたが、十一對六の大敗をなした（此時の選手で早慶戰に出陣した人は宮原、時任、柳、宮本の四氏である）この大敗にも拘はらず、三田は非常な好成績を得たものとして頗る自信を得た結果時の覇者一高に押かけたのである、彼等の野球が中學程度から少し優れた位のものであるは、この一事を以ても想像する事が出來る。向陵との試合は十三對十で敗れた。併し三十六年に行はれた第二遠征には、大垣、三高、京都一中、關西學院、六高、愛知一中などを完全に叩きつけて男振りを擧げた。此時代は最早中學の野球でなく、見違へる程の發達を遂げてゐた。投手は後年早慶戰時代の主將にして投手たる櫻井君であつた。

慶應が龜山渡邊のバッテリー時代に、記者は二三度三田へ遊びに行つた事がある。其頃三田に田邊貞助と云ふ元氣な慶應式の好男子がゐた。此人は何う云ふものかゴロを非常に恐れてどうしても正面から取る事をせず、左右の何れかにかはして取る癖があるので其頃の主將宮原君が再三再四注意するがどうしても聞入れない、流石の宮原君も困り拔いて、記者に忠告をして呉れと依頼された事を記憶してゐる。主將の忠告を容れぬ人が、門外漢の云ふ事を聞く筈はなく、田邊君は依然として一流の取り方を續けてゐたのである。

早大チームの出現

斯樣に慶應が漸く中學野球の範圍を脱して、動もすれば一高の堅城を危くせんず勢を見せて來たとき、彗星の如く現はれて斯界を驚かせたものは早大野球部であつた。早稲田は三十五年に專門學校の舊名を脱し、早稲田大學と改名するに及び、その名に憧憬して集まれる生徒の中に、相當中學界で鳴らした野球選手を認めるやうになつた。押川清、森本繁雄（郁文館）河野安通志（明治學院）獅子子謹一郎、小原益遠（盛岡中學）泉谷祐勝（神戸一中）記者も青山學院を出てこの仲間に入り、選手の末席に列した一人である。早大の野球部史は、早稲田大學の名が呼ばれると同時に、その一頁が綴られたのであるから、歴史としては何等誇る所がなかつたのであるが、チームを組織した選手は、何れも一方に雄飛した人々で、宛かも大阪の陣中に後藤又兵衛あり薄田隼人あり伴團右衛門があるたやうなものであつた。故に全體としての力量は甚だ疑問であつたが、個々の技倆は多少認められてゐたので、新興の早大野球部は、未だ戰はざるに可なりの刺戟を斯界に與へずには置かなかつた。

新に産聲を擧げたる早大の新チームが、無銘新刀の切れ味を試むべき大切の試合は、卅六年の秋もまだグラウンドに霜の色を見ない頃行はれたる横濱アマチューア倶樂部との一戰であつた。其の頃のア倶樂部は大した力量の持主ではなかつたが、兎に角一方の權威で、これを破らざれば我が野球界にチームとしての存在は認められなかつた。即ち斯界のバロメーターであり、試金石であつたのである。

ア倶樂部の野球チームは横濱在住の外國人（重に米國人）を以て組織されたもので、一時はブレイキなど云ふ凄いイン・シュットを持てる投手などゐて、其頃青井時代から引續いて覇權を握れる一高勢を尠からず苦しめたものである。早大が勃興した頃の同倶樂部は辛うじてチームを作り得る程度のもので、云はゞ氣息奄々、日一日と終焉を急ぎつゝあつた時代である。當時の主將はメリマンと云ふ六十歳位の老人で二畳手を勤め、霜の如き頭髪を見せながらも、流石は運動國の國民に耻ぢず、若い者の間に立つて元氣に活動してゐたのは、早老の邦人を慚死せしむるには十分であつた。こんな調子であつたから早大は易々とア倶樂部を破り、引續き不振はこのチームを襲つてゐたと見え、それからと云ふものは態々横濱迄行つて外人を捻る物好きのチームもなく、いつとはなしに煙の如く消えて行つたのは憐れであつた。

疑問の謎

同倶樂部がありし日の權威を物語るに最も相應はしい一の挿話がある。一高は守山時代だと思ふ、丁度投手の位置がボックスからプレイトに變つた頃で、その爲め投手と打者との位置が四五尺も近くなつた。所が外人の投手は新規則が指定するプレイトの後方一歩の所から踏張つて、その踏張る足がプレイトに觸れねばならぬと主張し、規則に書いてある『投手板の前方』と云ふ文字を二壘寄りのやうに解釋したのであつた。成程プレイトを基準とすれば本壘の方が投手板の前方となるが、本壘に立つて見れば二壘の方が前方と見られぬ事もない。何と云つても英語は先方が達者と見るより外はなく、一高軍はその解釋に任せて試合をした事がある。されど流石に早慶はその解釋に從はずして投手はプレイトの上から一歩踏み出して投げ、對一高戰にもその通りを繼續した。されど何となく氣がゝりである。眞の『投手板の前方』は何れであらうか、迷はざるを得なかつたのである。

併しこの問題は早大の第一回渡米によりて、雪に熱湯をかける如くに解決された。彼地の投手にして一人も投手板の後方からするものを見出さなかつたのが何よりの證據である。そこで記者は歸朝後萬朝報紙上に之を發表し、それで總て問題は起らぬ事と安心してゐた。然るに尙執拗な論者があつて、記者の發表を論駁し、英語の解釋上『投手板の前方』は二壘寄りでなくてはならぬと主張したのには尠からず驚かされた。されど世間はこの種の論客に一瞥をも與へずしてどんどんと事實その物を認めて進んだので、反駁は寧ろ默殺された形であつたが、かゝる事件を惹起した原因は、ア倶樂部の選手であつた事程、その權威は認められてゐたものである。先年問題となつた谷口投手の逆モーションが、モリアリチー審判の一語で解決される迄、前記の事件と略同樣の經路を辿つたのも面白い對照である。

野球の民衆化

閑話却説兎に角早大はこのアマチユーア倶樂部に打勝つて多少の存在を認められたので、野球を一高の如き官僚的の雲上高き所に置かず、私學の手に移して、もつと民衆的なものとし度い野望に燃えて來た。さうするには私學の覇者慶應と結ぶに限る、結ぶには戰ふより外はない。若しこの二大私學の權威が相搏つに至らば、野球に對する民衆の興味、嗜好は翕然としてこの二大チームに向はぬ道理は無い。其所に打寛ろいで見るべき野球の民衆化が伴はねばならぬ。吾人は一